

378
298

後藤朝太郎著

支那の男と女

現代支那の生活相

大東出版社



0038140000

0038140-000

特220-412

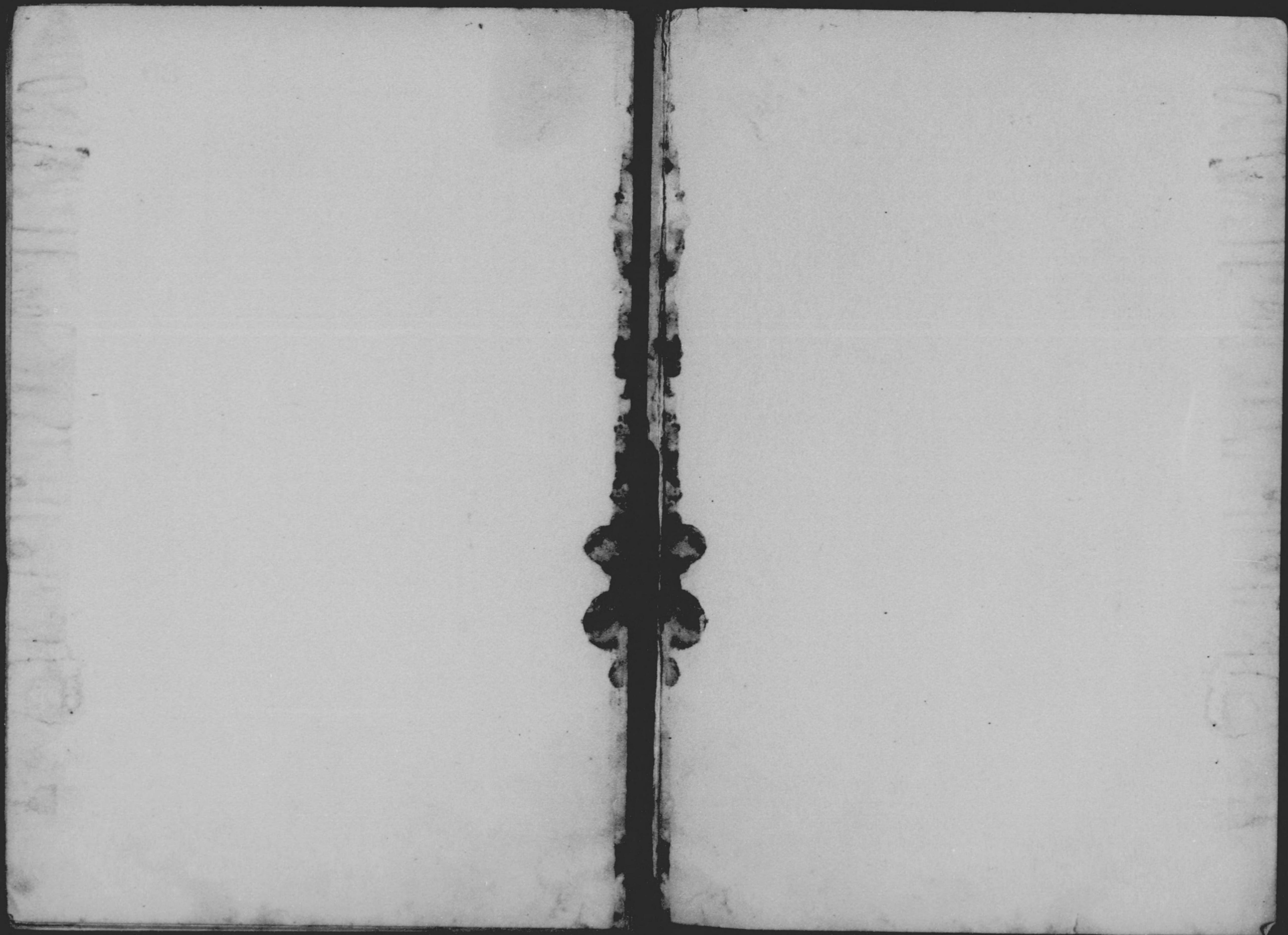
支那の男と女

後藤朝太郎・著

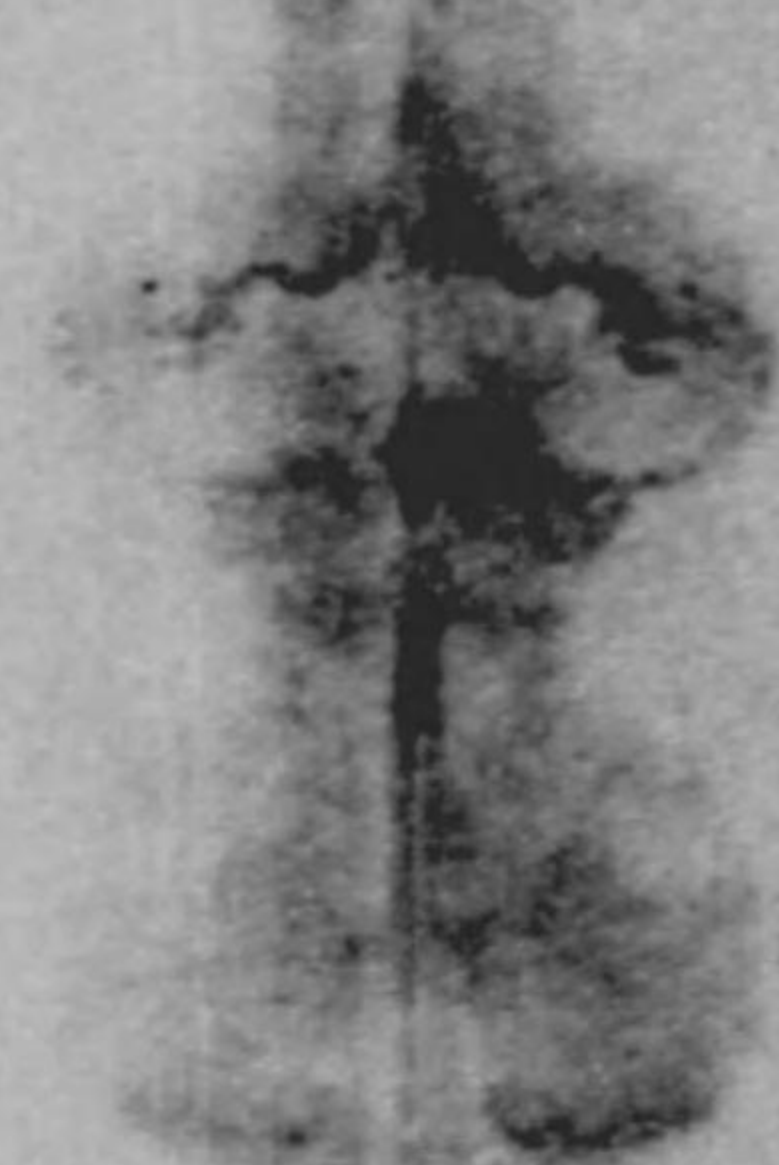
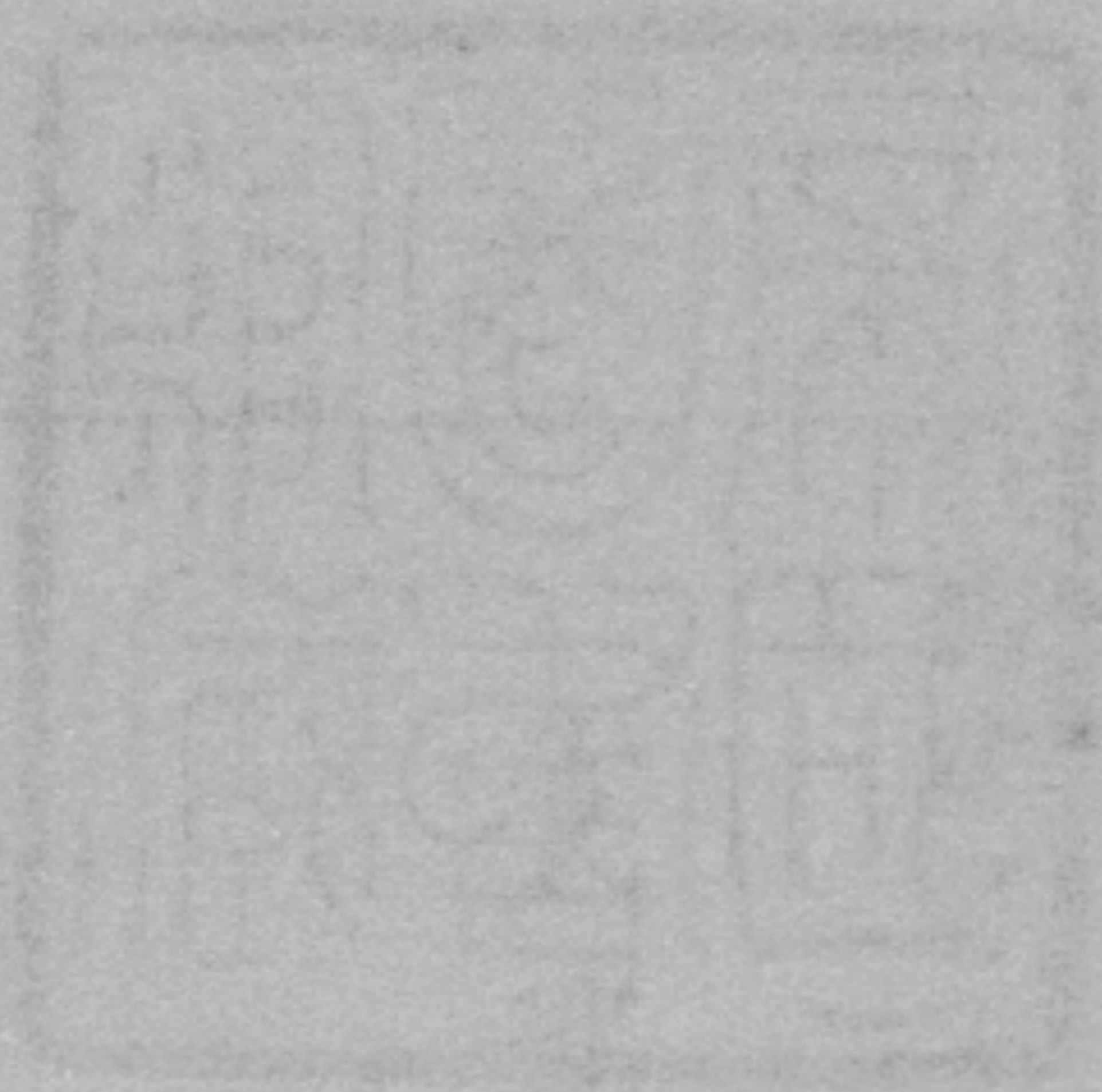
大東出版社

昭和12

AGG



63



特 220
412

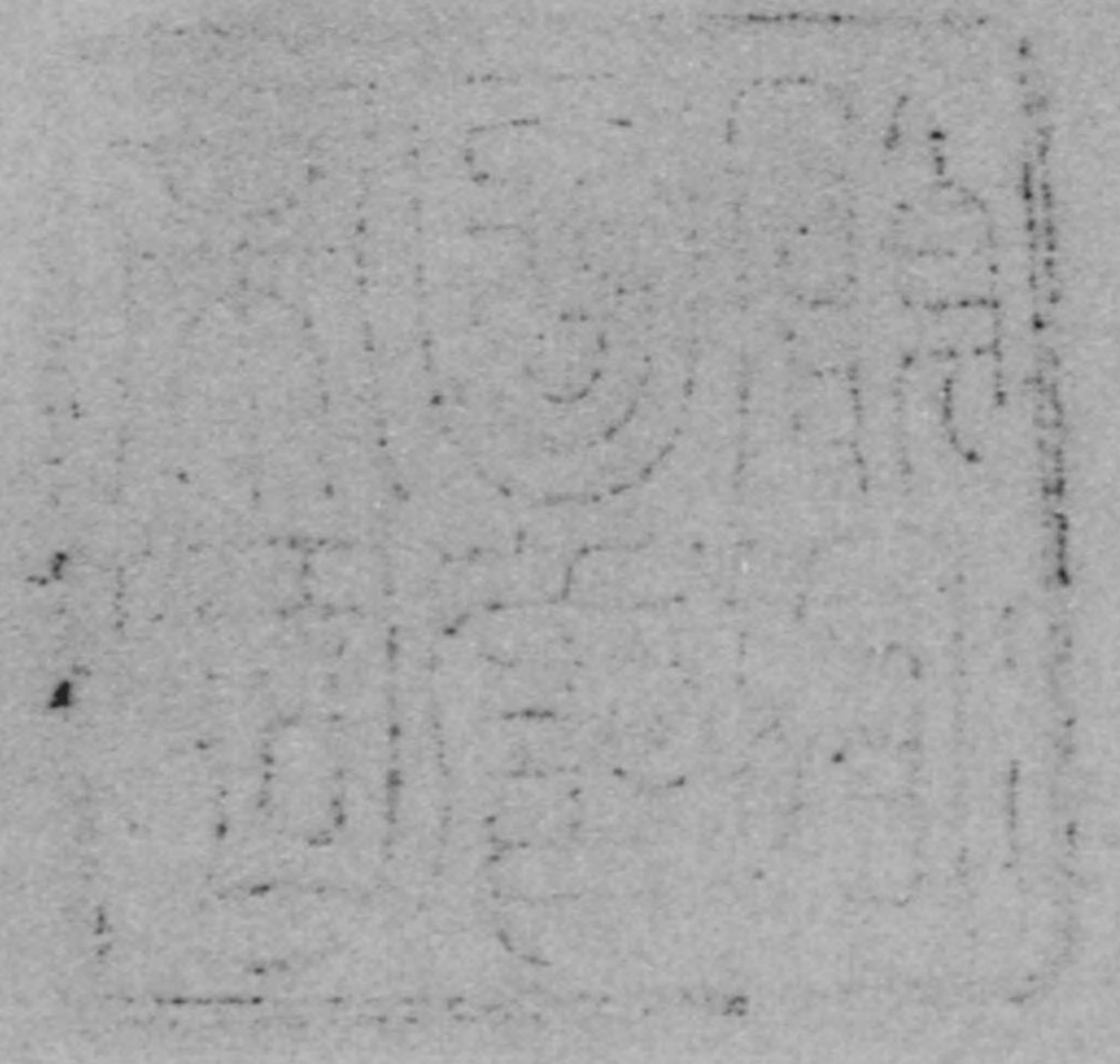


後藤朝太郎著

那の男と女

|| 現代支那の生活相

大東出版社



阿片のむら女



妙齡の中華民國內で、良家の家庭樓上の薄暗い室に鎮じ籠り、あたり煙毒の魅惑に浮身をやつしてゐるものがある。日一日と煙草、豆ランプ、阿片膏の臭味を芳ばしく感じて来て、手の爪の色さく淡褐色に焦げて来る程、その道の三昧に墮入る。子孫を救し、國を滅すものは、かうした大煙の魅力以外に何物もないであらうと思ふ。

阿片と心中する中國人

序に代へて

今日の日本は支那を本當に理解することを國是としてゐる。むづかしい國策だの、机上の親善論だのと云ふことよりも、眞に支那が判る人の一人でも多くなつてくれることが、只今の日本にとつて急務でもあると云へる。

支那のことが本當に判る爲めには、あの大陸の風土風物がすつかり手にとるやうに解せられなくてはならぬのであるが、更に大事なことは四億八千萬の大陸住民の、人情氣持をよく解することにゐるのだ。支那の民族性の判つてゐなかつたばかりに、日本では朝野を擧げてビント外れの事ばかりこれまた繰返してゐたのであるが、その方面を深く掘りさげてまいるには、出来るだけ人情の機微に觸れてあれこれとうまくメスを入れて行かなくては、本當

の検討は出来ぬのである。

大きい社會上の動き、國家の推移、時局のしめ括り、日支の提携、どの方面から見ても、かうした有意義のそれ／＼の場面は悉く皆その人情の機微によつて支配されてゐる。それほど大事な人情のきはどい處と云ふものは、固より支那の婦人生活から出發してゐることが多く、漢民族の女性の動き、女性の心持と云ふもの位また古來、その表となり裏となつてきはどい樞機を演じてゐるものは無いのである。漢の王昭君にしる、唐の楊貴妃にしる、清の西太后にしる又今日の宋美齡夫人にしる、實に其の舞臺面に於ける独自の重要性は、それぞれ千鈞の重みを見せてゐると云へる。

現代の支那を見、將來の支那をトせんとするもの、必ずしも女性の方から見る角度ばかりが唯一の視野だときめてゐるわけでもないが、しかしとかく今日の支那觀察がむづかしい政治外交、財政經濟と云ふ肩の凝る方からの見方

をしてゐるもののみが多い。そしてその内面生活の方から柔かく而かもなごやかな事實の検討を行つて、その方から見て行かうとするものは割りに少ないやうである。

自分はこの意味でかつて「支那の體臭」なる一書を出してゐたが、時代の進むにつれ増刊の必要にも迫られ、又世間からも各方面からの要求もだしたがた、この度改題の下に更に支那研究者に向つて一餐を乞ふこととなつたわけである。これからの日本はどうしたつて支那のコケ脅しの表面的解説を以つて満足の出来るものでなく、出来るだけ相手の心持をシカと掴むこと、又その人情の機微をよくよく察してそこに思ひを致すことを、先づ以つて心掛けなくてはならぬのであると信ずる。

江湖の讀者は、支那事變の締め括りについて國運を賭して打ちかゝつてゐるこの我が國の現状にかんがみ、その人情の裏からかうした痒い處に手の届

序に代へて

四

くやうな、支那民族心理の幽玄なところを掘りさげてもらひたいのである。敢へて本書を日本のインテリ諸公に提案し、將來の東亞の平和幸福を期待したいと思ふ次第である。

昭和丁丑十二年九月 漢口
上海の時局舞臺を濳り抜けて

東京 後藤朝太郎

しるす

目次

一、内房の話	一
支那婦人の氣持	一
婚禮の風俗	四
妻を買ふ	八
家庭の様子	一三
不老長壽と仙藥	二〇
内房生活の魅力	二三
嬢天下の支那	二五
纏足	二七
茶室と書院の正體	三〇
装身具五百萬弗の花嫁	三三

二、山水歡樂情景……………三七

- 歡樂第一主義……………三七
- 夜の魔都上海……………四一
- 莫産を背負ふ女……………四七
- 南支情緒夏の夜船……………四九
- 民船に依る田舎旅……………五三
- 内河船行の騒ぎ……………五七
- 平康里の魅力……………六〇
- 秦淮の畫舫……………六三
- 南支水郷の秘境……………六六

三、支那宿物語り……………七三

- 支那宿の氣安さ……………七三
- 廁の花嫁……………七九
- 公寓宿のランデブー……………八五
- 廁考……………八八

四、支那尼寺風景……………九三

- 支那寺院の特異性……………九三
- 陽氣な尼寺風景……………九五
- 深山の人間……………一〇〇
- 登山客に親切(?)な尼姑……………一〇一
- 小孤山の尼寺……………一〇四

五、支那風呂……………一〇七

- 支那風呂趣味……………一〇七
- ゆつたりした支那風呂氣分……………一〇
- 風呂に入るにも大陸的……………一一五
- 脱衣場風景……………一二九
- 裸で湯歸り……………一三四
- 支那風呂の味……………一三八

六、恍惚の阿片境……………一三二

- 阿片は支那人の生命……………一三二
- 船上の阿片室……………一三三
- 滿堂春を生ず……………一三五
- 阿片室即客室……………一三九
- 船客奇習のいろく……………一四〇
- 阿片を忍ばせるアメリカ士官……………一四八
- 阿片痛の醉客……………一五〇
- 滿洲國と阿片問題……………一五二
- 家庭内の阿片室……………一五五
- 阿片の密輸と煙管……………一六〇
- 阿片は支那の財源……………一六三
- 表は表、裏は裏……………一六六

七、パイプの煙……………一六九

- 香煙・香賓・香茶……………一六九
- 嘯くパイプ賣り……………一七六
- 小孔から覗いた支那人氣質……………一八一

八、支那扇と虫籠……………一八五

- 支那は支那……………一八五
- 護身具としての扇……………一八六
- 旅館の賣場に扇を漁る……………一八九
- 虫を好む支那人……………一九三
- 珍型虫籠……………一九七

九、古鏡の味……………二〇一

- 鏡の研究……………二〇一
- 瑠璃廠で見た珍品……………二〇四

喇嘛寺の歡喜天と古鏡……………二二六

一〇、商店街と商人氣質……………二〇九

臺所から洗濯まで……………二〇九

支那商人氣質……………二二三

それ／＼に組合組織……………二二八

支那商人の腹の内……………二二九

一一、支那獵奇行脚……………二三五

グロ味満點……………二三五

戦争も商賣の一變形……………二三三

武装巡官の飾り銃……………二三七

共產黨の剷除彈壓……………二四三

死刑前の囚人……………二四六

叶はぬ外交振り……………二五〇

享樂の極致……………二五五
長命術の秘法……………二六二
獵奇行脚の刺戟……………二六六

一二、支那の新しい女……………二七一

新しい女の生活……………二七一

社會人としての女……………二七五

宋美齡夫人を中心に……………二七六

よく働く支那婦人……………二七九

支那婦人となつた日本婦人……………二八〇

一三、文字から見た支那の男女……………二八三

女の字……………二八三

安の字……………二八四

女字の原型……………二八六

男の字……………二六七
 祖の字……………二六九
 姐の字……………二五一
 糸し糸しと言ふ心……………二五二
 貝の字……………二五五

支那の男と女

(現代支那の生活相)

後藤朝太郎著

一、内房の話

支那婦人の氣持

先づ支那婦人の事から語つて見たいと思ふ。支那の婦人の心持は、日本で考へて居る家庭の婦人の心持とは、大分様子が變つて居る。支那では十分な統計が取れて居ないので、精しいことは分らないが、大體男子よりも婦人の方が少い。其の上配偶が不平等になつて居る。無いものは絶對に有つてゐない。獨身で居る者は大體その獨身で一生涯を暮らすといふことを天命としてあきらめて居る位である。現に山東の苦力の如き、或は湖江方面から出てゐる苦力、南支地方から出

る労働者、それ等は多く婦人を持ってない身分の男である。

さういふ者が一方にあるに拘らず、他の方面では非常に澤山な夫人を持つてゐる。第一、第二第三、第四と數へて二十人位も有つて居る人が相當にゐる。山東の督軍をして居た例の張宗昌の如き、十七番目の夫人は日本婦人であつたさうである。それは正式に貰つたか、どうかは別問題であるが、兎も角多數有つといふことが、社會的に云つてその人のプライドになる。自分の身分を證明するシンボルにもなつて居る。尤もその數の中には自分で求めたものばかりではない、進物に貰ふものもある。贈物として貰ふのだから、随分妙な譯である。日本でいへば菓子箱を戴く形式の少しく度の進んだものである。さういふ關係で、幾らでも數が殖えて來るがさういふ連中にはそれ／＼部屋が別々に取つてあるので、俗に所謂側室として、奥深く夫人部屋に住まつて居る譯である。

唐の長安の都には三千の宮女が宮中に起居して居つた。三千とは恐らく誇張した數であらうが、割引して考へても何百人といふ數はわたことと思ふ。さういふ婦人の境遇からいふと、支那の上流の社會に於て、夫人は大變自分の立場、自分の境遇に就て、一種のプライドを持つて居

る。普通の家庭に於ける婦人を見ても判る通りその権力は頗る強い。どの家庭を見ても、多くは所謂嬪天下であるといふことは、恐らく斷言してもよいと思ふ。少くとも、私がこれまで見て居る南北各地方の支那の家庭の空氣は確にさう云つてよからうと考へる。

第一支那の婦人のつゝましやかな、控え目な氣質はどうかと云へば、さういふ事は文章の上には屢々見える、必ず美人を褒める形容の言葉に云ひ現はされてゐるのであるけれども、事實に於て女子、殊に夫人が亭主に向つたときの態度は、その心の奥底に／＼ましやかといふ心持があるかどうか、私は疑はしいことと思ふ。それは夫人の顔面を視れば判る。目つきを見ても分る、或は口元にもそれが窺はれる。従つて家庭の話の様子を見てゐても、多くの場合に男子を何とも思つてゐないやうに見えてゐる。此れは上流であつても中流であつても似たものである。

婦人の氣持はさういふ風であるにも拘らず、男子の方がその上手に出るといふことはどうも出來ないらしい。これについては、種々の穿つた想像も逞しうすることが出来るが、支那では男が婦人を得るといふ事に就ては、一と通りならぬ苦心を要するからである。

婚禮の風俗

夫人を娶ることは一人前の男子ならば必ず行ふべき一生のうちの最大役目である。女をひとり貰ふのは何でもない事のやうであるが、それにしても費用が中々かゝる。宴會を何回でもやらなければならぬ。その點が第一に骨である。それから家の格式もあり、種々なる社會的の事情が複雑になつて居るので、夫人を迎へるといふことは容易ならぬ事業になつて居る。日本で自分共の考へてゐる氣持ち以上に重大なる問題となつて居る。

支那では一通りのことでは夫人を迎へることは出来ない。凡そ普通の家庭でも、子供が生れると直ぐ男の子であればその配偶者を考へる。それから次第に成人するに當つて、その家が左程經濟の豊かな家でなければこれに努力を集中する。細君を貰ふといふ目的に向つて一生懸命貯金をする。それは七八つの子供の時からさういふ氣になり、人にも公々然と云ふのである。

それから夫人を迎へる婚禮の話だが、支那では夫人を迎へるとはいはないで、夫人を買ふといつて居る。それは男子の方で費用萬端の支度をしなければならぬからである。その結婚費用金を

先方へ渡し、而して花嫁さんの方でも、同額或ひはそれ以上の支度をしてやつて來るのである。

支那の婚禮については上流、中流それ〴〵種々な風俗の違ひもあるし、また地方による差異も著しい。浙江省の田舎に舟山列島といふ群島があつて、そこに定海といふところがある。この

定海を中心として、その地方に行はれてゐる婚禮の様子を見ると、一定の期限を切つて要領のよい契約的婚禮をする。普通三年間を一切りとして、三年間だけ夫婦になる。三年が済んだら他人になる。その間に出來た子供はどうなるか、女の子なれば俺が貰つておく、男の子なれば要らぬといふやうな話し合ひで、片がつく。さうならない場合には、その地方の佛蘭西人の耶蘇教會堂へ持つて行つて子供をくれてやる。その教會では子供を買ふ豫算が取つてあるから、それで子供を買ひ取る。養つて、大きくする。それから女の子であれば刺繡を教へる。ハンカチーフのタツチンなどを教へて相當の仕事を覚えさせる。その結果教會は自分の處の成績が擧る譯で、佛蘭西本國へその事を報告し、多數收容して居るといふことをいつてやれば、來年の豫算も餘計に取れるといふやうな事で何の苦もなく收容が出来る。従て二人の間に子供が出來ても心配はなく、譯なく片づく。そこで夫婦二人は別れる。或ひは引繼いであと更に三年の約束をしても宜しい。こ

これは法律で定めてある譯ではないが、地方の不文律で習慣的にさう云ふ事に定つて居るのである。所が舟山列島から甬江を遡つて這入る寧波の町、こゝは弘法大師が昔、上陸されたところ、其の寧波城外、新馬路のあたり、汽車の踏切の傍に可なり廣い墓地がある。私は寧波へ遊びに行くと、必ず一度はそこへ行つて見るが、墓地は随分廣い。土饅頭の上は芝生で蒼く蔽はれて居るがその側に約二尺五寸位の菰包みが棄てゝあつたり、或は三尺位の細長い箱が棄てゝあつたり、それが墓地のあちらこちらに散見してゐる。

試みに靴でそれを蹴つて見ると、すぐ蓋が取れる。中には頭蓋骨だの、肋骨だの、または肉の半分位腐つて居るのがある。さういふのが幾つとなく數へ切れぬほど見出される。いづれ鳥でも啄つたものであらう。菰包みの隅が解けたりして、中身の現はれたものもある。寧波の地は盛な商業地であるが、又一方の方は相當風流なところであるといふ評判であるが、その事實は兎に角として、さういふ子供の遺骸の棄てゝあるのは決して珍らしい事實ではない。

北支那の方では、赤ん坊が生れて間もなく死んだのは親不孝であるから、親は葬式などしてやらないといつて、裸のまま郊外に棄てる。若しその爲めに葬式などしてやつたならば、魂がまた

あとの子供の生命を誘ひに來ると云ふ迷信のあるところから棄てるのであるといふ。寧波方面ではさういふ意味であるか、どうか知らないが、或ひは努めて首を絞めるのかも知れない。先般も寧波の税關のスコットランド人でミスター・ギヤツプといふ人の所へ遊びに行くと「あなたに風俗資料として差し上げやうと思つて寫眞が撮つてある」といふ。「その寫眞は近處の鎮海の或る家庭に双首の男の子が生まれました。父親はこれを見て首を絞めた。そこへ自分が行つて寫眞を撮つた。珍らしいものでせう」といつて私にそれを呉れた。

子供の活殺は自在で何とも思つて居ないやうな人もゐるのである。元々夫婦になる時もさう種々な理想を描いてやるといふ譯でもないのであるから、子供に對してもさほどでもないものがあるのも仕方がない。

支那の普通の婚禮は、初め息子自身は嫁の顔も知らない。それに就いて色々な珍談がある。花婿が、婚禮のときになつて、始めて花の如き嫁かと思つて顔を見ると、豈圖らんやあばただらけである。逆もこれではと思つても、親が定めたものだから反對がいへない、といふやうな話は、北京あたりでも、地方でも、時々聞かされる。大體さういふ組織になつて、婚禮の行はれる場合

が多いのであるから、本當の心のうちには、濃やかな情緒をたゞよはせてゐるか何うかといふことは餘り判らない。

妻を買ふ

中流以下の家庭になると、かなりひどいがある。

支那戒克船の間でこんな話を聞いたことがある。あの金山寺の塔の下に船頭達が集まつて、

「この間百弗ばかり儲かつてな、僕の婢を二百五十弗で買手がついた、おれは百五十弗で買ったのだが、好い相手がついたから賣つてやつた、御馳走をしよう。」

さういふ話をして居るのを聞いた。至つて簡単な話である。

元々人間として扱ふのではない、品物扱ひである。床の間の飾りとなると、日本でも金をかけると同じく、細君といふものは奥の部屋に飾つて置くものである。一つのシークレットだといふ考へが、上流になればなるほどあるが、下々では尙更それを品物視する考へがある。

夫婦間の婚禮の様子を見ても、そのとき既に風俗上に於て頗る變な事が随分ある。尤も日本だ

つて婚禮の裏面には調べにくい點が色々あり、さう裸にまでして調べあげるといふことは困難であるが、支那では習慣上、随分婚禮をした後で、悲惨な、精神的に氣の毒なやうな、併し又面白い、おかしいやうなことが相當ある。

この婚禮の正式の方法といふのは、繪巻物にもよく描いてある通り、花嫁さんは、必ず紅い金爛緞子を切つて周圍を包んでゐる轎子に乗つて来る。随分長い道中であると、途中で轎子を出ることが出来ず、随分困るといふやうな類のつまらない珍談もある。花嫁さんは轎子の中に閉ぢ込められたまゝ来るのである。そのかごの中からはそとが一寸見えるやうに出来てゐるが、外からはどういふ花嫁さんが乗つて居るか全く分らない。その花嫁さんが、その紅い轎子に乗つて来ることは、第一夫人の必然的條件となつて居る。第二夫人以下のもの、或は進物として贈られた側室連は、すべて紅い轎子には乗つて来られない。

紅の輿に乗つて正妻の御入來のときは、その式のある家の入口に来ると爆竹の祝ひを受ける。耳をつんざく如き盛んな音をボン／＼させて悪魔拂ひをする。その魔除けをしてから中へ入つて来る。第二夫人以下はさういふやうに正々堂々とお駕籠に乗つて、爆竹ではらひ給へ、淨め給へ

をしてやつて来るのではない。變則でやつて来るのであるから、第二以下の側室の方は正妻に對しては頭が上らない。それだから、平素何か自分に有利なことを考へ出しては、正妻をやりこめるといふ傾があるらしい。

もし第一夫人に女の子ばかりで、男の子がない時には止むなく第二夫人の男の子を後嗣にして、自分の亡くなつて後に位牌を祭つてくれるものと定めるのである。それ故之が非常に重大なる關係になるものだから、その男の子を有つた第二夫人は鼻が高い。莫迦に威張る。さうすると第一夫人は内心に穩かならぬので大いに困る。そこで、

「お前さんはそんなに威張つてばかり居るけれども、この家へ來る時、紅いお駕籠へ乗つて來たんではないぢやないか。」

といふ。すると第二夫人はギヤフンと參つて降參してしまふ。

さういふ譯で第二夫人以下の夫人は區別がつけられてゐる。表面はいかにもよろしい。けれども實際に於て、精神的にはゴタ／＼がよくある。臺灣の田舎などで時々見ることがあるが、夫人同士の間には鉤を持つて追馳け廻つて居る場面を見たり、随分亂暴な有様を見せつけられることがあ

る。多くは大抵情氣騒ぎであるらしい。しかし之を廣く大きい處から見れば、普通の場合には皆よく折合つて家計は誰れがやる、交際方面は誰れがやるといふやうに、それ／＼分業的に別れて居るらしい。

支那の婚禮では、無論花嫁さんを迎へるには、處女を喜ぶことは何處も同じわけであるけれども、これは支那の俗間實際問題として随分得難い譯である。「男女七歳にして席を同らせず」と古から教へてゐるが、事實は席を同うしてゐる場合が多い。従つて現に處女でないものを、處女の如くに體裁を作るといふことに苦心がある。

揚子江方面の江南地方では、婚禮の時に、媒介者が、新郎新婦の部屋へ夜一緒に這入つて居る。それから鶏の雛を一羽持つて這入つて、それで宜い加減な芝居をやつて、花嫁さんの處女である事をお客様に對し説明するやうなインチキをやる。これは大分仲介人につかませて置かないといかぬといふ話である。或る時浙江の田舎へ行つてこの邊にはさういふ習慣はないかと聞いて見たが、この邊は違ふと云つてゐた。併し種々世間態を繕ふことに就ての苦心は、各地共に相當容易ならぬことのやうである。

婚禮の事は支那では吉事或は紅事と云ふ。何によらず皆紅を使ふ。衣裳は勿論のこと、花嫁さんの持つて行く嫁入道具や手提のやうなものから、また腰湯を使ふ盥、手洗ひ、總て紅い物を使ふ。おかしいのは四尺五寸ばかりの丁度ソーフア式の腰掛けであるが、これは婚禮の晩に使ふ。その上に横になる爲に使ふ臺である。これは直紅に塗つてあつて、新郎新婦の内房へ入つて見ると、大抵これが置いてある。時々自分はこれを指して「随分綺麗ですね」とひやかして見ると、花嫁さんはにこつと笑ふ。これは大抵婚禮の時の道具の一つに定まつて居る。さういふものが江南地方にはある。また馬桶と云つて、女用の西洋の便器みたやうな珍形をして居る一種の蓋物がある。これは婦人のベットの傍に必ず置いてあるもので、婚禮の時に持たせてやる。さういふ物まで色々の支度をして持たせてやる。

花嫁さんの道具の中に腰掛けやうのもので頗る珍らしいものがある。花鼓桶といふ。これは梓の木で拵へたもので、外部は赤、緑、金、銀等の漆で美しく圖案的に飾つてある。大さは大小種々ある。これは、婚禮の第一夜に使つた布を其の中に納める爲めのもので、まことに綺麗な桶である。山水、人物、宮廷の風俗等を現はしたもので實に結構なものである。一對づゝあつて之れ

を嫁入りの時に携へる。そして内房でも花嫁さんの部屋が一番高いところに置いておく。後では果物などを入れるものもある。お客さんが見えると花嫁さん手づからそれを取り出して皮をむいて客にあげる。あかんぼが生れた時は後産の胞衣を蓋物に入れて納める。兎に角子孫繁榮の爲に用ひるものだといふので、江南浙江方面の上流の家庭では、これを用ひるのである。

かく婚禮に依つて出来た新家庭の目標には、三つのモットーがある。第一は富貴萬年、第二は不老長生、第三は子孫繁榮、この三者が家庭に取つて一番大事なこと、あらゆる事は皆これから導き出されて来るのである。

家庭の様子

支那の家庭では、日本の家庭のやうに、若い者に嫁を取つてやると、すぐそこで家を別にするといいのではない。さういふ事は支那にはない。支那の家族主義は日本とちがひ、大體に於て一つの大きな門の中に陳なら陳、鄭なら鄭といふ大家族が幾戸も住んで居る。その爲めにいとこやはいとこが澤山居る。普通の家庭に行つても中流の上ぐらゐの家だと、三十人から四五十人位の家

族が居る。少しく上流の暮しをしてゐる家庭になると、百七八十人から二百人も居る。所謂大家族主義であるから、その門内には冠婚葬祭も絶えずあるといふ譯である。

従つて周囲の塀なども可なり広く取つてあり、共同の庭もある。食事の時など可なり賑はつて居る。さういふ大きな家庭では、その家の總本家の主人の居るところ、即ち主人の内房、枝の親族關係になつて居る主人の内房といふものが、個々別々になつて居る。支那の家庭の建築は日本とちがつて、大抵殿堂式であり、その中央には中庭がある。眞四角の庭であつて、その周囲に部屋が並んでゐる。一番大きな部屋が應接間になり、其の傍に書齋、主人の室、それから内房である。また召使の室は入口の門の側にある。

普通支那の内房の大きさは、日本の家の八疊乃至精々十疊位の廣さであつて、十五疊、二十疊と云ふやうな廣く取つてゐる内房は、あまり自分の知つてゐる範圍では見えなかつた。清朝時代の滿洲貴族や、或は宣統皇帝として滿洲皇帝がこの間まで居られた所の紫禁城内の御室の如きところ、かやうな所も見だが、上流貴族のそれでも矢張り狭く出来て居る。無論その裝飾の方はたいしたもの、天井は金銀をちりばめて格天井とし、之に龍の模様を入れ、柱楹にも飾りが施されてゐる。

併しその廣さに於ては、どこともに總體に狭く出来てゐる。尤も内房のことであるから、元來狭かるべきものであらうと思ふ。入口から這入つて大抵向つて右側、壁に添ふてダブルベット以上の廣さを持つて居る寢臺が置かれてある。

この寢臺は新しい家庭ではスプリングを使つて居るものもあるが、普通支那式のベットでは、棕相繩を細かくたてよこに織つたのが張つてある。寒中の防寒に對して別にカン(枕)の設備が出来てゐる。暖房がそれで取れてゐる。又メイチエル(煤球兒)を使つた爐の設備のあるところもある。

寢臺は床が板で張つてあるものもあるが、多くは上述の棕相か、又は籐で編んだものが用ひられ、其の上に布物があり、之には蒲團のうすいもの、これは煎餅蒲團で、まことに薄いものである。一寸以上の厚みのものは使はない。先づ大抵五分位のもので二枚重ねて置いてある。眞冬でもそれだけであるが、別段それでも夜半は寒くはない。それから枕は家庭によつて違ひ地方によつてもちがふが、南方であれば、福州の紅漆のかけてあるものを使ふ。これは殊に夏向きによしい。寢臺は江南地方は四本柱で圍まれてゐるのであるが、周圍と天井には春、夏、秋、冬とも

蚊帳がかゝつて居る。日本の蚊帳は下から這入ることになつてゐるが、支那の蚊帳は横から入る。晝は左右に開かれてあるが夜になると閉ぢる。夏は之に蚊が入つて来れば、馬の尻尾で拵へてある法子のハタキで蚊を追出す。よい家庭になると蚊帳その物は大きくて違ひはないが、周囲の柱に紫檀を使つてあつたり、梓を使つたりして、それに金、銀の象嵌をしたり、青貝の螺鈿のはいつて居るのもあつたりして、たいしたもののである。或ひは唐草模様が周囲にすかし彫りで現はしてある。さうして寝て居て手を伸ばすと云ふと、直ぐに畫帖でも繪卷でも、小説本でも、何でも需むる所のものが隨意に取れるやうに書物の棚が拵へてある。至つて怠けて居つても便利なやうに、そして氣樂第一主義に構造が出来て居る。

その枕頭には、またよいベットになると、植木鉢を置くやうな設備が出来て居るものもある。主に蘭の花の如き、白くて香ひの高い、昂奮させるものを傍に置く。それからベットの入口には一寸靴を脱ぐやうな臺の拵へてあるものもある。よいものになるとたいしたものがある。日本へ来て居たものにも驚く可きものがある。曾我廼家五九郎氏の住宅——震災前には藏前にあつたが、これは率直戦争のときに張作霖の使つて居つたものを渤海灣から持つて来たのだと云ふ事である。清

朝時代の貴族の家へ今日行つても、まだ／＼よい家具寢臺が澤山ある。

支那のベットは寛つたりしてゐるから、寝てゐて寢心持が如何にもよい。殊に冬の寒い時分に小便などベットから態々降りて行つてしないでもよい。便臺といふものがあつて、それを下から持上げて、當てがつて用足しをすればそれでよい譯で、まことに造作なく便利に出来て居る。それから先に云つた馬桶も必ずその傍に用意されてゐるから、部屋から、つまり一步も外へ出なくともよいのである。

それから内房は寢室であると同時に、ベットへ横に斜めに寝て、阿片を吸ふ。吸ふときは必ず煙管に火をつけて、寝て居て呑むのである。支那ではベット以外には横に寝そべつて休むところはないので、ベットへ寝て阿片を呑むのである。

内房は支那人の習慣で、他人は、極めて親しい友達でもなければ中は絶対に入れない。親しい友達が訪ねて来た時だと、應接間へは通さないで、いきなり内房へ通す。それだけの區別がある。支那人に親しい友達を持つて居るものは、

「麻雀をやりませう」

「あそこへ行つて胡弓を弾きませう」

「今日立つなど云はないで尙四五日もゆつくりしなさい」
等と勧められる。そんな時に、

「他の友人のところへまだ行くところがあるから」

といつたりすると、いきなり内房へ連れて行かれる。内房に通されて見ると、その壁には種々な楽器がぶらさげてある。どうかすると日本の京都美人の繪とか、自分の母親の肖像の引伸ばしなどが掛つて居るやうなハイカラなものもある。其れから子供のあつてはそれのおもちやなどが置いてある處もある。それからまた吸煙器、水煙袋などがおいてある。これには七寶燒或は白銅など種々の物がある。これは器の中に先づ水が入れてあつて、煙草の煙がその水の中を通つて出て来るのであるから、まことに煙に甘味があつて、柔かだよいものである。近頃は巻煙草を用ひる人も殖えて来たが、まだく地方では水煙袋の方が多く行はれ、又趣もあつて而かも經濟で宜しいのである。

それで内房に這入ると些とも遠慮がないから、随分ひどい話も出る。また女の方でも別に恥かしい顔をしなないで、相當合禮を打つて、男の三人や六人は向ふへ廻はしてはしやいだ話なども交換せられ、きやあくいつて面白い話題を出す。いかにも立てへだてのない空氣のあるところがよろしい。その内房へ通された親しみの暖かい氣分といふものはまことによい。勿論そこは光線の供給が悪いから暗い。暗いところに情の濃やかなところがある。

それに部屋には種々なものが置いてあつて狭い。麻雀をやる場合には八仙卓が二三臺もある。そこへ四人づゝで卓を圍んでやる。よくさういふ場合に引張り出される事があるが、大抵麻雀は晚餐前後から始める。間で食事が出る、八時頃から十時頃までかゝる。それが済むと又麻雀に移つて夜半二時頃に夜食が出る。さういふやうな風で、毎晩々々やる。チョツと馴れないものはやりきれない。體の競争である。だから體が続かないものが多い。

我々は大抵子供と遊んでゐる。日本から行つたおもちやなどを出して日本の話をする。或は胡弓を出して九連環を弾いてはどうかと云つて見る。麻雀の方はとてもやりきれないから、かうして子供と遊ぶ。それでなかつたら隣の部屋へ行つて寝てゐると、食事の時になつて起してくる。

麻雀の遊びにかけては皆根氣のよいもので、連日連夜その麻雀をやる精力と云つたらえらいも

のである。二晩位は寝ないで打ち通しにやつて居る。支那の内房の話は露骨な話であるが、冬は別として、眞夏になると、夫婦は全く身體には何も着けないで寝る。熱いので僅かに蒲團の薄いのをかけて寝る習慣になつてゐる。日本人の禪とか猿又に代るもので褲子といふツボンくらは穿いてゐるが、その褲子をも取つて這入る。

不老長壽と仙藥

家庭の内房に關聯して、一般支那の家庭で力を入れてゐるのは、「人間は此の世で長壽をする」といふ事である。この不老長生に關聯しては、支那人はあらゆる方法を研究する。周公百歳の酒或は長春酒、虎骨酒など、色々の藥酒も出來てゐる。周公百歳の酒は可なり南方に行はれて居る。次の長春酒、これも揚子江方面にひろく行はれて居る。虎骨酒といふのは名は恐ろしいがさまで飲みにくいものでもない。長春酒といふのは飲んで見ると、丁度山芋か自然薯かを摺つて盃へ入れたやうな工合にドロツとしたもので、我慢をして舌で口の中へかき寄せるやうにしなければ口中へ這入らない。さういつた酒で、飲みにくいけれども、寒い時などこれを飲むと、

其の一夜寝られない位に慟慟が盛に打つ。二十代の人が之を飲むと鼻血が出るといはれてゐる。可なり強いものらしい。

それから又六十年の間、藥草を食べさせて太らせた鹿がある。その袋角が靈藥となつてゐる。それは地方によつて違ふ。雲南の鹿は角が赤味を帯びて居る。四川や西藏のは銜色、琥珀色をしてゐる。何れも一匁三百テール(兩)といふ高い値段のものであるが、袁世凱でも、誰れでも、皇帝の位に即かんとする人は皆之を飲む。藥研で卸し、粉末にして、酒と一緒に飲むのだといふ。江南では杭州の清河坊の大藥房へ行くと、この鹿を養つて居る。非常に盛んなところで、支那四百餘州から注文があるといふ。六十年間養はれてゐるものであるが、袋角を頭蓋骨と一緒に取るのであるから、これは大層高い物になるのである。

次に支那の男子の理想としてゐるところは、大勢の婦人を御し、之を相手にするといふ事を目的として精力を作ることが眼目となつてゐる。それで總ての藥は精力を養ふことを目的とする。又精力を盛んにすることの秘傳を知つて居る道士が、各地で支那人の間に信用を得て居る。陰陽五行の説を操つて、道士仙人の仕事をして居る。さうして道士は藥を盛つてくれる。それを服して

見て、自分の身体の中の陰が減つて陽が増すと考へられる時は、病氣が治るといふ。それであるから、兎にも角にも陰陽を中心とする秘術が盛んである。だからまだ支那が科學時代に這入るなぞ云ふことは距離の遠いことであるが、精神的に藥のことを考へると、藥その物についてはそれほど重きをおかない。むしろまちないをして、子供の事を念する。夫人にして、男子が欲しい時にはこの藥、女の子が欲しい時にはあの藥といふ様なことをやつてゐる。不思議といふよりは、馬鹿氣きつた話のやうであるが、眞面目に之を信じてやつてゐるのである。

斯様に長生をするといふ事と、精力をつけるといふ事は、支那では何をさし措いても之に向つて全力を傾けてゐるのだから、支那人の其の方面にかけての努力は、察するに餘りありである。正月にはよく老舗などの店頭にも掲げられてあるやうに、大きな白髪の壽老人を祀り、長壽にあやからんとしてゐる。長壽そのものをシンボライズした壽星を理想とし、之を壁に掲げる。その時大抵壽星の一方の手には桃を持ち、一方の手には如意、馬蹄銀、或は鹿の角で拵へた杖を持つてゐる。桃の形は漢の武帝の時の西王母の話以來、いつも目出たいことに用ひられる。この繪がよく正月の部屋飾りに用ひられてゐる。牛の皮製で、赤い漆のかゝつたものもあるが、矢張り桃の形に出來

てゐる。それから内房などで使ふ水差、これも大中小色々あるが、何れも皆桃の形に作られてゐる。

湖南方面へ行くと、こゝには一種特別の村がある。雲南貴州のあの貴州へ入る川添のところにある村落であるが、そこには非常に女が多い。婆さんの多い所の有名な女村で、そこへ男が入るには、幾日間かの豚肉や鶏肉を一日に幾斤となく平げ、精力をつけたものでなければ行けないといふ傳説村である。

四川省に這入ると長壽といふ縣がある。涪州の上流百二十五支里の左岸にある不思議な縣である。こゝでは何子鳥を作つて居るものが多いとか、又不老不死の藥を作つて居るとか云はれてゐる。そこに居る人は古くから長生をしてゐるから、此の名があると云はれてゐる。重慶に行く迄に、必ずこゝは通過する所である。

内房生活の魅力

支那家庭の内房の内部はあらかた上述の如きものであるが、支那の社會に入つて、本當に支那の味を味はつてみると、つまりこの内房の延長とも見るべき感じのするものがある。これが眞

の支那である。

要するに支那と云ふ處は面白いところである。家の中であつても、外であつても、支那の老若男女の目標とするところのものは、つまり内房の気分にあるやうに思はれる。政治家にしても、軍人にしても、農民船頭にしても、本當のところは、その邊に深き根を入れて居りはしないかと思ふ。袁世凱が最後に皇帝にならんと宿望を抱いたことも、實のところ、深夜内房閨中に於て、女官の連中から皇帝になつてくれと縋られたので、固く決心をするに至つたのだと云ふ穿つた話もある。そこで即位式の官服を誂へたり、高御座を拵へたりする段取りまでに至つたのである。かやうに、どうも女の方から、止むにやまれぬ要求が出たものらしい。張作霖に對して郭松齡が反旗を翻し、はかなく生命を犠牲にするに至つたのも、郭松齡の夫人の要求からであつたと傳へられて居る。表面には現はれないにしても、裏面には、所謂夫人や女官たちが大抵糸を引張つて居る場合が多い。それは大抵内房に於て相談が出来るといふ事である。日本でも政治家が待合などで相談をまとめてゐると似てゐる譯である。

さういふコツは支那では最もよく進歩し、又最もよく理解されてゐる。決して野暮くさいこととはいはない。内房で話を纏めてしまへば、どんな事でも要領よく話が出来てしまふ。そして表面上の會議は形式上の會議としておいて、後で公式にサインすればよいのである。譯のない事である。これは支那に對する一つの秘訣である。それには内房をよく理解し、支配するといふ事が、最も支那を理解する手つ取り速い方法だと思はれる。

我々が支那各地方を歩いて、支那人の人情風俗といふものを比較的容易く研究することが出来るのも、割合さういふ方面から入ることが出来るといつては少々過言かもしれないが、その邊の機會を有つて居るといふ事で、通り一遍の人の入る事の出来ないところへ無雜作に入つて見たり、また種々な事を聞いて見たりすることが出来るのである。先方でもきつと心安く、やさしく答へてくれる。又日本のことを先方から尋ねられる事も勿論ある。

婦天下の支那

支那の家庭では、亭主は多く殆んど細君の前で頭があがらない。元來男の隸屬物として玩弄視されてきた婦人がなぜ家庭内で、そのやうに勢力を張るやうになつたか。一寸考へると矛盾のや

うであるが、然しそれは前述した内房の魅力から見ても、反對の結果を生むものとして容易に肯かれることだ。

古來の帝王が、寶物のやうに集めた三千の後宮の中から、一人でも二人でも特別に寵愛する者が出来る、今度はその愛する美后美妃の一顰一笑を求めてその意を満すために云ふ通りになる。桀王の末喜、紂王の妲己、幽王の褒姒、玄宗の楊貴妃等々のその代表的なものを見ても解る。だからすべてが女本位になつたのは無理もない事なのである。

そこで支那の家庭内部はすべて女本位。女に向つて口返事をしたり、腕をふりあげたりするとはまかりならぬ、男の道として女のうは手を行くことは相ならぬことに習慣付けられてゐるのによるのである。といふのはこれが良家の家庭であれば、男の子はまだその幼少の時分から手早く許嫁が決められてゐる。さうしてそのとき二歳か三歳、年うへの女が配偶者にとりきめられることになつてゐる。その後長じて、互に結婚式を挙げ、愈々一家を持つと云ふときに至つても細君の方が年上であるところから、とかく姉さん顔をしてゐる仕方がないのである。財政方面の事にしてもその細君がちゃんと握つてゐる。若し第二號、三號以下を迎へるにしたらとて、第一

夫人のお眼鏡に適つた者でなければ敷居を跨がさせるわけに行かないことになつてゐる。そこでどうしても嫌天下にならざるを得ないやうになつてゐる。

それ故家庭の内部は外から見たところでは分らないけれども、兎に角亭主よりも女の方が羽振りをかかせてゐるのである。又その家族といふが頭數の五十人、八十人、百人、多きは二百人といふ大家族主義の下に出来てゐるうちもあるものであつて、概してその家庭はやゝこしく又複雑である。従つて之を治めて行かうと云ふには、第一夫人は外務大臣以上の手腕を有しなければ統制がつくものでない。それ故一家の主人公の方はどちらかといふとそれに附いて流れてゐる位でなくては納まらぬ。細君以上に奉られては居るやうなものゝ、その實權は細君に握られてゐるのである。主人と云ふものはフウワリと柔かくその上に坐つて居て、さうして全體を風に柳と云つた態度で眺めてゐるのがよろしく、それを以て、支那の良家庭とせられてゐるのである。だから支那では男に生れるよりも女に生れた方がよいと云はれてゐる。

支那婦人の纏足は、纏足をすることが支那内房のプリンシプルと考へられてゐる。といふのはその足のひらを二寸或は一寸五分位の長さにしてふ。身分のよい人なれば、良い人ほど小さくする。又之を誇りとする。山西省の大洞府城門に入つて見ると、そこでは婦人の足が他の地方よりも殊に小さい。先づ特別に鋭く尖つてゐて、まことに運歩危なく運んで居る有様は、足が地面につかないであるいてゐるやうにしか見えぬ。私などは支那に慣れた爲めか、足の大きい婦人に出て來られると美人とは感じない。なか／＼今でも各地に纏足をやつて居るものが多い。上海、北平などの道路の有様を見て、纏足は無くなつて非常に開けて來たなど、仰しやる人があるが、地方へ行くと、まだ八割、九割は纏足のまゝの舊習を傳へてゐる。足の大きいのは船頭のおかみさん位である。百姓のおかみさんなどは、小さい足をして、鋤、鉞を持つて畠で手傳つて居るのを見受ける。

纏足については、これが美人の條件にもなつてゐるが、又これは家庭における男子からの要求でもある。纏足した婦人の歩き鹽梅は御承知の通りであるが、あれには意味深長な處があるのである。西洋の婦人が、やはり自分自身の足は縮めないけれども、うしろの高い不自然な靴をはいて、あんな歩き方をしてゐるのは、支那婦人と同じ意味から出發してゐる譯である。その點では、支那人と西洋人は、女子に向つて同じ要求をして居るといふことが分るのである。

然るに、表面のこのみ考へて、單に國家の體面といふ事からこの習慣を打破つて、直さうとしても、直るものではないと、我々は思つてゐる。但し上海あたりでは、小さい足では世間體が悪いといふので、眞綿を詰めた大きい靴を穿いて大きく見せたりなどして居るけれども、よく見ると小さい足なのである。十三、十四歳位になつたものでも、その纏足を解いて、元の様にしようとするれば出來るといふことで、現に上海あたりにはそれがいくらもゐるやうである。

自分が嘗て四川の重慶に滞在中見聞した處によると、その店頭にあまたの美人を並べて、肝腎の顔や姿は幕で見せないやう、蔽ひかくし、唯その脚の褲子と足の恰好を示した花靴の樣子のみ見られるやうにして、遊子嫖客の目を牽き付けてゐる。尤も、その四川三界まで奥深く這入らなくとも長江下流の片田舎あたりでも今日尙纏足した、小さい乙女はかなり目にとまる。新しい女性の足の開放は云ふまでもなく、今日盛に行はれて來てはゐるが、尙昔ながらの古風な趣も一方には大分遺つてゐる。足の恰好は、支那畫卷を見てさへ興味の唆らるゝものがあるとされて

ゐる。況して、その聯想濃やかな實物の並んでゐる本物を見るは、確かに纏足にからんだ行樂の一つとなる譯である。

北京、上海その他の都會地に於て廊のうちにゐる玄人筋の纏足はどうであるか。これは段々と減りかゝつてゐるやうである。そしてあちらの遊廓みたやうなところの女は都會に於ける關係であらうが、その足は大きい。併し田舎の方、殊に山西であるとか、四川であるとかいふ邊鄙な地方へゆくと、やはり昔のまゝで小さい。

茶室と書院の正體

支那では廊の方面の名前は一寸ちがつてゐる。北京で云へば書院とか、茶室とか、色々の少班の名前であるが、その中へ這入ると、入口に立派に茶室と書いてあるのがある。又書院といふのも見える。何れも名前はまことに品がよいが、併し實際は、其の方面の専門の青樓を呼んでゐるのである。そこに居る連中は、日本とは餘程システムも違つて居るので、上等の方になると、日本の昔の「おいらん」のやうに、なか／＼見識が高い。馴染になるまでには年數もかゝるし、又高

い税がかゝるといふので、慣れない日本人で珍談を残した人が可なりあるさうである。

たゞ普通見物旁々、大體その様子を見て来るものは、唯一通りだけひろく漁つて、十分とか二十分位の時間をかけて、次から次へと巡廻する。片ツ端から上流は上流で、さうと行つて見る。又中は中で、さうと見て行く。一晚の中に八軒でも十軒でも行く人がある。譯のないことである。

その室に入ると、卓子を中央に、差向ひで茶を勧められるまゝに飲みながら、言葉巧みにふざけたり、西瓜の種をなげ合つたり、或はむいてくれる林檎を揚子でさしたりなどする。度々入れかへてくれる茶を呑んで見たりしてゐるうちに、少し氣の利いたのが來ると、胡弓の一曲も弾かせたり、鼓を打たせたり、紫檀の小板を叩かせたりする。さう云ふ事をやらせてゐるうちに次第に興が出て來る。さういつた方面の事はいくら繰返してゐても大した金もかゝらずに出來る。かくて好い加減に興味を受けるのであるが、また別に馴染の處があれば、そこへそれから出かけて行つてやらうといふ事にもなる。

夜の十一時頃から、打茶園の遊夜郎どもでなか／＼盛んなものである。宵の口は何の事もないが、暫くすると随分集まる。中には、年中減多に會はなかつた人でも、さういふ所でヒョウコリ

出會して、兩方でヤーと笑つて挨拶するやうな珍談もある。

次に、労働者階級の者はどうして性の満足を満たして居るか。これは多くは家庭を持たぬ手合ひであるから、内房などへは入れない。少くともさうすれば高い金がかかるから出来ない相談である。一日幾ら働いても二十銭か三十銭しか儲からない階級の者の行くところは別に出来て居る。波止場の労働者や船頭たちの行くところ、或は材木屋の木挽などの行くところは、それ／＼皆よく出来たものである。世話のない様、バラツク式のところで、長屋になつて居る。一々それが疊二三疊敷の廣さで仕切られてゐる。入口に戸があるのではない。外から見えて居るやうな處であるが、平氣なものである。

四川の奥へ行つた時、重慶の大平門といふところの船つき場が、揚子江の水面から五十間位も上へ崖を上つて行くところにある。その大平門の崖の下には船頭達がいづれもどつさり居るが、上の長屋に、日本で云ふ白首連中が稼いでゐると云ふ處がある。或はそれ以下のしたゝか者が居て、一部屋づゝ有つて控へて居る。午後六時ごろまで稼ぐのである。船の發着の時間に關係があるから晝間のみである。夜分は一切ない。夕方頃になるとお客が押しかけつかへてくるといふ盛

況である。従つて人が見てゐやうが、ゐまいが問題でない。そんな事は恥かしいとも何とも思はない。自分のことは自分で辨ずるといふ意氣込みである。

支那では一體に大、小便でも大道行人の前で平氣でやつてゐる。人が見て居てもかまはぬのみか、すべき事を自らしてゐるのに何が悪いかと云つてにらみ返して来る。従つて此方で見えぬふりをして通つてゆくのである。私共よく地方を旅行するとき、民船に乗つたとき、その苦の上で見えてゐると、又田舎の小蒸氣でルーフに上つて下の方を見てゐると、あちらこちらに小便の音が水の面に聞える。

装身具五百萬弗の花嫁

これは支那國內のことではないが、馬來南洋巡遊の途次、彼南へ行つた時、あそこの大きい華僑の富豪李允石氏を訪ねて見たのである。そこで私は實に綺麗な内房を見た。その花嫁さんの部屋は二階にあつた。樓上に請ぜられて行つて見ると、乍は十七の花嫁さんで、滿飾である。手の指などは左右とも爪を残して、後は全部ダイヤの指環を以て飾つて居る。胸も背中も皆寶石

の飾り物で一パイである。腕なり足頸なりはゴールドの立派な環を八本づゝ捲いて居る。部屋に飾られた婚禮用の調度は所謂金銀珊瑚の寶物で、丸で龍宮そつくりである。その中へ埋まつて居るのである。身の廻りにつけてゐるものは少くとも價格にして見たら、五百萬弗のものがあるといふ事であつた。

某華僑のうちでは、正月に令嬢たちを年賀に連れて出るので、例の満艦飾を施した外に、乗物はシルバーの自動車で飛ばして居るものもあるといふ工合である。さういふ贅澤な家庭がだん／＼馬來南洋にはある。だから新郎新婦のベッドなども二種類も有つて居る。西洋ベッドと支那ベッドとの両方があつて、どちらにもダッチワイフが入れてある。ダッチワイフとはフワフワした氣持ちのよい長枕の如きもので、長さは五尺位のものである。尤も年中いつも夏のやうな處だから汗ばむ故これが必要なのである。

そこで花嫁さんに向つて「あなた達はどういふ事が毎日の樂みですか」と聞くと「たゞもうお化粧をするのが何よりの樂みだ」といふ。「朝十時から午後の三時まで鏡の前でお化粧をする」云々。手洗でも米粒みたやうなものを一摘みとり出して、それを手に入れて揉むのである。さうす

ると汗がすつかり取れるといふわけで、化粧品にしても到れり盡せりである。支那ベッドの方は無論螺鈿がちりばめてある。實に綺麗なものであつた。かやうな美しい内房は、支那内地ではかつてあまり多く見たことのないものであつたのである。

日本の社會では三井の家庭の、岩崎の家庭のと云つて見たところで、この贅澤の程度を、支那のそれに比べて見たなら、比較にならぬ桁ちがひである。彼南の華僑の話はかやうであるが、支那内地で沙市の城内銀號の豪商の家庭の話や、上海ハードン(哈同)の話をしたら、その内房はたいしたものである。夫人の内房にはコテ／＼と身の廻りのものから裝飾品何でもウント飾つてある。女中と女官の如きものが幾十人ゐるか判らぬ。肌着だけの係りの女があり、裝飾品だけの係りの女があり、化粧係りの女があり、食卓の係りの女がありといふ風で、大變なものである。寢臺も普通に見られぬ立派なもので、之でお茶も飲まれるやうに出来てゐる。書物も飾られてゐる。主人の書齋の方もたいしたものので、古銅器から書物、書畫帖、扇面、何でもござれである。世界列國の家庭の生活が立派なの贅澤なのと云つて見た處で、支那豪家王侯の家庭生活に比べたら、食卓の一事を以てしても何の事はない。支那の生活の内部はたいしたものである。主人の書

齋を見るだけでも非常な歴史的の方面に含蓄の多い材料を多く藏してゐるのであるが、更に夫人の内房と來たら、凡そ此の世のあらゆる贅の限りを盡し、何一つ不自由のないやうに出來てゐるのであるから、たいしたものである。

尙内房の話は、庭園だとか、池亭だとか、戲臺だとか、樂園だとか、家廊だとか、いろ／＼その富豪のうちにあるもの全部を併せて考へなくては、内房だけの話では意を盡さぬうらみがあるのである。讀者は實地に、支那へなり南洋へなりに行かれて、その桁ちがひの大きな豪奢振りを見て來るのも、たしかに支那人生活の實際を知る一つの参考となるのである。

二、山水歡樂情景

歡樂第一主義

支那の夜の景色は、日本人から考へると何故之を警察がやかましく取締らないかと云ふものがあり、又法律で咎められやうから、餘りひどいことは出來ないだらうなどといふものもある。せめて遠慮氣味な氣持でゐるであらう。又初めから多少罪でも犯しつゝあるやうな氣持がしてゐるであらうと考へるものがある。これは法律國に生れたものゝ常識と云ふか、用意周到な見方と云ふか、日本人はかやうに考へる。そこには痛快に遊びたいと云ふ心持ちはあるけれども、控へ目な氣持が始終之に伴ふであらうと見るのである。

ところが支那の天地は初めから歡樂第一主義に出來て居つて、歡樂の前には國家なく、眼中法律なく、眼中何等の遠慮すべきものはないところなのである。人生は歡樂そのもので、この世に人間として生れた以上は極度まで之を得て樂まなければ生れた甲斐がないといふ。その氣持を十

二分に満足させるべく人も我も相許し合つて居るところである。そこに支那社會に漲る生命がある。假令法律を口にするを以て職業としてゐる八釜しい人であつてもその點に就いての理解は十二分に持つて居る。日本では折角の專管居留地は支那内地で有してゐても、支那側から土地を借りたいといふ交渉があつた場合に、それを如何なる目的に使ふかといふことを突込んで確める。その際、女郎屋を開業したい爲めだといふやうなことをいふと、それでは駄目だといつて形式的な立前から之を拒絶し、中味の多い繁榮策の申出の鼻を挫いてしまふといふやり方である。若しこれが支那官憲であつたとしたならばその時の出方は易々諾々で、二つ返事で許してしまふ。さうしてそこには風呂屋も作り、料理屋も造り、その周圍には有らゆる職業の者を引寄せそれぞれ繁昌させるやうに導いて行く。さうして何年かの後十分根がおりたところで、その遊廊が悪ければ漸次その方向のみを改善させるやうに努める。こゝである。これが本當の行方である。それが悪いわけもなければそれはそれとして許してやればよい。天下の呼物になればそれで結構目的を達し得るのであると大きく出ればよい。こゝは大きく柔らかく砕けて考へなくてはならぬ。そこが日本式に出るといふと大義名分だとか、法治國の體面だとか、自分の領事任中はさう云

つた事は相成らぬとかと、常に硬く出でようとする所がある。支那の役人は紅燈街の親爺の氣分と殆んど變る所がなく、表面と裏面の使ひ分けこそすれ、大體に於ては同じやうな氣持で共に商賣になつて行けば宜いといふ打碎けた氣持で行く。これが本當の共存共榮である。それ故官吏であらうと軍人であらうと、女郎屋の親爺であらうと共通したさつくばらんの所がいきなり現れてゐる。角のない如何にも人間學を卒業したやうな雰圍氣が支那街、殊に夜の支那街に十二分に漲つてゐるのである。實に痛快ではないか。そこが支那街の路上風景として最も懐かし味のあり、又世界的の通人を惹付ける所でもあるのである。

又日本ではとかく何かといふと結着の所の結論を聞きたいと云つて物を急ぐ習慣が誰れ人にもあるやうであるが、支那の方は結論そのものよりか、道行きを面白く楽しく味ふといふ所がある。そこに文學的の雰圍氣が漲つてゐる。それ故折角の支那の夜の路上風景などにしても、之を日本式に露骨に性急な見方をして見てしまつたり、心あわたたくその急所を突いて話の筋をぶち毀したりなどしてしまふ。支那ではむしろ物は月影に幽かに認めたり薄ぼんやりと霧の中から打眺めると云つた程度に取扱ひ、そしてその間に、支那式の歡樂氣分を巧みに表現してゐる。元

來がもとく、功利主義の支那人であるから、その氣持の裏面に頗る要領を得ることに巧みであることは云ふまでもない。そこが日本式でなく大陸式に又文學的に行く所である。

斯様に支那では何事も大陸的であるだけに、その婦人生活に於ても我々日本人には想像出来ない大味な所がある。元々昔から支那の婦人の主なるものは、帝王簪奪の殺伐な歴史の裏面を飾る後宮生活の花となつてきただけに、總てが隷屬的であると共に、男子の慰藉としての物的存在として見られてきたのである。従つて婦人が翫弄視されて、何の不思議もなく所謂大陸式に、文學的にその歌樂第一主義の國民生活の全面に點描される事となるのである。婦人や從屬的な蔭の花扱ひにされるのは、大陸的な武斷の國では、どこも同じやうであるが、支那はその點に於ては最も優れてゐる事は云ふ迄もない。

前にも云ふたやうに、日本の人々は支那の歌樂氣分を一種の犯罪と見たり、又恐怖心の方から之を避けて見たり、或は事情の通じない所から之を徹頭徹尾怖がつて見たり、そしていつもたゞ夢心地のやうな力のない態度で取扱つて居るといふやうなことをしてゐるのでは、到底支那の歌樂氣分の世界の入口にも進めない。それ故支那を味ひ、支那を観察すると云ふのは何處までも

でも線を太くして、さうしてその思ふ所に力強く進む勇往邁進するといふこと、その點に於て夜の路上風景を味ふことは何よりの好い試金石であり、修養の舞臺であり、國民教育の關鍵ともなるわけである。

夜の魔都上海

支那は都城から例を採つて見ると、上海は大馬路に、又三馬路に、四馬路に、と花の都の中心點として謳はれて居る世界有数の目抜には、夜の十一時、十二時を過ぎると、ソロ／＼色々の路上風景が演ぜられる。これは上海方面のことに少しく慣れた人であるならば何でもないものと見て馬耳東風視してゐるのだが、初めて長崎丸や上海丸、その他シスコ線や歐洲航路の船から上つて來たものには大變である。上海の某旗亭で一杯ひっかけ、ホロ酔ひ機嫌になつて件の目抜の路上をフラ／＼歩いてゐると、何處の横町から姿を現はして來たか知らないが、三々五々と扨けて來る人の影が見える。次第にそば近く寄つて來て、或は笑ふが如く、或は拜むが如くして、時には冷しい莞爾かな發言で以て、

「これ買ひませんか」

と云つた商賣氣半分、一つには又エロ氣分に燃ゆる客の弱點につけ込んで小さい品物をポケットから出して見せる。物珍らしく上陸したばかりで、夙に聞く上海の夜景とは斯んなものかと思ひく歩いて居る人にとつての氣持はどうであらう。その賣付けようとする品物に視線を注ぐのである。するとこれはしたり、云ふまでもなくその方面の寫眞の連續した續きものゝ場面である。品物には手札形があり、その又二分の一の小形があり、様々であつて、それにちやんとした、表紙まで附いて居る。それを面白い手つきで以てひらくと開かせたり疊んで見たりして、その街路の煌々たるアーケ燈の下に立止らせる。そして二つ三つ取出しては、

「よく見て呉れ」

と催促がましく云ふ、或は中には懐中電氣など持出して微に入り細に入つてあつかましくも説明しようとする。もしもその客が之を問題にしないで目も振向けず、足並みを進めて行かうとすると、幾らでも後から追掛けて来て、聲を勵まし又第二の新しい手合ひが賣付けに来る。幾ら見たところで同じやうなものではあるのだが、その寫眞にとれてゐる場面には支那式があり、西洋

人式があり、色々である。餘りにその劇的場面の露骨過ぎて風韻もなければ面白味もなく、却て興の醒めるやうに出来たものが多く、支那の玄人筋にはそれ等が受けてゐるのかも知らないけれども、少くとも日本のピクチュアールに見慣れて居るものゝ目からすると、甚だ以て物足らない。そこに少なくとも風韻の見えてゐる所なり誇張した所なり、多少、文學的意味の加はらなくては見た目が満足しない。であるにも拘らず、たゞ賣付ければ宜いといつた式に次から次へと人間が現はれてそれ／＼ポケットから出す。結局幾ら取出して見せて呉れたところで碌なものはないのである。そこで聲高らかに總て「ヤウ(不要)」と言ふ。すると今度は寫眞でなく肉筆で来る。肉筆のものまで手品師がさながら體の中から取出すやうに、可なり大きな帖になつたのを持出して来て之を見て呉れ、之を買つて呉れ、これは特別に面白く出来て居ますぜ、など、何處までもうるさく扨いて來るのである。こゝに支那らしい、又夜の上海らしい氣分が窺はれるのである。

支那の世相は、ひとり夜の寫眞の賣り子と限らず又町の目抜きと限らず、實際意外なことのみ多い。お寺にしろ、名所舊跡にしろ、或は婀娜めかしい街にしろ、兎も角そのお上りさんと思拔かれたら決して遁しつこはない、掴へられたとなつたら放さない。ものにするとところまでは何處

迄でもついて来る。結局その目的の貫徹に努めることは、支那人獨特の國民性からありさうなことで、極めて執拗にダニの如く来るのである。日本人あたりの淡泊な性質の持主から見ると、面倒臭がつて仕方がない。品物は半以下以下の値段に付けて見る。まける、宜しいと言つてポケットから出してなにがしの銀貨を與へる。すると街燈のあかりで他にまだ澤山の銀貨を持つてゐるとでも見定めると、更に今度は他の方面の品物をポケットから持出して来る。趣が變つてゐるだけに人の顔を見て、これはどうか、これはまけて置くが買はないかと云つた式に巧みに持出して来る。このやうな風でその客を手放さないやうに、太手搦手から攻め立てゝ来て弄ぶのである。おのぼりさんの初めての上海見物にはこれも好い土産話になるとばかり、たいして高いものでもないものだからいゝ氣持ちになつて買ふ。あれもこれもと買ひとり、くだらぬものであるが、その問屋商ひでもするやうに總べて買取る。そして落付く先は日本船。汽船に歸つて来て他の乗合客のうちでも、自分に氣持の分つたものに打明け、鬼の首でも集めたやうに得意がつて見せるものがある。そしてドアを締めてひそく話をして楽しむなどといふ道行をとるといふのが、上海路上に於ける初めての日本人客のとつときの話となつてゐる。

欠

MISSING

莫産を背負ふ女

特に支那の奥地片田舎に這入つて見ると、別段たいした街の體裁を成してゐない所で例へば、船着場の崖の上とか、或は蘆の生へてゐる場末の村外れとか云つたやうな所に、船頭の長屋の住ひをしてゐるところが竝んでゐる。夏の夜、奥地に降雨頻りに至り、溪流に大水を見るといつた場合には、一遍で全村が流されてしまふやうな、危かしい所に住んでゐるといふ細民部落なのであるが、さう云つた部落のものは獨身が多い。必ずしも女房を持つて完全な一家を組織して居るといふわけのものでもないものだから、便宜上そこらあたりには融通のきく組織が成り立ち又その式の設備を見せてゐる。

支那街の夜の路上風景は、都であらうと、田舎であらうと、お察しの通りその方面の情緒に富んだ點が頗る多い。山東の田舎、博山といふところでは、場末の川縁に、夏の夜の夕涼みとかけ、随分老若男女が出掛ける、それを當て込んで莫産を背に背負ひ、ソロ／＼と或る目的から出掛ける女がある。無論月の明、或は螢の光以上の照明法はない處なので、思ひ／＼に風流な連中

が休息の場所をそこに占める。所がその莫産を背負うて居る手合は胸に一物のある連中で、風通しの好い屈強の場所をそれく選定し、闇夜に漁り来る風流人に視線を投げ、聲を掛け、その豫め用意した莫産の敷物の上に客を請ずるのである。これはその客種の如何を問はず、大凡以心傳心で、そこに話を取りかはされるものらしい。別段肩の凝つた風俗といふ譯でもないが、官憲の方も別段之をあら探しするでもなし、おのづから夏の夜の風情として言はず語らずの裡にその河原になまめかしく集まるの美風を作り出してゐるのである。これは山東の片田舎としては可なり評判の高い場所であつて、石炭業や硝子業、或は酒造業などで金に豊かな連中が、青州から博山かけて夏の遊興場として集り樂しまんとする處である。知る人は可なりそこいらの通を振り廻はして、その河原の夜の場面を面白く可笑しく物語つてゐる。かうした支那の美しい柔か味のある風俗は、日本の盆踊の晩に見るなまめかしい情緒とよく似通つてゐる。

然し何と云つても支那の歡樂風景は南支の水郷情緒に止めをさす。南船北馬と云はれる通り、南支一體は普通地圖面に知られてゐる湖水や江水ばかりでなく、至る所蜘蛛の巢の如く運河の便が開けてゐる。蘇州の街であらうが、杭州の城内であらうが、無錫、常州、崑山、常熟、嘉興、

紹興と、南方は何れの都城をあるくにしろ、又村から村を行くにしろ、悉く皆船小舟が用ひられてゐる。

南支情緒夏の夜船

南支那の船の話の中でも、最も興味を惹くものは、名所舊跡の水郷に去來する納涼の客と、その参詣者を當込んで船の船頭を稼いでゐる女の居ることである。これはその女の船頭を稼ぐといふ所に、意味があるのであるが、船は小さいし、客は一人しか取らないのである。晝間はその姿を現してゐることはないが、城壁の上に三日月の輝く夕刻あたりから、ソロ／＼水邊の綠蔭に雅客を待ちながら、たをやかな姿を見せるのである。螢は飛び交ひ、その光は水に靜かに映つてゐる。柳は柳絮煙の如く邊りを立て籠めてゐる。そろ／＼黄昏時となると何處から現れたか、螢は恐ろしく數を増し、而かも指の如く大きなのが蟬集して來る。それを見がてら風流な客は或は飲み物、御馳走など持込んで乗込む者もあり、或は他に目的のあつてか何も持たないで手ぶらで乗込む者もあるのである。

その船頭といふのは、舊式の頭髪を結つた古めかしいのもあるが、近來モダン式の斷髮姿のものもある。時折り櫓に手を掛けて漕いでゐるものゝ、心はこゝにあらすして、ひたすら客の氣持に副ふやうまめに立働いてゐる。客といふのも大抵一人客であるから、それから先はどんな場合になるか、讀者の想像に委すの外ない。水は流るゝが如く、流れざるが如く、夏の夜の短かさを啣つのみである。

けれども時には江上に又屋形船など仕立て金持の隠居らしいのが舷々二杯の船を結び付けその上に豪華な宴席の設備までして、月琴に明笛、胡弓、三絃の音も面白く水波の上を遠く響かせつゝ漕ぎ來る風情などもある。別段漫々たる水上に電燈の灯り一つ輝いてゐるわけでもなく、あの廣い水郷に色とりどりの畫舫が實に愉快げにあらちちらと行合つて上海から程遠からぬ揚州城外、五亭橋附近には此の豪華な船遊びが見られるが、然し何と云つても夏の夜船の最も盛んな所は云ふまでもなく、南京である。唐の時代から有名な秦淮の水郷がこれである。「商女は知らず亡國のうらみ云々」の歌で知られたあの秦淮であるが、今以つて千有餘年の間夏の夜船の話では一にも二にもこの秦淮に引かされて居る。凡そ南支那に生を享けてゐる者で秦淮を知らない男はあ

ない。撞がるゝ秦淮の夏の夜は、誰れしも之に出掛け、こゝで浮かれるのである。金の無い者は船に乗るわけにも行かないが、せめて畫舫の見える石の玉垣に靠れ、大の團扇を緩く使ひながらその水邊の廣場に雲集してゐる。丁度夫子廟の前どころがその畫舫の乗場になつてゐる。その廣場の前には、茶館があり、芝居があり、なかゝの賑かさで、殆んど南京市中の遊野郎たちや又良家の家庭の老若男女、悉くが此處に集まつて來る。そのために毎夜幾千幾萬の出入を見らるわけである。

然し幾ら船が澤山出やうと、どれ程の騒ぎが擴大されやうと、その間に水上警察一つ顔を出してくるわけでもなく、監督の目が光つてゐるといふこともないのであるから、監船を氣取つて他のいかさまのまがひものが漕ぎ寄せて來ようと、さうした際には、どうにでも方法は付くのである。その邊は場所柄が場所柄だけに讀者の想像を極度まで延長して考へられるならば、無限の享樂がその間に見出されるわけである。その間の消息はあまりあらはに書かない方が餘韻があらう。南支那の夏といふと、晝間百三四十度、甚だしい時分は百六十度から上る。屋内にしても九十七八度、夜十一時過ぎても九十五六度を降らないやうな暑い晩も打續いたことがあるので、到底

やり切れない。そのため斯様な水上の夜船の遊びが止むに止まれず、だん／＼盛んになつてくるわけである。

幾ら見張りを立て、八笠しく目を光らして見たところで、到底この夏の夕の苦しさを銷す遊びとしては水上を選ぶの外はない。水上を選ぶ以上は水上らしい夜遊びの當然行はれることは拒み難いところである。それを八笠しく監督するなどは烏滯がましい話であり、人情を解せざる話でもある。所でそれに對して、知つて知らぬ振りをしてゐて呉れる位の、否、やらせる位の通をふり廻す融通性が充分發揮されるのだから愉快である。

民船に依る田舎旅

南支那の夜船は上に述べた例ばかりでなく、田舎から田舎へ船旅行をする場合に於ても、かなり又様子の變つた體驗をすることが出来、碼頭々々で自分の興味をそゝるものが多い。といふのは、平凡な汽車旅行であると、何事もなくスラ／＼とスピード的にはかどつて行くのであるが、民船の田舎旅行は、その船着場に於て、又乗込んで来る客の客種次第で事の變つた特だねが得ら

れる。水郷の船着場から乗込んで既に幾時間もたち、夜半夢圓かなる頃、突然乗合客といふ乗合客がみんな眼を覺してが／＼騒いでゐるのにぶつか。何事が起つたかと寝呆けた顔をぶら下げて船端に出て見ると、岸には高く薄暗い點燈が仰ぎ見られる。その下に民家が何軒か見え、その燈りが水にぼんやりと映つてゐる。船に漕ぎ寄せて来た税關の船から役人が来て、今から船客の荷物を調べるんだと言つて居るのである。厄介な話である。ひとり旅で荷物一つ持つてゐない者は何のこともないが、夫婦者や子供などを連れ来た乗客の中には、一地方から他の地方へと引越荷物をうんと持つてゐるやうな連中もある。税關の役人としてはさういつた人の大荷物をかなり手厳しく調べるのである。起きない夫婦者などは船の係りの者が布團の上から揺す振り起して、さあ荷物の検査だ、検査だと言つて、無理に眼を覺まさせて居る。側で見つて、よせばよいのにと思はるゝが、その思ひやりもない。實に残酷なやうにも感ぜられる。時には葛籠の大きな荷物の中へ、五尺、七尺といふ長い鐵の棒で、その尖端の螺旋形をして居る奴をぎゆつと突差すこともある。さうして内部にある品物が果してその持主の言ふだけの品物であるのかどうか。茶の荷物と云つてはゐても絹織物その他の金目のものが入つて居りはしないかといふことをたしかめ

る。その突差し方の如何で判断が出来るやうな場面もある。無論金目のものを入れ、インチキをして居る時には、人よりも早く眼を覺して役人に少し握らせて置くのである。すると葛籠の中に突差さないで、そのかごとかごの間々にどかつと刺して、何等破れないやうに要領よくやつて呉れる。引越の荷物のやうに見せかけよくお茶の荷物などを持ち込む者があるが、これは幾ら刺されても茶の葉であるから何等損失がない。けれども茶の荷物の如く見せかけて居つて、その實中に支那縮緬、羽二重、緞子の類でも入つて居る時は、刺されたる品物は賣物でなくなる。その邊の細かい點は極てデリケートな問題である。税關の役人などはその邊を當込んで種々の仕事をなし、要領よくやつて居る者が少くないとの事である。同じ夜船と云つてもリンゼ(輪船)と云つて蒸汽船のものもある。小蒸汽である。一錢蒸汽式に出来てゐる船である。これには官船といつて、上等の室がある。一人部屋、又は特定の人數を限つて入れる小さい部屋である。これなどは用心の方からいへばよいやうなものであるが、併し夜船の場合を考へると何ともいへない。却つて夜船は多勢のものと追込み式に一緒になつて居る方が人目があつて氣樂である。側で騒がれるのを嫌ふものは邪魔ものに妨げられないやう別の部屋をとるのもよいけれども、それは餘りに考のな

いやり方で大事を取過ぎたわけである。氣取つた人はそれによく這入る。船の中は平民的がよい。迂つかりすると、船の中のみで稼いで居る手合のゐることもあつて、さういふ人間は客を狙つてゐる。一稼ぎしようと考へてゐるのが少くない。しかし自分はなるべく汽車に乗らないで船を選ぶやうにしてゐる。

船の中の追込みにはよく胡弓を弾く盲人が乗り込んでゐていろ／＼藝當をやつてみせる。そして乗合客から金を恵んで貰ふやうに努めてゐる。又三味線を巧に弾いて客のつれ／＼を慰めてゐる者もゐる。併し音曲以上に又種々な仕掛けで旅のつれ／＼を慰めようとしてゐる者もかなり乗込んでゐるらしい。どうかするとそれが又寫眞を賣付けて見たり、繪を取出して見たりなどして、かなり氣持をそ／＼つてゐる者もある。初めのほどは木で鼻をく／＼つたやうな挨拶をして居る者も、一度その繪を見せられると、ホロリとして、俄かに本氣になるやうな先生もゐる。支那婦人服の襟の高い、さうして曲線美に富んだすぼん姿の女であつたら、大抵それと見當をつけて差支へないのである。西瓜の種の食べ方一つ見ても多くは直ぐそれと分る。その前身がどんなものであつたかも判然する。さういふのが陸上でいへばヤーチ(野鷄)に當るものであるが、しよつちう船

に稼ぎに来て居る。大船である場合には船着場に碇泊して居る際、ザワ／＼と云ひながら、足袋のつづくりありませんかといふ觸れ込みで船に乗込んで来る。さうして碇泊中かなり長い間這つて居る、部屋から容易に出て来ない。さういふ稼ぎ方もあるらしい。船はまるで一種の百鬼夜行の魔窟姿にもなるわけだが、旅の夜船は又その間に頗る趣があつて濕ひのある話が生み出されて来る。又その夜船の想ひ出は幾年経つても懐かしさの消えないものであるから、その文學的材料を殖やす意味に於いてたいして罪にはならないものだともいへる。支那では昔から唐の白楽天の潯陽江頭にしる、その他何れの時代の詩話にしる詩的場面が常に隨處に演ぜられてゐる。「月落烏啼」といふ楓橋夜泊の詩に於ても、「姑蘇城外寒山寺」のあの氣持は、やはり夜船の上で味つた詩の句であつたからこそ、あの「江楓漁火」「夜半鐘聲」の趣が吟じ出されて居るのである。夜船の話だからといつて、一々之に氣を廻し過ぎて、變な意味に取らなくてもよいのであるが、併し支那は一般に又半面から見ると、夜船であればこそ、こゝに詩的情緒を日常生活の中に織り込んで行く特徴をも味ひ得られるのである。その爲め或はエロ話に阿片の樂しみなどいふ方面の話も自ら夜船に於て特に濃厚に體驗せられるわけである。それ故、夏の支那は夜船なるかなの一

語で以て、支那情緒の半面は遺憾なく語り盡せるとも云へる。

日本人にして支那に遊ぶ者は近來多くなつた。けれどもこの夜船のいひ知れぬ妙味まで味はひ盡してゐる人は少い。夜船にでも乗れば直ぐ海賊から一發見舞はれるではないかとかいふ恐怖心のみが先に立つて居る。だから折角の夜船の好い氣持を味ふどころの騒ぎではなく、びく／＼もので乗つて居るといふことになるのであらう。さういふ手合は初めから夜船などに乗つて貰ひたくないのである。が、しかしその境界線を突破して既に夜船の天國までにも進み得る人であるならば、大いに支那のエロの氣分も理解し得る人であるといふことが云へる。ほんの紙一重の境目であるけれども、之を突破し得るや否やに依つて、支那大陸の本當の天國らしい眞髓が掴めるのである。夜船の一小話にしても、これは支那歡樂世界の一つの延長であり、又その關門でもあるのだから、これも亦なつかしい水上風景の一つとして寧ろ味ひのある、濕ひのある題材となすに足りるものと考へる。

内河船行の騒ぎ

支那の内地の運河や湖水を渡る船行の趣味くらゐ和平の氣分に満ちたものはない。見渡す限り桑田打續く大平野の中に、水路を辿りたどり櫓の音靜かに漕がせ行く境地は、市井の巷の蟬噪蛙鳴振りとは別天地の感かして、眞に暢びやかなところがある。

ところが同じ田舎とは云へ、都城から都城へ通ふ一錢蒸汽式の輪船(一に又汽輪とも云ふ)が、寄港する船着き場に見る騒ぎと云つたらないのである。實にどうして又かくまで神經を尖らせ聲の限りを張りあげ騒ぎ立つるものであるか。殆んど解しがたきものがある。その短かい停泊時間に恣々と大きな包みや手荷物を抱かへ込み陸にあがらうとする客の押しあひへし合ひの騒ぎから、埠頭に投げ渡せる一枚の厚板の上の交通整理をしやうとする船頭の叫び聲。陸に待ち迎ふる宿引連の一生懸命な宣傳の叫び。又我れ勝ちに乗船せんとする客の女房子供に呼びかくる叫ぶ聲。束の間に糖莖、西瓜子、炒餅、豆腐乾、皮蛋と品物をそれぞれ頸に筋を立て呼び叫べる物賣りの大音聲。それに船長から船出を知らせる汽笛の長響など、その船の上だけでも相當耳の聾せんばかり騒動のあるところへ、岸に生える老樹の蔭からは頻りと、船客をつかまへ、大どろに名残り惜し氣に話かけてゐる男女もあちこちに指願せらるゝ。さながら百雷の一時に至れるにも似て上

を下への大騒ぎ、全く名狀の出来ない緊張振りが演ぜらるゝのである。

斯く支那の内河航游氣分の反面にはたゞその暢ん氣な懐かしい文人氣分ばかりではなく必ずその船着場あたりに來ると、一方ならぬ騒ぎの勃發するのが普通であるくらゐに見てゐなくては嘘である。その現はるゝや急轉直下に突發することがあり、而かもそのときはかなりの深刻味と濃厚味を見せ氣の弱いものは膽をつぶされる位に感ぜらるゝかも知れぬ。けれどもあとから考へると嵐の過ぎたあとの月を眺むるにも似て嘘のやうにも見える。ともかく支那内地の船の旅に見るその場面場面の回轉の速いことと變化の多いことは、支那世相の縮圖のわけでもあるが、又その騒ぎが却つて内河航游の間に見る一つの慰みとも云へるのである。

日本人の支那觀光は普通こゝまで深入りした奥地の船の旅までは試みられてゐない。そはその人が世相の觀察そのものに興味を持つてゐない譯でもあるまいが、第一それほどの用もないであらうし、第二には不案内で薄氣味が悪いと云ひ、第三には言葉の關係や不衛生のことが氣になつてかなはぬと云ふ。思ふに、衣食住を全部その儘そつくり採入れて自分自ら支那の人になり澄ますだけの覺悟の出來ない限り、かうした雑沓裏に平氣で船びとと乗客と一緒に船上生活を營

んで行くことは出来ないであらう。

世間からはよくかうした出船入船の騒ぎのときに際し、若しや日本人などが居れば

「匪賊なり不良の徒なりからピストルを突き付けらるゝの恐れはないであらうか」

などゝ型のやうに質問せらるゝことがある。

民國內地の民情に疑念を抱かるゝものに限つてかゝる冷めたい事が聯想され恐れ怖はがるものである。事情の不案内なものにとりては無理のないことであるが、全くそれは杞憂に過ぎぬ。騒ぎは騒ぎ、自分は自分である。人は人たり、我れは我れたりとの支那式の大きな態度でゐるならば、決してびくつくには及ばぬ。いくら異國だつて人情に變りのあらう筈はないものだとの確信を持ち、要は支那内地は人にたよらず自分一人の腹で旅行することが何より肝要事であることの一點を附言しておく。

平康里の魅力

支那に遊ぶ者はなるべく、いきなり城外のステーションに宿をとるやうにする、そして時刻

は、夜分になるやうにプログラムを作る。これが通なやり方である。すると、その都城にゐる友人なり先輩なりは旅慣れぬ新來の客のことを思うて驛頭で迎える。その時、その手荷物、スーツケースなどはいきなり我家に又はホテルの方に送り届ける。さうしてその客の身柄は自分で引きとり傍に乗せ、西も東もさつぱり分らない先生を飛んでもない方面へ連れて行く。さうして初對面をさせるのである。すると、チイチイアアアをやられるので面喰らひ飽つ氣にとられる。豫て支那の世相はこの様なものだとは聞いては居つたが、成る程目の前に突付けられて見ると、どうしてよいか。吃驚するやら嬉しいやら、言葉が丸きり解らぬので、何のこともない。西瓜のたねを投付けられて見ても、それが愛せられて投げられてゐるのか、馬鹿にされて投げられて居るのか、その邊もさつぱり分らぬ。けれども兎に角支那に来て、初めて入城した時の第一印象を得る點に於て、此の方法は最も歓迎した方法だと見えて通な人は多くこの方法を採用する。

それも時刻が少々早いやうな時には、先づ何處かの普通の酒樓茶館に引張り込む。さうして後に梅蘭芳の芝居戲臺あたりへ連れ出し、どうやら芝居の撥ねた時刻を待つてその方面へと立て續けに引張り廻すのである。引張り廻されて見ると、おつかなびつくりではあるが、しかし旅の疲

れも一遍に脱けてしまつたやうな気がして来て、言葉は解らないけれども、好い氣持になる。酒の味からうれしくもあり目を小さくし、初めての支那氣分に打たれた事がわかり、得も知れぬ支那式の洗禮を受けるのである。かう云つた通人のおのぼりさんに對するもてなし振りも、夜の路上風景としては見遁すことの出来ない一場面である。

これも北支那北平方面は、以前北平と云つて居つた時代には大官連中も多くゐたことであり又外國人の懷都合のよい手合も出入してゐたので、詩歌管絃の賑ひも彼方此方に見出されてゐたのである。けれども、張作霖 次いで張學良が没落して伊國に亡命と共に殆んどパツたり火が消えたやうになり、今は全支那の夜の風景は殆んど花の上海の一點にと集められるに至つた。あとは天津であれ、漢口であれ、廣東であれ、所々にその小さい中心こそあれ、ほんのおこぼれが見出されるといふ程度である。滿洲國では奉天、新京を初め、所謂平康里と云つて各地に夜の遊び場所が出来てゐる。滿洲何れの地に行つても、その幾ら疲れた體であらうとこの平康里の發音を耳にすると皆氣持がなだらかになるといふ位に、人をチャームする力を持つてゐる。

秦淮の畫舫

南京は秦淮に、夏中、連日連夜、天下に有名な畫舫と云へるフラワー・ボートの船遊びがあつて、客は之に滿載され次から次へと夫子廟前から繰出されて行くのである。川船料理の御馳走は豫め用意され、船内の卓上へと持込まれる。船は屋形船式の樓船で軒柱は悉く皆これ紅白、綠、黃、紫、金銀の彩色で飾られ、花卉模様、山水模様、金殿玉樓の圖案裝飾が施されてゐる。軒にさがれる瑠璃色の彩燈は風にゆらいで佳人の優姿を照らし、その美しい輪廓は倒影を水に映じてゐる。見るからに龍宮世界のパノラマに見る如く、美しい屋形船である。而かもその船賃は割に安い。一二人の船頭が之にゐて、しきりと游客を呼び、話が纏ると、せん繰りせん繰り漕ぎ出て行くのである。

元來この秦淮の畫舫は贅澤な有産階級の夏の遊び船として見られてゐるものであるが爲めに曾て馮玉祥が南京政府に勢力を伸ばしてゐた際、南京市民は革命の功未だ成らざるに、斯かる遊びに耽るなどは孫總理の遺訓にも反するわけだといふ立前から、之が使用を禁じてゐたのであつ

た。その爲めか數年間にはパツたり秦淮の水郷は淋れ、船は半ば水に浸され、柱は傾き雨は漏ると云つた風で如何にも惨めな状態になつて居つた。けれども奈何せん、來る年、來る年の夏になると、毎夜九十八度、九十九度といふ堪へ切れぬ殺人的の暑さである。之にはどんな法律も取消される。人道問題であると云ふさわざきに樓船は許されることになつた。但し藝者を連れ込むことは相成らぬ。先づ音樂でも奏して納涼をするだけといふ條件で之が復活を見ることになつた。今では復活されて既に三四年も経つが、今又昔の通りに奏樂ばかりでなく何もかも復活して來た。金の有る者は我を争つて江南第一の畫舫を約束すると云ふ意氣込みである。若しや南京で、この銷夏方法が許されない時には、わざと七八時間も汽車に乗つて上海にまで出掛けなければならぬ。上海に出掛けて見たところで、水郷にフラワー・ボートを浮べて思ふ存分遊べるやうな處はない。納涼氣分に浸るといふことは出來ない。又さう云つた詩の都市ではない。南の方浙江に入り西湖まで進めばあの通り湖水はあるけれども、これは又水が浅く泥が深く、夜も尙釜の湯の如く煮え立つてゐるので、少しも納涼どころの願望ではない。結局一時法度で禁じられてはあつたけれども、その南京の秦淮を復活させるといふことが、人道上的問題として一番妙策であると

いふことになつたのである。今や馮玉祥は南京に勢力を失ひ、西北方面に、又萬里の長城張家口方面に退くに至つた爲め、誰れもこれに遠慮する者はなくなり、今では全く唐の時代以來の秦淮の佛がそのまゝ再現せられ、夏の夜の市民一般に大歡迎の人氣を集め誰れも彼れも此處に來て納涼する状態となつたのである。

日本人で盛夏江南地方に遊歴を恣にする者は之に足を運ばない者はない。たゞこの秦淮の遊びは納涼が主であるとせられてゐる爲めに、折角の夜船の情緒がもつと利用せらるべきであるに、畫舫の樂みそのものが十分満足な處まで進められてゐない。その點から今一段進んだ方面にまで行つてゐない。若しそれ納涼を越えて今一段といふ場合には、遙かに漕ぎ出で、次第々々に聞から聞へと分け入らなくてはならぬ。そして或は南の岸に又北の岸にと船を着けて見る。するとそれ／＼の碼頭に休み場が出來てゐる。其處へ船を停めて意に充つるほどの時間を思ふ存分樂しむことが出来る。さう云つた流連荒亡の方面は畫舫の内部にゐるだけでは出來ない。併し音樂の樂しみや又川船料理の歡樂、或は氣の合つた友達同志を御馳走の意味で共に乗せ込み、之と十二分に語り明かしたり飲み明かしたりするといふことは幾らでも體驗することが出来る。この畫舫

の夜船の興味といふものは單にその船の裝飾美とか管絃樂の美とかいふものばかりではなく、その水上に腕に自信のある伶人どもの、或は左舷から又右舷から呼び入れて貰ひたさうな顔付して、愛嬌を振り撒きつゝ來るのを弄ぶことである。秦淮の奥では、幾らでも畫舫の後ろから追掛けて頻りと催促がましい笑顔をしてゐるのを見る。しかしその運河の幅はさまで廣くはないから特に之を呼び入れなくとも、その弾いてゐる音曲を遠くの方から聞き楽しんでゐるだけでも宜いやうな氣がする。

又雇ふが如く雇はざるが如き曖昧な態度でその伶人の顔を見て見ぬ振りをしてゐるのも面白い。さうするといふと、幾らでも澤山雇いて來て、それ／＼各自愛嬌を振り撒き秋波を送つてそれぞれの腕を自慢氣に廣告しやうとする。けれどもそれも或る時間以上長くは雇いて來ない。それで結局のところ三人なり五人なりを選定して船に呼び入れるのである。

そのうちに料理の方はだん／＼とはかどり、酒は酣になり、話も蔗境に入り、かれこれするうち例に依つて例の方面の話が出て來る。それに又花がさくといふことになる。すると、最早や既に夜半、時は二時三時と時刻は次第に更けて行く。けれども邊り近所を去來する畫舫は何れも

宵の口のやうな賑やかな零團氣を見せて、夜半らしき景色は少しも見えない。だん／＼船を漕ぎ進めてゐる中には可なり岸の酒樓も遠くなり暗い所まで行く。すると邊りが幾らか靜かになる。突然闇の中から鹽船に乗つた乞食體の藝人が杓文字のオールを漕ぎながら側にやつて來るのである。そして鶏の鳴き聲、蛙の鳴き聲、犬の遠聲に、牛の聲、馬の聲、猿の聲、何でもござれで、動物の聲色の眞似をして、その使ひ分けは實にうまい。喉に笛を入れて居るわけでもなく、又舌の尖に仕掛がしてあるわけでもなからうが、實に手に入つたものである。これも色々藝をさせたのなら、こちらで初めから約束したいやうな顔をしなないがよい。靜々と漕がせ漕がせて居るといふと、何處までもついて來る。さうして或る地點まで來てから御苦勞だつたと云つて求められなくとも、こちらから少しばかり金を鹽の中に投げてやるのである。すると、今度は大きな聲をして最後とばかりアヒル(家鴨)の鳴き聲の眞似をするのである。さうしてオールを鹽の中に收め、今度は自分みづから兩手を指し伸べ水をかき／＼、方向轉換をしてスーッと暗の裏に姿を消してしまふのである。これなども秦淮の夜船の遊びの中では可なり面白い事である。

南支水郷の秘境(西湖から海寧まで)

南支那は八月十六夜の月下、杭州の西湖コンサンメン(良山門)から夜舟を出し、細い運河を傳つて東の方ハイニン(海寧)まで出かける。月は朧に叢雲は時々月光を遮る。或は夜半の夕立となり、或は雲の破れて玉兎の躍り出るところも見る。楊柳の垂枝は船端に當つて音がしてゐる。時折り尻上りの浙江訛りで船頭からひどく呼び掛けられることもあるが、邊りは全く森閑としてゐる。何處かの村の犬の遠吠が船に聞こえて來ることもある。心おきなき友人と船内に席を共にし、三千里外の異郷で速き東京の都の話など思ひ出で話をする。或は又北支那や或は奥地片田舎の話なども打語りつゝ詩的情趣に耽つてゐたりする。そのうちに、船は次第に靜かな南支水郷の秘境を進み行くのである。この日は支那で有名な錢塘江の大潮の高まる日に當つてゐる。錢塘江の流水と舟山列島から押寄せて來る太平洋の大波とが互に相ぶつかつて、そこに萬馬奔騰の壯絶なる一大光景を呈するのである。世界何れの處にもこれだけ壯麗な大自然の水の闘ふ光景は見出されないといはれてゐる。この奇觀を當て込み、上海から特別の臨時列車が出るし、英、米、獨、佛、

日本あたりの各外國の紳士淑女も夏の衣粧に着飾つて浙江大潮の見物にと出掛ける。又中には夜舟を備つて大潮の見物といふ振れ込みで、その實仲の好い同士の色々な手合が思ふ存分打樂しみながら、夏の短か夜をかこちながら、運河の中で語り暮しつゝ出掛けるといふのである。これは又南支那の水郷に見る隠れた一種の風情である。

海寧の途中長安の船着場に立寄る。こゝはちよつとした田舎町で、あまたの民船が集まつてゐる。上海から汽車で來る觀潮客も多くは此處で汽車を降り、船に乗換へるのであるが、西湖から下つて來た遊覽船の觀光客も、此處に船をつけ、先づ一休みすることになつてゐる。

支那は山遠く水長く、水の景色、山の景色と様々あるが、これを見物するにも、日本人のやうに男が一人で出掛けるといふのは少い。宛ら歐米の人が山水美や名所舊跡にあこがれ、之を探ねるには夫人同伴して出掛けると同じやうに、支那の風流人も大抵は一緒に出掛ける。そのとき、第一夫人といふは多くは亭主よりも年が二三歳上であるし、伴つて歩いても見榮えもしないし、色々である。その爲め第二號か三號、普通は五號か六號くらゐの成べく若いのを伴つて歩く。これが習慣になつて居る。迂つかり船の中や汽車の中などで「奥さんでゐらつしやいますか」といふ

挨拶を亭主の方へ浴びせ掛けて見ると、「これは僕の第五夫人です」なんて、恥かしくもなく、平気で堂々と答へて呉れる。少々こちらは吃驚することがある。内心さうかとは思はないことでもないけれども、眞向からまさかにさうですかとも云へず控え目に云つてゐると、主人は極めて明瞭に臆面もなく答へて呉れる。この大自然のパノラマ、天下に比類なき大潮の景色を、見物に出掛けるといふ如き時分には、日本人のやうに家内を留守居させるのでなく、なるべく家庭圓滿な氣持で相携へて出掛けるといふことにするのは、如何にも結構なことである。別段之に對し如何の必要はない。その方が寧ろ日本よりか支那西洋共に、一歩進んだ遺方をとつてゐるとも思はれるのである。

夏の夜舟の數々ある中に、斯うした錢塘の大潮を見がてら自分がかつて小室翠雲畫伯と共に之を探ねるべく西湖から船を出したのである。趣味の友として、又藝術の交りを深くしてゐる同志のこととて、自分たちは水入らずでこの夏の夜舟の一夜を明かしたのであつた。が、併し畫伯の話題の中には、なか／＼隅に置けない流石に通な破天荒な話が次から次へと口を突いて出て来る。その調子の低い、併しその詩趣に富んだ話振りは、今もハツキリ記憶に残つてゐる。なまめかし

い佳人の繪巻物語なども出たのであつた。これは同君のニコ／＼顔の中に今も尙思ひ出深く印象づけられてゐる。今も相會し二人でその時の話を語り合ふ時には、イの一番に之を語り出し感極つて哄笑するやうな次第である。月夜の運河では到頭その爲めに夜半中語り明して衣の夜露にしつとり濡ふのも氣づかなかつたのである。愈よその大潮の見られる海寧の碼頭に船の着いたのはかれこれ正午まへであつた。觀潮に最も都合の好い大觀亭に登り東方を眺めその大光景の出現をひたすら待つてゐたのである。ところで實は自分たちはその前夜は一睡も取つてゐない。藝術話で一夜を明かし、續いて、この支那四百餘州に又となき大潮の壯絶な現象に觸れるといふことは、何よりも自分の夜舟話の數ある中で印象の深い體驗談となつてゐる。

三、支那宿物語り

支那宿の氣安さ

支那宿は慣れない日本人は恐ろしく、これに育えて居るものが多い。初めから危険な一種の魔窟でもあるが如く、奥底の知れないグロ氣分の漲つてゐるところのやうに考へて居る。ところが支那の人自身は旅行の際にこの支那宿を最も氣樂に、又最も經濟的に、さうして又最も便利に利用してゐるのである。日本の旅館のやうに自分の懐る勘定と違つた支出を止むなく餘儀なくされて見たり、體裁の好い客を床柱の光つた良い部屋に通し、身なりの悪い者は女中部屋の隣あたりに通すといふやうな、さういふ變なことはしない。支那宿くらの公平な取扱をするサービス振りは見ない。といふのは、支那宿にあつては、這入るとすぐ初めにその泊り客の氣持に副ふやう部屋を一々案内して見せてくれる。その部屋部屋の宿料はいくらいくらとよく諒解させるのである。その上でなくてはその部屋に通さない。それ故各自に豫算がキチンと決まつてゐて、その心づも

りで以つて話が取決められる。それであるから支那宿くらの豫算のはつきりしてゐて、氣樂に泊れるところはない。支那宿の暢ん氣であることは恐らく日本のホテル以上であつて、而かも法外に安いのである。唯しかし支那宿の特徴は心の練れた者でなくては泊れない氣がするかも知れない。半面から見ると或る脅威を感じることもあらう。日本の旅館のやうに細かくどこまでも客の爲めに面倒を見てくれるといふことはなく、番頭は番頭、客は客といった風で、割合にサーヴィスは淡泊である。留守中に電話がよそから掛かつて來てもそれを取次いで呉れようともせず、知らん顔をしてゐるといふやうなことは、當り前の事である。

その代り宿の係りのボーイが來て、相當粹を利かせ、客のつれづれを慰めることに最善の努力をするなど云ふ點は、日本の宿などとは大層趣を異にして居る。殊に大都會の目拔にある大旅社、大旅館などにあつては、二階、三階、四階、五階と、その旅館内部の客室の列び列びの間に設けられた通路の要所に行つて見ると、その廣いパーラーには紫檀の大きな椅子が用意せられ、傍に蘭の植木鉢、その他の鉢植などがどつさり飾られてゐる。泊り客の氣分は大抵これで和らげるやうに出來てゐる。夏の宵の暑苦しい時などは、窓を通して吹き來る涼風を軽く受け、その

椅子にもたれ、食後の休息を取つてゐるのも悪くはない。すると、三々五々幾人となく襟の高い胡蝶の如き美人が思はせ振りの歩き方をして往つたり來たりする。これは支那宿の大規模の設備のあるところであると、大抵見る光景であつて、上海で言つて見ると、大東旅社、東亞大旅社、或は大中華又はクエツン(惠中)などの三階、四階、五階にはよく見當たる場面である。これらを押しなべて考へて見ると、かういつた一流の大旅社にはかういつた胡蝶の獲物のあることを豫想して、旅のつれづれを慰むるべく宿泊を求めるものが多い。それ故にあちらの大規模の旅館にあつて、若しこれが用意されてなかつたとしたならば、大旅社としての資格がないものゝ如くに考へられて居る。固より屋上には新派の芝居、手品、輕業、茶館、遊歩場、易者の卜占など總べての娛樂用の機關が整つて居り、そこで話のついた胡蝶を伴ひ屋上の好いところに足を向け、ベンチに席を占め、納涼かた／＼喋々喃々語り合ふのもよろしからう。それから先のことは自由勝手であらうけれども、そこまでくれた態度に出る泊り客は毎日どれだけあるか。神ならぬ身はよくは想像し得られない。

支那宿の部屋附のボーイは、自分の係りの泊り客が果たしてさういつた方向に趣味を有つてゐ

るか否やを内心窺はうとしてゐる。又遠廻しに引掛けて話を切出して見たり、又露骨にニコ／＼笑ひながらヤオブヤオ(要不要)と云つて要るか要らないかといふやうな、催促がましい言葉を掛けて見たりなどする。かういふ場合には要るやうな要らないやうな曖昧の返事をしてゐると面白い。すると、どこまでもしつこく世話をしませうかといつたやうな態度を見せる。夕暮の七時から八時までの間は最も多くその廊下に現れて来る。甚だしい場合は四度も五度も往つたり來つたりして同じ客の眼に止るやうに動いて居る。又その氣持のある客は、紫檀の椅子に腰を下ろして見るやうな見ないやうな振りをして相手の様子を見てゐる。相縁奇縁であるからどうといふ譯もないが、併し中にはちよつと見そめたきりでもにするのもあるらしい。旨くない場合には、部屋附のボーイが氣を利かして、自分で選定しませうなどといふのもある。併し何れも氣に入らないといふことをきつぱり切出してしまふと、だつて、何とかなるでせうと云はんばかりの態度に出る。これは恐らくその間の世話料としてコンミツションがとれ、ボーイの収入になるからであらう。普通の泊り客が唯の部屋代と、茶代を置くだけではたいした自分の収入にならない。それ故特にさういつたエキストラのインカムを稼ぎ出さうといふので、内々クウニヤン(姑娘)達とボーイと

の間に或る種の諒解が成立つて居るらしく思はるゝ。それでボーイは、ヤレ丸ポチヤの、瓜實顔の、ヤレ蘇州生れの、揚州生れのと、種々な甘い言葉の下に客を引付けようとする。その邊の外交手腕はボーイ風情であつても可成り練れたものである。ジュネーヴの國際聯盟に見た支那代表の手腕以上を以て、それ／＼旅館の二階、三階に陣取つて居るのである。それ故少くも泊り客はその外交に於て敗けないだけの自信と、その苦勞を積んだ體驗を有つて居らなかつたならば、外交は美事に失敗をすることであらう。その點は一國の國際關係であらうと、旅館の客室の一夜であらうと、同じことなのである。

若しも話が不調に終つて、全然ボーイの案を採用しないことになつた場合には、第二の手段が採られる。それはお客の方でどうでもかうでもそれが必要でないといふことになつた場合には、それでは切めて唄なりと歌はしたらよいでせうと来る。そこで唄ならばよろしいといふと、美人のポケットから唄の定價表が出て来る。その相場書きに依ると、一番高いので一曲八十錢、安いので四十錢、三十錢、二十錢と様々の等級がある。段々二曲、三曲歌はせて見ると、耳も聾せんばかりの美聲を張り上げ、或は泣くが如く、或は訴ふるが如き調子で以て節廻しも面白く始める。

さうして澤山の曲を歌はしむれば歌はしむる程、そこに又ボーイのコンミツションが伴ふものと見えて、ボーイも内心ホクホクもので喜ぶのである。

かやうにして一流の支那宿にあつては、かなりその一夜を明かす上にもそこには面白い趣味の深い楽しみがある。かうした唄を歌はせる際には、單にそこに美人が出るばかりでなく、それに續いて大抵胡弓を弾く先生が出て来る。客室の隅に腰を掛け、壁に向つて斜めに坐り、唯と黙々としてゐるやうであるけれども、胡弓を奏する手は冴えたものである。

美人の聲の抑揚頓挫にうまく合せ、巧みに奏する。かういつた奏曲の場面は一人や二人で聴くのも勿體ない位で、多くは泊り合せてゐる他の友人などをも呼び入れ、互に楽しみつゝ聴くのである。

支那宿の遊びは、先づこの式で一つは文學的の楽しみがあり、又歴史的の楽しみもありして、眞に趣味の支那宿としてかなり高尚な想ひ出のたねともなるのである。

蘭の花嫁

南支那で山水美に富む浙江の水郷を訪ねて見ると、越の國の紹興の都に紹興旅館といふ支那宿がある。紹興の地は支那四百餘州にその名も高き紹興酒の本場である。酒の名所は日本と同じやうに、支那でも水の良いところ、米の良いところであることが物語られて居るのであるが、紹興はその糯米の性質の良いこと、清水の良いことの點で天下第一のところである。その酒の名産地となつたのも偶然でないのである。水の良い爲めに酒を出してゐることは固よりのことであるが、良い水の出ることが又一方に美人を輩出してゐる原因ともなつてゐる。その評判の美人に於て、或は山水の美に於て、又史跡の美に於て、この紹興地方ばかりは南支那でも指折のところと稱せられてゐる。

これ程自然美に富んだ紹興の城内にある紹興旅館は堂々たる點に於て、又その接客振りに於ても有名なものであつた。ところが數年このかた支那の動亂、南北戦争から共産軍の城内に侵入するやうになつてからは、折角のみやびやかな船は略奪に遇ひ、或は破壊され、宿の門前まで通じてゐた道も荒れ果て、今では旅館そのものもかなり酷く淋れて來た。

自分はその宿の番頭はゐなくなつて居るし、主人も代つてはゐたけれども、おなじみの氣持か

らこれを訪ね、その樓上の一室に宿を取つた。さうして久しぶりに懐かしき蘭亭を訪ねるべく轎子を用意して、日歸りの旅で曲水の遺跡に散策を試みた。夜遅く歸り着いて旅の疲れをその紹興旅館の部屋で癒した。寝る時には宿の人に、

「若し公安局から調べに来たならば、自分は靴の鍵を開け放して寝むから、自由勝手に見るが儘にお委せする。何も彼も必要なことは今聞いておいて呉れれば、皆こゝで話して置く。夜中はぐつすり寝たいのだから僕を起こさないで置いて呉れたまへ。」

と云つて置いた。店の番頭は心得たもので、云つた言葉をその通り守つて呉れた。朝起きて自分分は、

「昨夜はどうだつたかね。」

ときいたところが、

「やはり十二時過ぎてから役所から来て調べた。お預りの靴も見えし、あなたの人となりもよく話したところ、よく了解し、何事もなく無事に済みましたよ。」

といつてゐた。それから小便をするために階段を下りたのである。見ると、その狭い庭の一隅、

に花嫁の嫁入道具らしいものがうんと並べられてゐる。桃色の緞子に刺繍を施した美しい夜具の類が、紅の絲を以て軽く縛り積重ねられて居る。美しい鏡掛には鳳凰、孔雀、瑞樹の圖案が刺繍で現されてゐるのも見える。馬蹄形をした花嫁の便器もあり、その黄金色した漆器の中には、漢の武帝の前で西王母が桃の實を献するところの圖案がいと優雅に現はされて居る。花嫁の奥入れの道具がうんと持込まれてゐる。見る／＼又玄關先から奥の庭に掛けて色々の調度持込まれてゐるのである。これは又珍らしい好い時に出會したものだと思ひ、その持込まれた嫁入道具に視線を注ぎ、その一つ一つに興味深く眺め入つたのである。

聽て母親らしき良家の老母が黄金の笄に束髪を結び、兩耳に翡翠を下げた品の好い姿で庭前に現れた。次で又その母親の姉妹らしきが二人三人と姿を現して來た。或は緑に、或は薄茶、漆黒の絹衣裳と纏つた如何にも奥ゆかしい風體のもののみである。そのうち年の程十七八と覺しき薄化粧をした丸ボチヤの花嫁さんが、轎子に乗つたまゝ中庭に這入つて來た。額の生え際もかつきりとしてゐて、鼻はさう高い方ではなかつたが、目もとはバツチリとし、口に紅をさし、頸のところは二重輪で肥ふとつた、見るも氣持の好い程肉體美に富んだ花嫁御である。時折り母親が側

に行つて襟元を直してやつたり、翡翠の飾を整へてやつたりなど、母として努めてゐる心遣ひが、いとも濃やかに眺められたのである。

かやうにして良家の家庭の花嫁を中心とした嫁入仕度の調度類の山が出来た。又吉事にいそむ世話役どもが、その紹興旅館の中庭でいそぐと忙し氣に朗かに立働いて居る。かうした様子を見た時に自分は、若しもこの旅館が以前のやうな時めいてゐる時であつたならば、嘸々花嫁の一行も、その似合はしい背景を得た譯であらうと思はれたのであつた。

自分はふと庭の一隅にある便所に入らうと思つて、そばまで行つて見た。ところが、あの地方の習慣として、便所には戸がなく、正面には唯丸い丸太が横たへられ、その上に板が打付けられ、之に一尺ばかりの孔が一定の間隔を置いて三つ四つあけられてゐる。そこへ腰を掛ければ用足しが出来るのである。別段傍らに塵紙がぶら下げてある譯でもなく、洵にお粗末な設備である。支那の片田舎の旅に慣れて居る自分どもは、平氣でその孔のあいてゐる處を占めたのである。纏てするうちに花嫁さんも自分の側にやつて来て、相並んで腰をかけるのである。幾ら美しく着飾つてはゐても、やはりそこは人間である。さういふ點になると全く原始的といはうか、無邪氣そのも

のであつて、本當に面白い場合を演じたのであつた。日本人であるとやれ厠に戸がないとか、やれ前に蓆が垂らしてないとかいふことを云ふのであるが、あの地方の風俗は總べてあけすけである。そこには物を隠すとか隠したいといふ氣持が全然ない。つゝまじやかな花嫁としては、多少さういつた場合に、羞恥心から、氣まり悪さうな恰好位はしさうなものであると思はれたのである。けれども、何等その氣配は見えなかつた。その傍には男の小便するところが壁に副うて設けられて居る。切石がおかれてあるのがそれである。壁は黄色く又茶褐色に染まつてゐて、その臭氣は紛々鼻向けのならないところであつた。餘り廣い旅館ではないためではあらうけれども、如何にもその嫁入道具の美しさと、その場合の臭氣の甚だしさといひ、又その厠の景色といひ、いかにも極端な對照となつて居た。これは支那でなければ見られない原始的の場面だといふ氣持が強く自分の腦裡に印象付けられたのであつた。これがもし日本であつたならば、その場面にかくしの幕を張るとか、蓆を垂れるとか、トタン塀で圍むとか、何とかするであらうけれども、さういふ點は誰れ人も考へて居ないらしい。紹興の城内切つての一流の旅館でありながら、今はその寂れて荒ばら屋同然になつて居るとはいへ、これが花嫁にとつて一世一代の婚禮の場所なの

だから驚き入つた次第だつた。

仄かに聞いて居るところでは、支那の函入り娘は如何にも深宮に育だつて、男の顔など拜したこともないといつた風に傳へられてゐるけれども、事實支那の花嫁は人慣れがしてゐるし、殊に男の操縦法などと來たらよく心得たものである。早くいへば男を尻に敷いたやうな態度をとることがあつたり、うは手を切る外交的手腕のあることは存外見上げたものである。又それ位の腹があり、膽力を有し、擦れ枯らした氣持を有してゐないことには、あの大家族主義の下に出來てゐる家庭の内部を相當に切り廻して行くことは出來ない。函入娘の程度を脱してゐないやうなおぼこ娘では、事實貫ひ手がないのである。又自分自ら第一夫人として納まり、あとの第二號、第三號、第四號と多勢の側室を支配して行くべき身になるのであるから、相當の手腕を要することになる。又相當外交的の智謀を廻らすの必要に迫られることもある。さういつたことは旅館に於て結婚後に練習がつむことであらうが、しかしその結婚の當初に於て、既に人目に曝され、同じ泊り客の間にも伍して平氣で剛で並んで用足しをするといふ位の氣構へが要る。その邊の氣持は、恐らく日本人の間では餘り諒解してゐる人はゐないであらう。これはしかし田舎娘だからさういふ

ことまでするのであつて、都びとの間ではまさかすることはあるまいといふ風に想像される方もあるかも知れない。が、さういつた想像は當たらぬ。それは餘りに支那を買被り過ぎた迂遠な觀察法であると思はれる。その邊の支那の本當の姿と云ふものは、かなり徹底したものであると見ておいて丁度よろしいのである。

公寓宿のランデブー

尙ほ支那の宿屋には公寓と稱して下宿屋式の營業をして居るところがある。これは長く滞在してゐる者の爲めに設けられたもので、比較的部屋料の安いものである。學生生活をしてゐるもの、或は勤人などで獨身の者が多くこれに逗留して居る。北京や南京あたりの大都會には、かういつた公寓は隨所に見出される。公寓では割合に旅客に對して寛大な態度が取られるので、その泊り客がいつ何時如何なる連れ込みを引張つて來ようと、他から文句を差挿める筋合のものでもなく、さういつた點は極めて自由である。近所の部屋にゐる客は隨分氣を廻せば廻され得るもの、日本とは違つて、さういふ方面は存外悟つてもゐるし、淡泊でもある。長く居ればゐる程慣れても

来るし、地方界限の事情も分つて来る。又訪ね来る客も繁々しくなり、おきまりの友達ばかりでなく、時には客だねの違つた特殊の者も出入して来る。それ故、口の悪い人は公寓宿は實に暖昧宿であるなどといったやうな評をする者もある。勿論そこには暖昧の魔窟もあるし、さうでないものもある。どうかするとその樓上の部屋ヘヤの南側の窓が開いてゐる時を見計つて、隣家の三階の窓から封筒を落して来るやうな場合もあるらしい。これは三階の丸窓に時々姿を現すたをやかな乙女が、どういふ不思議な縁であるか、又どういふ心理状態であるかは知らないけれども、別段不思議なことでもないであらう。けれども、二度目、三度目に落した手紙が某公寓の陳さんとか、王さんとかの手に渡り、さうしてそれが因縁となつていろ／＼そこに噂の種が生れ、枝から枝を生じなどして、その界限のお芽出たいつや話に進展して行くといふやうなこともある。必ずしもこれがラブレターの意味ではなくても、さういつた小説的の文の取替しが行はれるといふことは、よくこの支那の下宿あたりで見られるところである。

日本と違つて支那宿の入口は存外開放的である。だらしが無いといへばだらしが無いやうなものゝ、誰れ人が出入しても、殆んど責任を以て玄關先を見張るといふ者はゐない。その爲めに種

々の自由な交際がその間に行はれて来るやうになる。全くの自由の天地であり、思ふ存分如何なることでも爲し遂げられるといふところである。これが支那の下宿、或は支那宿の原則的の典型になつて居ると見られるのである。それといふのも日本の旅館などとは違つて支那宿は番頭にしろ、一般の店員にしろ、又泊り客にしろ、唯々自分自身を守るといふことにのみそれ／＼懸命であつて、さう他人のことにまで世話を焼いてゐる者はゐない。それであるから殆んど氣持の上に於ては離れ／＼のやうな譯であつて、その出入は至極樂であり、自由奔放である。この點から支那宿は旅行するにしても極めて氣樂な氣持に打たれるところである。そこには泊り客と番頭との間に、緊密な濃かな交渉關係も殆んど成立つて居らない。随つて支那宿といふ處はさながらその人となり、その人の年齢、その人の性質、或はその人の有つて居る使命、心持だけで如何なることでも行はれるところである。即ち極端なるグロ、又如何なるギヤング、如何なる戀愛でも成立ち得るところである。その點に就いては完全なる理解が日本人には求められぬ。一寸想像がつかないところであらう。それ／＼の客の間に支那式の大きな線があり、それで以つてうまく統一されて居るといふところが見出される。それ故に日本式の宿の内では味ははれない。寧ろ日本人に

は物足らなく、頼りない、又餘りに頼りなさ過ぎる爲めに不安を感じるといふやうなことになるのであらうと思ふ。その邊から支那の全社會に漲るエロ氣分、或はグロ氣分、又は無關心主義の縮圖をこゝに見るのであるといふ風にも考へられる。かういつた點で大連とか又は奉天とか新京とか吉林とかいふ方面の支那宿を見ても、日本人の目には極めてたがの緩んだ桶の如くどころなく縮りのないやうな氣持がしてならないであらう。それだけにエロ氣分の方面に於ても極端であり、他人に對する氣兼ねなどの少しもなくして實現せられるところがわかる。従つてそれが亦如何なる深味にまでも到達することが出来るのである。根本は日本人がいかにして支那宿に對する本當の理解を有するかであつて、この點さへ眞に諒解してくれる日が来るならば、大は以て支那全體、又滿洲國全體の複雑なる深い世相の一端も、諒解が出来るところに行けるのであると云へるであらう。

厠考

序でに厠のことを一言附け加へておきたい。江南地方の奇習でもつとも風變りの様式に見える

のは、厠の問題である。支那宿に泊るものは客室の寢臺のわきに備へられた馬桶と便壺の兩者が目を映するだけでも異様の感に打たれるであらう。日本から行つたものでも初めての客は客棧で毎朝その肝腎の用足しが出来ぬ。どうしても勝手が違ふので出ないと云つてこぼしてゐる。それは尤も至極の訴へであつて同情に價する。ところがこの室内に設備されたものを兎や角云ふのはまだ贅澤の方である。浙江地方の田舎ではマオカン茅坑と稱し、街道畔道の路傍野天に持つて行つて獨立した厠の小建造物があり、之に二三或は七八の丸き穴を穿ちたる板で腰の掛けらるゝやう出来たものがある。その下は暗く、内部は共同の大きな池になつてゐる。之に甕の用ひられた場合もあるが、多くは坑の式に出来てゐるのを普通とする。

村民や路上の行人は調法視し毎日之を使ふことにしてゐる。片田舎の家庭は勿論宿屋あたりでも、うちに厠の設備のない所では、否でも應でもこの茅坑の處まで出掛けて行かなくてはならぬことになつてゐる。これは宛ら共同井戸に村のものが天秤棒かついで水汲みに集ると同じ習慣のわけだから、村の人たちは、それを當たり前と心得てゐる。實際田舎によつては毎朝寢床から起きるなり最寄りの茶館に出かけて行き、湯を買ひ求め、茶館の洗面器で以つて顔を洗ふをおさま

りとしてゐる處もあり、朝めしさへも外出して攝つてゐる者が多い。田舎はかやうな習はしであるから、廁が村外れや路傍に出来てゐて、それに出かけ集る位のこと、少しも異としてゐないのである。

その茅坑に見てたへのするのは、それが本當の共同式の構造に出来てゐて、戸扉一枚附いてゐるわけなし、又仕切りの板壁一枚あるでなし、結構之に腰を下したものは隣席の村びと「お早よう」めしは済ませたか」くらゐの挨拶や、串談閑話の一つもして顔を見合はしながら、用足しが出来るやうに出来てゐるので、社交には便利なわけである。よく自分でも浙江の田舎路を行くとき、かうした社交小機關の茅坑に二三の閑人どもと陣取り、悠々くはへ煙管で以つて互に、

「けふはこれからどちらへ」

「錢塘開口の義渡まで」

「ちや一緒にこれからお伴するべえ」

などと云つた調子に打寛いだ對話をしてゐるところを見る。さう云つた場面は珍らしくない。その上その用足しが済んでも、そばに手洗水一つおかれてゐる譯でもないから、そのまゝ褲子(ツ

ボン)を整へ、裙子(袴)をおろすだけである。そして何くはぬ顔してその手でキセルの雁首を支へ何事か語らひつゝ行く。誠に何と云ふ太平な眺めであらう。不平等條約も何もあつたものでない。日本では廁に戸がなければ風俗でも亂すにきまつたものやうに考へたり、近處に淨水でもなければ、すぐ不衛生だと云ふ風に騒いで見たりする。江南の農夫たちは一向に之を問題にしないのみか、むしろ路傍に一舉兩得の氣持のよい茅坑が設けられてゐるから、一ぶく一と休みをしようくらゐにしか見てゐない。田舎の農夫と云ふ農夫を見ても、之に大陸的の禪味の備はつてゐないものないやうに眺めらるゝのは、一つにかうした日頃の物に動じない習慣のついてゐることとが然らしめてゐることゝ察せらるゝ。

水郷漁村の舟人には又之と好一對の簡單な便法が演ぜられてゐる。その用足しをする小景は、湖上でも運河でもどこでも見られる。水陸、その各景趣は異にする處があつても、禪機の奥義に至つては變はるところがない。日本人はとかく、その光景の目に映する所を紹介するだけでも、君子の口にすべからざるものとして云ふを好まないところがある。そこになると支那大陸人は悟道に這入つたものである。だれも彼れも徹底した大きい氣分を示し、何等そこに末節に囚はれた

り、氣持ちに拘泥したりすることなく、純にして無邪氣、よく自然に合するものがあり、却つて靜かに教へさせらるゝもの多きを感じるものである。

四、支那尼寺風景

支那寺院の特異性

支那の山寺で今日榮えて居るのは先づ禪寺であると云へる。江南地方を歩いて見ると殊に之が多い。禪寺は云ふまでもなく男寺を主として居るのであるけれども、中には尼寺を包含して居るものがあり、又尼寺専門のものもある。支那の寺は日本のそのやうにお葬式を取扱つたり、檀家の家へ經を上げに行つたりすることを仕事にしてゐない。寺は主として修道院と云つた形のものが多く、釋迦牟尼佛を本尊としてその道の爲めに一切衆生を濟度することを念願とし、又在家の俗人にもお寺にお籠りをして先祖の冥福を祈つたり、自分の過去の罪亡ぼしに種々なる慈善事業的のを行つたりしてゐるなど、餘程日本の佛寺の實際とは趣の變つて居るところがある。寺の内部の空氣を云ふと、日本のは冷たい所謂お寺氣分なるものを漂はせて居るのである。けれども、支那の寺と云ふものは朗かであつて、千客萬來善男善女のお籠りも賑やかで、どちら

かといふとのんびりした感じがする。

支那に見るお寺は貧乏寺もあるが、しかし又南支那に見る禪寺、殊に臨済宗の寺は田畑山林などの財産をうんと有ち、小作に百姓の仕事させ、寺男にそれらの仕事授けられてゐる。従つて寺内部の経済的の事業にしても、かなり専門の部門が分れてゐて、大きな一つのまとまつた社会事業を切り廻し、自治の生活の行はれて居るところを見る。謂はゞ一種の一小國を成して居る観がある。

支那のお寺の規模や構造は日本の山寺のそれよりか一層大仕掛であるのが多い。山門を入れば歩道は池、悉く石疊で、池の周りに玉垣を繞らし、之に一尺、二尺、時には四五尺の大きな黒鯉、白鯉、赤鯉などの色とりどりの鯉魚がびち／＼跳ねてゐる。又参詣者の投げた麩に集まり、波紋を作つて水面にばくついてゐるところなど、全く別天地の観がある。淨池の向ふには雲を破つて聳える高い鐘樓、或は多聞天王を祀つた樓門、その他庫裡、大雄寶殿、方丈、客堂など、それぞれの大きい建造物が相並んでゐる。殊に又その穀物を貯蔵してあるところの庫に行つて見ると、かなり澤山の穀物や、野菜や、漬物、その他の材料がうんと藏し蓄へられて居る。

陽氣な尼寺風景

尼寺としてはこれ程大規模のものは見出されない。けれども、浙江省の天童育王寺の境内にはその一部に尼姑といつて尼さんに當る女の僧侶が、袖の緩やかなだぶ／＼した法衣を纏ひ、僧堂の一隅に數多かたまつて居るのを見る。無論男の僧侶と相隣りたる部屋に居るのであるが、それ／＼食事の時などは精進料理を別の部屋に取つて食事をしてゐるやうである。食後のゆつくりした時間になると、寺内の廣場や池の傍、或は泊り客の居る客堂などに話に來て問はず語りに種々なる面白い話をして呉れることもあるので、意外にその方面の知識を得ることがある。

又大きな山門に見る尼寺の内部とか、またその生活の内容に立入つて窺ふと、日本の尼さんの生活とは違つて、その氣分に餘程の裕があることがわかる。日本式のやうな氣の利いた顔をして居る尼さんは少ない。多くは眼と眼との間の遠さかつてゐるやうな丸ぼちやのふつくらした美人が多いやうである。墨染の衣の着かたにしても、どちらかといへばたりとしてゐて、何となく力のなささうに見えるのが多い。靴は纏足をした足であることは云ふまでもなく、その三角形の

小さい恰好をして僅か二三寸を出でないものもあるやうである。暇の時分には銘々自分の靴を縫ひ、思ひくしの刺繍などつけてゐる。

これは單り山寺の尼生活とは限らず、凡そ支那の婦人は他人に自分の足を見せたくない、又觸れさせたくないといふ氣持から、自分の靴は自分で造るといふことになつてゐるものと見える。

尼さんには故あつて俗界から尼寺に這入つて來たものもあるであらうし、兩親が尼に仕立てるために幼少の頃からお寺に預けられたといふものもあるであらう。又一度還俗して再び寺に歸つたものもあるであらう。尼寺ではそのお勤めの時間が始まると何れも揃ひの頭巾を目深かに被り、肩から背に掛けて長く垂れた姿で圓座に即く。さうして讀經の聲はよく透徹して、そのお經を上げて居る聲が間々、南無阿彌陀佛の訛音でもあるか「ナモセ、ナモセ」といふ發音に聞こえ特に耳に際立つて聞えることもある。圓座の列の兩端にゐる尼さんが音頭を取り鐘を叩く。するとその清らかな澄切つた鐘の響は眞如の月の趣を漾はすのである。鐘を叩く尼があるかと思ふと、お茶を注いで廻る尼もあり、泊り客のお接待をする尼もあるといった調子に、それ／＼内部の仕事が分業的に分れて居る。自分は時々その讀經の中に混つてその經文の句を眺めたり、又儀

式の順序やその光景を研究して見たい爲めに、その近くに身を寄せて見ることもある。すると、如何にも愛嬌よく同じ道を求める人の爲めには幾らでも便利を與へるといつた態度に出る。その邊の尼さん達の氣持は如何にも人懐かしく、又軟か味があつてよい。別段知らない人がそれに加つたからといつて、畏まつたり、固くなつたりすることはない。如何にも愛嬌よく無邪氣に客を取扱ふのである。流石は大國だけあつて、尼寺に至るまでもが柔やかな氣持を示してゐる。そのどことなく山寺自身の豊かなる様子が尼さん達の素振りによつて見えてゐるやうである。

日本人の想像するところでは臺所の掃除、煮炊きの方面は尼さん達がすべてやるものといふ風に思はれるだらうが、事實その米を研いだり、食器を洗つたり、井戸の水を汲んだり、配膳のことにたづさはつたりするのは、總べて男僧侶が従事してゐるのである。さういつた點は女のあの弱い腕では出來ない。第一庖丁にしても、箆にしても、又切り刻んだりする仕事にしても、どうしても男の手を要しなければならぬのである。あの五尺、十尺とある平釜で出來た狐色の焦飯の始末をするにしたらところで、これ亦男の腕でなければ取捌きが付かない。澤山の油熬だとか湯葉だとか、筍だとか、椎茸だとかいふ、色々な野菜類を取扱ふあの場面を見ても、物凄

位の多量の材料が炊事せられて行くのである。大支那の自治生活のうち、その内容の一斑は、この尼寺の一つを見ても、その一角が窺はれる。それ故に名前は尼寺であつても、事實は極めて力強い腕の力による自治生活が行はれて居るといふことに氣が付かなくてはならぬのである。

江南地方の田舎、水村山廓にはさゝやかな尼寺が至る所に見出される。また田舎の町はづれあたりにも、さまで有名ではないけれども、地方民の信仰を繋いでゐる尼寺が見つかる。表通りに面したところよりも、表の路次を潜つて突當りのその又路次を這入つたところといつたやうなやゝこしいところに、豫想に反したかすかな規模の尼寺が見出されることもある。いきなり直ぐ尼寺が見付かるといふ場面に設けられてゐることは少ないので、實際は土地の古老なり、或は男寺の山門の僧侶になり就いて教へて貰ふのがよろしい。案内をして貰つてやつとその尼寺の在所を知るといふ場合が多い。

又いきなり通な人であると、尼寺を見付けて紹介なしに入つて行く者もある。けれども、その場合には尼さんが引込んでしまつて、なか／＼出て來ない。片田舎では割に人情が固いのでやはりその村の名前のある人の紹介とか案内者とかに依つてこれを訪ねるのが順序である。山門を潜

つて大雄寶殿に参拜し、奥まつたそれ／＼の部屋に案内されて見ると、墨染の頭巾をつけた品のよいその係りの尼姑が出て來る。さうして熱茶を出して應接間で取持つて呉れる。男寺と違つて質問をするにしても餘程よく考へて挨拶の言葉を出さないと、失敗することがある。

然し、上海を中心とした蘇州、杭州の附近の江南地方には、接客の上にて存外開けた尼寺があちこちと見出される。それがその方面の通な遊客連の話に依つて見ると、尼寺とは表面の呼び方に過ぎないので、實のところは暖味屋である、魔窟であるといふ風に、頭ごなしに批評してゐる者もある。揚子江方面では楊柳の蔭に、綠淺き農村のところ／＼にその壁は赤く、家根の棟は反つてゐるやうな、變つたお寺を見ることがある。土地のお百姓に聞いて見ると、あれは尼寺である云々といつて居る。尼寺はさうむやみに多い譯ではないだらうけれども、しかし、田舎の運河沿ひの農村で、石橋を渡つた向ふの柳の蔭に尼さん達の讀經の聲が聞えて、橋下に白鳥の遊んでゐる景色が眺められ、その尼寺のあるあたりの眺めのいと優しき趣のあるところがある。尼寺の中にも客室の設備のあるのがあつて、お籠りをする善男善女達の一行を歓迎して居るらしいところも見受ける。けれどもこゝにはあまり穿ち過ぎた觀察は避けて置きたい。

深山の人間味

山東の泰山の絶頂に、道士の楊世珍といふのがゐる道院がある。海拔三千八百メートルばかりの處で、さう高いといふ譯ではない。けれども、支那古來五千年の歴史の上に赫々たる名前を恣にしてゐる名山であるが爲めに、この泰山は歴代非常なる政治的意識の指導の下に置かれてゐる。蒋介石が北伐の時にその絶頂、玉皇頂の道院に宿泊し、楊世珍との道話に一夜を語り明かしたとのことである。これは楊さんが自分でその當時の話を面白く物語つて呉れたのである。自分のこゝで泊つた部屋も蒋介石が一夜を明かした道院の部屋であつて、その壁には自分の寫眞に黒色のにじんだ餘り良い字ではなかつたが、「蒋介石」の三文字を署名してある肖像が懸けられて居つた。天下に覇を成さんとする者はみなかうした名山の絶頂に宿つて旭日の東天に上るのを拜するるのである。

その道院の東窓の方に「浴日養雲」の四大文字の壁に懸けられた一種神々しい幽室があるのであるが、この部屋に、東方未明の頃に楊さんの案内で通された。ほのくくと薄明くなつて来る東

海（泰山では東天のことを東海といふ）を望んで見てみると、そろ／＼薄黄色くなり、薄桃色になり、段々その中に紅の雲が舞臺いて来て、そのあたりから旭日が光を放射して来るのである。その天外の地に身を置き、ひとり東海の天を望んでゐる時の氣持は、一種言ふにはれない壯嚴なる氣持に打たれる。その程遠からぬ捨身崖のそとの日觀峰に出て見ると、巖頭に四五尺と思はれた大鷲が一羽の子鷲を連れてとまつてゐるのを偶然見付けたのである。これまで繪に描かれた巖頭の鷲は幾度か見て居るが、かういつた天下の靈山の絶頂で、生きて居る鷲の親子を手の届くところに見ることが出来たといふのは、何ともいへぬ自分に取つての珍しい體驗であつたのである。

泰山の絶頂には玉皇頂の外尙碧霞元君廟であるとか、青帝廟であるとか、澤山のお寺があるが、何れも雲外の別天地のところとて、一種神々しい氣持に打たれる。さういふ氣持で胸が一杯になつてゐて、道士の楊さんと共に天地開闢の話などをして居つたところが、眼八分の下の方の彼方遙かの處に石徑斜めに通じたる石造の小堂宇が偶然見付かつたのである。自分は楊さんに、「あの石造の小堂はお寺ですか何ですか。」と聞いて見たところが、「あれは……。」といつて笑つて

居る。「名前があるでせう。」といったところが、又笑つてゐる。段々追求して見たところが、「あれは尼姑のゐる尼寺だ」といつた。山の絶頂で人里を離れ全くの精神生活をするといふことになつてゐるこの秘境にも、男の道院ばかりでなくて尼さんの修道院が出来てゐることを直感した時には、自分は興味深く人間味を感じたのである。

登山客に親切(?)な尼姑

「あのお寺には現在何人位尼さんがゐますか。」と問うて見たところが、「平常は数人ゐるのであるが、今は多く麓の泰安に下山して居つて、若い尼さんがたつた一人だけ留守居をしてゐる。」といつてゐた。話の行きがかり上、その尼さんのことに就いて深く立入つて聞く譯にも行かなかつたが、かういつた名山の絶頂に尼寺があることに氣のついた者は餘り居らないであらうと、自分ひとり興味深く感じたのであつた。實は泰山には、その麓の一天門から稍々登つたところに斗母宮といふ尼寺がある。登り道の右側に石造のお宮として登山者にはよく目につくものである。渡り廊下の趣も面白く、登り行く旅客は汗を拭ひくこの斗母宮に辿りつきこゝに立寄つて熱

いお茶の接待を受けるのである。

こゝには接待係の尼姑が居て、愛嬌もよく、優しく取持つて呉れる。渡り廊下に姿を見せる尼さん達は何れも人間離れのした氣高い尼さん達で、揃ひの頭巾姿に墨染の長袖を着込み、一人、二人、三人と客を目當に石段のところに出て来る。北京の言葉とは違つた山東の訛言葉ではあるが、併し修道院のお堂に立籠つてゐる尼さん達のことであるから、かなり遊くはあるが、しかし何となく山寺らしい空氣を湛へて、喋々喋々、その中に親切心の籠つた話も色々出る。といつても別段この尼寺に休んで行きなさい、泊つて行きなさいといふ程の言葉が出るのでもないが、併し祠堂、拜殿、渡り廊下、庫裡などを見渡したり、又漢柏の老樹などを打眺めたり、又路傍の岩面に刻み付けられた摩崖碑の文字を賞し、撫でたりなどしてゐると、一時間や二時間ゆつくり身體を休めることが出来る。支那旅行の途次には、かうした風の變つた尼寺に立寄り、尼さんの接待を受けて熱茶を啜り、お菓子を戴いたりなどするのも、亦面白く趣味の深ことである。

尼寺の訪問も、泰山の斗母宮くらゐその背景の雄大にして、而かも歴史の長いところはなく、その登山みちの廻馬嶺、珍珠瀑、經石峪(金剛般若經の石刻のあるところ)など観るべきものも

相當に多い。それだけに、この斗母宮の尼寺気分は一層滋味が深いやうに感ぜられる。若し泰山を頂まで登る時は昔秦の始皇帝が途中で降雨に遇ひ、雨宿りをしたその時、老松があつて、ひどく始皇帝のお氣に召したと見えて、これに大夫の位を授けられたといふことである。その當時五株の老松があつたのであらう。今はその場所に數株の松の木が崖上に生ひ立つてゐる。偶然もし山雨の來たつてびしよ濡れになるといふ場合には、この尼寺こそ絶好の雨宿りの場所として恰好のところである。恐らく泰山の麓から南天門乃至玉皇頂に至る間、この斗母宮くらの趣味の深いところはあるまい。泰山に登らんとする風流客は、汗を拭ひ休息旁々、ぜひこれに立寄つて見るだけの値打があるところであると自分は考へてゐる。

小孤山の尼寺

南支那では長江の流れが呼び物となつてゐるが、上海から四百裡餘り遡つたところ、漢口からは百數十裡下つたところに小孤山といへる帽子形の獨立岩の天を衝いて聳えて居るのがある。樹木は鬱蒼として崖上に茂り、頂には四阿の一部が見え、中腹には白壁の禪寺が繪のやうに美しく

綠蔭に隠見して居る。石段は急に、屋根の棟簷は反つてゐて、江水にその倒影を映じてゐる。時折り小舟漁船がその石段の下に着いてゐるのを見る。長江を上り、又下る旅行者はこの小孤山のお寺を赤壁の東坡寺と相並べて、懐かしく賞し、詩にも唄ひ、歌にも詠み、これに好印象を得ないものはない。

ところがまぜつかへしをいふ手合は「あの小孤山のお寺は何寺と思ふか」、「あれは絶海の孤島のやうな別天地にある珍らしい禪寺ではないか」と答へると、通人がゐて側からその説明を遮る。「なあにあれは有名な尼寺だよ、漢口あたりで道を求めてゐるやうな顔をしてゐる手合は時折り尼寺に行つて修養を積むのだとさ。さういふ觸れ込みであの寺にお籠りする者が多い。實はあの尼寺は少々怪しい點もあるので、當世のインチキ寺と云つた方が適當なのだよ。」などとぶち壊しを云つて居るものもある。果してこれが尼寺であるか否かは親しく之を訪ね、山門を叩いて見なければ分らぬ。よしんば禪寺であるとしても、その僧房に尼姑どもが常住して居る事實があるかどうか、一概に尼さんがゐるとも云はないが、ゐないとも云へないだらう。随つてその邊に暖昧なる理解があるともないとはつきりしたことは云へない。時折り漢口あたりからモーターボ

トを下して納涼旁々この島まで遊びに出掛ける風流人もないではないが、平常漁船などが、釣竿を垂れてこの島蔭に十ばい、二十ばいと群つて居る光景を見ることもある。馬當山の崖に面した方の側は江水も深く流れも急である。けれども、その反対の側は遠浅であつて、冬から早春に掛けての減水期には岩の一角が江底に現はれ、遠くの方まで地続きになつて居ることも見られる。併しこの小孤山は一般人との交通の比較的少ない爲に、依然として傳説的に富む尼寺として長江に遊ぶ者は始終一種のエロ氣分を加味してこの寺を眺めてゐる。雄心勃勃たる手合は一つこの尼寺の真相を確かめるべく訪ね研究して見るのも一つの趣味の旅として面白いことである。唯本當の尼さんである時には銘々その圓頭の天邊に十二のお灸を据ゑた跡が、二六の十二と行儀正しく二列に並んで居る。或は又三四の十二と三列に並んで居るのを見るのであるが、何れにしても本物の尼さんならばその灸點を目當てに突き止めることが出来る。假りにインチキの贋尼であるとすると、さうした印が附いてゐないのである。その邊は尼姑の研究探偵をするときの急所として心得て置くべきところであるから、参考までに附加へて置くのである。

五、支那風呂

支那風呂趣味

支那世相に見る獵奇研究は、その花々しく飾られた舞臺に資料を漁るよりも、寧ろ技巧なき有りのままの場面に之を求むるがよい。そこに日本人に解しがたき大陸生活の複雑異様な氣分動機がよく窺はれる。

従來支那を語る者に、支那住民の日常生活を語るものが少なく、假令少數の之に觸る者があつたとしても、そのあたまたに支那人の「不衛生」なる生活に浸れることゝ云ふ先入主を有する爲めでもあるが、大抵のものは、あたまたごなしに、

「支那人は風呂なんかに入ることにはあるまい。生涯風呂を使ふことはないだらう云々。」
といふ。又曰く。

「支那には風呂屋がなく、住宅にも風呂の設備のあるものがない。それでよくも氣持が悪くな

いものだ、云々。」

然し支那人の日常生活はよしんばその住宅に設けられてゐないにしても、街上には到る處少くならず風呂屋がある。それと知つて居る人の目には必ず氣のつく程の大きな看板も掲げられてゐる。「浴堂」とあるのがそれである。その外、澡塘、澡堂、盆堂、盆池、など色々文字上の相違はあるが、ともかくかやうな言葉で表示されてゐる。それが街路、里間、胡同に面して設けられたのもあつたり、又中には路次深く這入つた幽居の形に洒落て作られたのもあつたり、一樣でない。大都會には洋風の浴池のハイカラな設備に出来たものもあるが、一般には昔のまゝの舊式の構造設備が踏襲されてゐる。田舎の小さい町あたりに見る湯堂は殊に純支那式の様式をそなへてゐる。と云ふのは、日本あたりの町に見る銭湯とはちがつて、何れも廣潤なゆつたりした構造を有し、二階建の高樓のものが多し。一般から云つて支那の人は日本人の温泉氣分以上に浴室の趣味を味つてゐて、その入浴に出掛けるからには、優に半日なり、一晩なりを費す積りで出かけ、浴後、茶を請ぜられたり、汽水（サイダ・レモン）を攝つたり、蘭花菊花を賞したり、爪を剪らせたり散髪をさせたり、按摩をとつたりと云つた工合で、心から浴後の趣味に浸り、之を樂

しみにしてゐる。そこになると日本式のたゞ手拭を提げシャボン携帯で氣ぜはしく風呂を使つて歸ると云ふのは、雲泥の差がある。日本の文字通りの風呂に這入りに行くだけで、事務的の意味だけしかないが、支那の方はゆつくりと氣分を味ひ本當に浸りに行くのであつて、中には歸るのを忘れてゐる先生もある位である。日本も江戸時代にはよほど支那式の處が傳はつてゐたさうだが、今は見る影も亡くなつた。

支那風呂は、氣分本位の柔らかみ百パーセントの處であるだけに、入口なんかも壁の兩袖に持つて行つて、千客の氣分に添ふ文字が見事に掲げられてゐる。固より字の讀めない客の方が多いのであるが、それにしても氣分の迎へられてゐるだけはひだけは、幾ら何でも判る。壁の文字を讀んでみると、こんながある。

沂水春風詠

湯盤喜日新。

石池春暖人宜浴

水閣多溫客更多。

又ハイカラなになると、

澡身浴德眞舒意

水熱泉溫合衛生。

支那風呂趣味

筆蹟墨色は鮮かに又高雅で、その門に入る前からして、何となく文人氣分に魅せらるゝ感じがしてならぬ。

支那風呂は大衆本位に出来てゐて、共同風呂式の浴槽のものもあり、又一個人一個人に備へられた盆池もあり、又仕切りが出来てゐて、數人を入れるにだけに限られたものなどもある。其各人別々と云ふ盆池は貴族的に設備され、料金も一元内外と云ふ高いかねを取つてゐる。それだけに持てなし振りも又至れり盡せりである。然かし支那式に風呂の趣味を味ふと云ふには、どうしたつて大衆本位の共同風呂の方である。

ゆつたりした支那風呂氣分

支那へ遊ぶ者も滿洲國に旅行視察を試みる者も、あの味ひ深い、又社會狀態の複雑さを百パーセントに物語つてゐる支那風呂なるものを見ないで視察を了へて歸る人が多い。これは寶の山に入りながら手を空しくして歸るのと同じわけである。滿洲では大連の奥町あたりを初めとして奉天に、新京に、吉林に、傅家甸にと到る處に支那宿があり、その側には必ず云ふにいはれない

支那氣分の漲つてゐる支那風呂がある。

日本の宿とは違つて支那宿には多く風呂が附いてゐない。實をいふと、支那宿には飯も附いてゐない。宿は宿、風呂は風呂、飯は飯とそれ／＼別々である。随つて勘定も亦互に獨立してゐるのは云ふまでもない。日本人の常識からすれば、宿屋でありながら風呂がないとか、飯が附かぬとか、いふのは怪しからぬといふ感じがするであらう。けれども、經濟思想の發達してゐる支那人のことであるから、これ等は泊り客の都合次第便宜なところを思ひ、又その日常生活の特徴から考へて見ても、それ／＼好きなやうに別々にし、獨立してゐるわけである。支那の各地方をひろく歩いて見ても、最近のハイカラな支那旅館は別であるが、多くは風呂の伴はないのが常態となつてゐる。

支那風呂の一般大衆に受けてゐる主な點は、一日の疲れを癒し、緩つくりと浴後の氣分を味ふことにあるのであつて、そこは宛ら日本人の温泉宿氣分とよく似てゐる所がある。日本でも徳川時代には、お風呂は即ちその氣分を味ふことを眼目としてゐたが、今日の錢湯はたゞ手拭を下げて行き、内で流しを取つて済んだら、さつさと歸る。これは今日のスピード時代の日本の社會に

は適當してゐることかも知れない。けれども、風呂本来の目的には副はない話である。支那では風呂賃が一般社會の生活程度に較べて見るとわりに高い。といふのは、その設備が割りに大袈裟であつて、生活程度以上の仕掛けが出来てゐるからである。

又客の方から云つても、毎日汗を流すといふときには、我が家庭で、熱湯を以て體を拭いて済まさう、顔の如きは一日の中に何十回拭くか分らないのである。胸も、腹も、脊中も、腕も、殊に夏場は汗の出る度に顔面を拭ひ清めてゐる。人を訪問して見ても、お茶が出るよりも先づ以て熱く蒸した大のタオルが客に提供される。さうして汗ばんだ塵の含んだ皮膚を綺麗薩張りと拭ひ清められるのである。これは客に對して茶を出すよりも一層款待の意味を示したものであつて、こちらで氣が附かないでゐても相手の方ではちやんと之を出してくれる。それ位に體を清めることが支那の上下一般の風習となつてゐる。又家庭の婦人達は一日に五度も熱湯で我が室内に於て之を清めてゐるものがある。それ故支那では女の皮膚は日本人の想像するよりも遙かに清潔であるわけである。

支那の婦人で錢湯に行く者は殆んどなく、極めて少數の例外の外には女風呂といふものが設けられてゐないのである。それには長い間の歴史もあり、又社會的の風俗習慣に本づいてゐる處があるのであるから、自然それが風呂屋の設備の上にも現はれ、女向きの浴室は設けられてゐないことになつたわけである。

支那では風呂屋のことをツアオタン（澡塘）と呼び、これは錢湯の意味を現はしてゐる。この中には特に風呂賃の高い高級な設備をした所もあつて、之をボンタン（盆塘）と云つてゐる。これは一人々を別々に這入れる設備をしたものであつて、床は漆喰又は化粧煉瓦で出来てゐて、これが使つた湯の自然に流れるやうな風に造られ、底は斜面に、周圍には低い土手が出来てゐる。内は楕圓形の浴槽が設けられてあつて、之は横に厚板が渡されてゐる。流しはその客の都合を聞いて、半ズボンを穿いた姿の三助が這入つて来て體をすつかり擦つて呉れる。その擦り方は日本のとは違つて、多くはマツサイジ式に腕の下端の方から上へ上へと擦り上げて行く。だまつてゐると、體の何れの部分をも悉く残らず擦つて呉れるのであるが、驚く程垢は捻れて取れる。その爲めに湯は變色して灰色を呈する位である。日本のやうに三助が一々その局所に湯を掛けて洗うてくれるのではなく、皮膚面を蒸して置いて、全體が紅くなるくらゐ力を籠めて擦り上げるの

である。だから、皮膚の弱い人は上皮が剥けて取れるほどの感じを伴ふ。随つて一度擦らせると桃色位に赤みを生じて来る。これ程に念を入れて流しが働いて呉れるのであるから、その風呂質の比較的高いのも無理はないと思はれる。

又浴客自身にしても毎日入浴するときめてゐるものは少く、一週間目とか、十日目とかに来るのが普通である。さう減多に來ないのである。それだから、自然入浴に來た以上は、緩つくりして行くといふ習慣になつて居る。又風呂屋の方でもその積りで萬端の設備を施し、娯樂氣分の味ははれるやう鏡の間に一人々々のアーム・チェアを置き、茶几と稱してお茶だのサイダーだのその他特別のものが備へられてゐる。乾いたタオルを前に當て、體を斜めに十分のびくと寝そべることの出来るやうにできてゐる。

脱衣場は面白く出来てゐて、日本のは丸きりちがつてゐる。と云ふのは、可なり浴槽のところまで距離があつて、その間を結付けた廊下は長い。客が脱衣をすればそのうしろの壁面の高い所にシャツから上衣全部重ねたまゝ一括みにして、之を長い竿の先に引掛け釘に吊すのである。その高さは一間半と二間と、時にはそれ以上もあらうといふ高い所にあげらるゝのであるから、

貴重品などは人もゐることだし、きつと大丈夫だと考へられてゐる。けれども尙ほ時計その他の金品は特に係りの者に預けて呉れるやうにと掲示が出てゐる。脱衣場から浴槽に行くまでの廊下を歩み行くには草履の備へてある所もあるが、又木履の提供される所もある。木履と云つたつて、日本式の鼻緒がついてゐるわけではなく、向ふの孔の所に棒が差してあつて、それを指の股に引掛けてカラリン、コロリン引すりながら漆喰の上を行くのである。脱衣場は冬はスチームを通し暖房の設備が出来てゐるので、零度以下十度二十度といふ寒い時でも、別段寒さを感じることはない。窓硝子の外にチラ／＼降る雪を見たり、又冷えた空氣の凝結して白くなつてゐるのを見たりすることもある。けれども、此處ばかりは全く蒸し風呂に入つてゐる如き感じがする。今脱衣して這入らうといふ者、又風呂から上つて今から休まうといふ者ども、皆それ／＼その安樂椅子に凭れて、所謂支那風呂の氣分に浸ることが出来るのである。

風呂に入るにも大陸的

風呂に這入らうとする者は手拭を下げて行く。その手拭には體の上半又下半を擦るため、それ

く、別々のものを持つて這入るところもあるのであるが、日本人のやうにその歩きながら、腰を曲げたり、手で隠したり恥かし気な恰好をして行く者は一人もゐない。皆堂々とちやんと姿勢を作り、威張つたわけでもあるまいが、少しも頓着のない恰好をして行く。宛ら鼻を耳を人前を出してゐると同じやうな大陸的の氣持で以て、悠々と廊下傳ひに歩を進める。その邊の光景は如何にも大國民であるとのことが窺はれる。その中に一人の日本人が交つて手拭で隠したり、五本の指で押へたりなどして行くのを見るのは、如何にも小國民のやうな氣持がして、圍りのものに對しても氣恥かしいやうな氣がする。だからと云つて俄にそこで大陸人のやうな態度をとれと云はれても執れず、どちらとも付かない曖昧なやうな氣持で、廊下に行くものであるから、直ぐ氣兼ねの多い日本人であることが見透されてしまふ。この邊は永年の習慣から來てゐることであるとは云へ、今少しく日本の男子も男子らしく行きたいものだと思はれる。

支那の浴場で餘りに日本式を發揮してゐるといふと、いろ／＼ひやかされることがある。幾らいはれたところで子供の時から習慣であるから、こればかりは仕方がない。正々堂々と口先では云ひ、又始めは偉らさうに歩いて、直ぐその行ひと、その態度に小國民的らしい氣分が出て

來る。しほらしいと云へばしほらしいのに違ひはないのであるけれども、かういふ所にヴェルサイユの會議、ワシントン會議、乃至はジュネーヴの會議、又は脱退後に於ける日本國民の開きが支那とコントラストの出方に見えてゐるのではないかと思はれる節もある。

脱衣場には又面白いものがある。それは有名な爪摘みを業とする者がゐて、風呂から上つて來たお客の足の前に仕事を求め、足の爪、手の爪を見て廻つてゐる。需むるに従つて直ぐ氣持よく摘んで呉れる。或はネン／＼と云つて按摩を取りませうかといふて來る者もある。その按摩の手つきから、又その拈つたり揉んだりする間に一種云ふにいな音をさせてやつて呉れるのである。その邊の氣持が支那式であつて、柔か味がある。ともかくもなか／＼變つてゐて面白い處がある。支那風呂はかうして、浴後、その按摩を取りながら暢んびりした氣持でうつら／＼居眠りでもしてゐるのは悪くないものである。

又脱衣場には大抵理髮屋が出張して來て居るので、その場面の一隅に姿見の鏡を立て、裸姿のままの容を最もまめ／＼しく取扱つてゐる。腹の上にタオルを載せたゞけの布袋の恰好であるが之をスツカリ綺麗に仕上げて呉れる。殊にその耳掃除ときたら天下一品であつて、その細かい七

つ道具を巧みに使ひ分け、好い氣持にさせてくれる。これらは三十分か一時間の仕事で済むのであるが、兎に角、湯上りの清浄な氣分と云つたら何ともいへない。上海なり、北平なり、天津なりの大都會に在りては、その中にも、上流向き、中流向きと種々な階級があり、殊に又杭州の西湖邊りには聚豐園など云ふを初めとして、幾多の紳士向きの風呂が營まれてゐる。又山西省の太原城内邊りは田舎であるとは云へ、あの地方での都城であるが爲めに可なり立派な高級風呂がある。

浴後の娛樂場としては良い設備を施した廣い部屋の出來てゐる處もあり、蘭の鉢植だの、美しい金銀の扁額、聯なども數へられ、清凉劑飲物類から果物、菓子に至るまで用意せられ、そのサービスぶりは十二分にとめられてゐる。又客の需むるものもあれば、別室もあるとかいふことである。どうせ一日、緩つくりと遊ぶ心算で出掛ける客であるから、その相手の氣分をそこなはないやうにしてゐる。行く方でも金を使ふ考へで出掛けてゐることだし、風呂屋の方もその氣持に副ふやう用意してゐるのである。かう云つた點は日本の今日の錢湯とは丸きり雲泥の差があると云へる。

上海の租界あたりに見る澡塘は先づ普通の所で、二十錢から三十錢、特別の一人風呂で一圓乃至二圓といふところ、これが通り相場である。尤も北四川路の橫町ボツロ(靶子路)邊りを見る西洋人の經營せる蒸風呂は多く土耳其風呂式であつて、これはお風呂を看板にして他のあいまいな商賣を稼いでゐるとのこと、これ等は例外としなくてはならぬ。しかしその中には時として日本人の經營に成るものもあるとのであるから隅に置けぬ。餘程物好きの客でない限りは、この方面には遊ばないやうである。上海の支那風呂は時折り市役所、即ち上海の工部局の警察あたりから役人が見廻りに來てゐることがある。尤も私服でやつて來てゐるので、宛ら浴客の如く見せかけてゐるのであるけれども、どうかすると、その方面の指圖に依つて注意人物などを押へてゐることもあるらしい。

脱衣場風景

脱衣場には二十人、三十人、大勢の時には五十人以上もゐることがあつて、風呂から上つた客は少くとも三十分や一時間、長いのは半日も、緩つくりと裸體にタオルを掛けたまゝ、無駄話な

どをしてゐるのである。ボーイはしきりと熱茶を持つて來たり、熱く絞つたタオルを持つて來たり、又サイダーを抜いたりなどしてサービスに努めてゐる。彼方の隅、此方の隅でも笑ひ話が出る。中には空氣枕のやうな太鼓腹をした面白い茶目の華客が居て、黄色い聲を張り上げ、圍りの浴客を相手に滑稽な話題をしきりと投げる。すると邊りの者は面白がつて、それのお相手をする。そのサークルが益々擴つて來て、随分隅々の者まで席を立つて其處へわざ／＼近寄つて來る、話は益々花が咲く。工部局から廻はされて來た役人も何食はぬ顔してその中に打ち交り、冗談半分に種々な話題を投げ、遠廻しに引掛けて見たりなどしてゐることもある。和氣霽々の裡にも或る者は目を光らせてゐるのであるが、しかしその邊の和らかな雰圍氣は如何にもなごやかであり、役人としては何等捕物のないこともあるであらうが、何れの客も皆打ち解けた態度で面白可笑しく、宛ら一つの常設的俱樂部の觀をなすことがある。

日本の人は猿股をつけてゐる關係上幾ら支那服を着けてゐても、その脱衣のとき最後になつて猿股を取る。これが大陸の人にはすべて極めて異様に感ぜらるゝと見える。云ふまでもなく、支那では昔から猿股をする者もなく、禪をする者もゐない。ふんどし(禪)をするものは世界で

南洋人種と日本人だけである。西洋にもない習慣である。西洋人はワイシャツで包んでゐるやうである。支那ではクウツ(禪子)と云へるズポンを穿いてゐるけれども、實は中はブラン／＼のまゝでゐるのであるから、その場合に衆目の見る所、支那人のズポンとちがつた猿股や越中を外してゐる所作は注目的になるわけである。これは無理からぬことである。そのとき前や後ろで密々話などしてゐる人の言葉を聞いて見ると、この日本客は何をつけてゐるのだらう。ひよつとしたら何か臀部のあたりにおできでも出來てゐるのではないか。それとも何か病氣を持つてゐる客ではないだらうか。さもなくばあゝした、晒木綿で以て局部を覆ひ隠してゐるわけはない筈だ。越中ふんどしなど知つてゐるわけもないのであるから口々に變なことを云つてゐる。晒木綿などを彼處に當てゝ居るのは繻帯をしてゐるのだ。一體どういふ病氣なのか見たいものだといふ調子で全く周圍から物珍らしげに視線を注いで來る。一度目をつけられると、錢湯の浴槽に這入つてゐても、皆がその噂をして絶えず見に來るので、衆人の的となるのである。

さうして好い氣持で風呂から上つて脱衣場のアーム・チェアに休んでゐようとしても、亦上り客がそれに興味を持ち、何となく眺めてゐるのである。タオルを取つて今度は愈々日本男兒の

越中をしようとする、又猿股に手をかけようとする。すると又その場面に皆が目を注ぐ。その何も病氣もなく異状の全くないことを確かめると、そこで初めて不思議さうに云ふ、「貴下はどういふ譯でさういふところに餘計なものを着けて居られますか」といふ奇問を發する。これには殆んど閉口するのである。が、やはり國情風俗が違つてゐるといふと、それを着けてゐることが天下の奇觀として見られる。氣持ちの上で之をのけるわけに行かないとは妙なものである、など、腑に落ちる處までよく説明をすると、成程と諒解する。けれども、さう云つた風に病氣を包んでゐるものゝ如き目で人を見るといふことは、見られるのが當然であるのか、見る者が無理なのか、それは兎に角として、日本のこの間の隠れた風俗があらゆる問題になる性質を有してゐることを茲に注意して置く。日本へ子供の時分から來た中華民國の青年達は、永年その猿股の習慣がつくと廢められないものと見えて、日本式に之を穿いてゐる。國に歸つてからも暫くやつてゐるやうである。けれども、結局は郷に歸つては郷に従ふやうになる。その點から見ると矢張りこれのな一方が衛生的であり、殊に又夏の汗ばんだ時などは無論それのないに越したことはないと思はれるのである。

南支那では夏場になると、ユンサ（雲紗）と稱する熱帯植物の實で染めた漆色のした絹織物を用ひられてゐる。その織物は細かく見ると色々の模様が出されてゐるやうに見える。けれども實際は漆塗りの布と見ても宜いものであつて、殊に夏場、汗の出る時分には氣持の好いものである。値段は安くない爲め、ブルジョア階級の人でなければ之を使はない。これで仕立てたズボンに夏は殊に氣持が好いと云つて讚美してゐる者が多い。日本のふんどし、猿股もこのユンサを用ひて作つたならば、夏の衛生に殊に宜いことと思はれる。

又南支那ではカーデイン（嘉定）で出來る龜の子形に編れた麻糸のシャツに細い笹竹の管を通して仕立てられたものがある。これは汗除けには最も適當したもので、あちらではよく行はれてゐる。しかし慣れれば兎に角、慣れない外國人などには始終肌にその竹の管の觸つてゐる感じがゴワ／＼して、その竹のシャツを着てゐることが始終念頭から離れない。人と對話をしてゐるときでも、自分の肌には竹のシャツがこわばつてゐることが忘れられず、その氣持が始終つきまとうのであるから、結局なだらかな氣持になり得ないのである。もし之を眞に氣にならない位に着てゐても普通の氣持であり得るならば、多少汗かきの日本人には持つて來いものだと思ふ。支

那風呂で殊に江南地方の錢湯あたりで風呂から上り、之を着けたまゝ我家へと往來を歩いて歸る手合を見るのは、羨しくも感ぜられる。

裸で湯歸り

日本の人は風呂から上がると浴衣なり何なりを着けて家へ歸つて行く習慣になつてゐるが、あちらの田舎邊りではズボンを無雑作に引掛けたまゝ、平氣で往來を歩いて居る者を見る。これはさらにある。別段交番があるわけではなし、もしあつたとしても、やかましいわけでもなく、近所の手前がみつともないと思ふわけでもなく、その邊は實に呑ん氣で平氣の平左である。

又七八月の盛夏の頃になると、戶外で百五十度から六十度にまで昇るといふ暑さを見ることもある。そのためにシャツを着けるなどいふことは到底堪へ切れない。汗はダク／＼胸に脊中にと瀧の如く流れてゐる。あの豚肉の脂肪質で肥え太つてゐる圖體の、三十二三貫もあらうかといふやうな大の男が、額に、又二重輪の切れ込みの出來てゐるあの喉に汗して、而かも玉の如く汗をにちみ出しながら平氣でそのからだを運んでゐる様子と云つたら、如何にも支那らしい。特にシ

ヤツなど着ける氣持にはなり得ないであらうと思はれる。

支那風呂浴槽の内部は大衆的に廣く又大まかに出來てゐるのが多い。多くは子供などの這入れない位に十分なみ／＼と熱湯が湛へてゐる。大人でも臍よりも高く胸のあたりまでタツブリと浸ることが出来るくらゐある。さうしてその縁を土手に見立て、二寸三寸といふ厚板が平行に數多く渡されてゐる。可なり體が温まつて來ると、その板の上に河童の如く上つて脚を伸し休めてゐるのである。湯から出たり這入つたりすること五回、十回、何れもその氣長く入浴の樂しみに耽けつてゐる。浴場の流し場は多くは浴槽の周圍に取られてゐて、丈の高い椅子が流しを取るものゝ爲めに備へられてゐるところもあり、又漆喰の上に寝そべつたまゝ體を洗つて貰へるやうに出來てゐる處もある。その流し場の一隅には小便する設備の出來てゐる所もある。支那風呂の焚き口の方は近來エンジンを呼びてゐたり、又その燃料も石炭を用ひてゐたりして、可なり大仕掛に、又ハイカラに出來てゐる所も少くない。風呂は田舎の方では大抵朝早く夜明けの頃から既に沸いてゐると見えて、その客を呼ぶ爲めに、日本の火事場の半鐘のやうな風に、カーン／＼と朝霧の中を鐘の音が響き渡つてゐる處がある。慣れない者は近くに火事でも起つたのかと思ふものもあ

るが、さうではない。それはお風呂が沸きましたといふ合圖なのである。

日本の人はとかく支那人と云へば一生涯風呂なんかに入つたこともない不潔な者ばかりだといふ風に考へる頭がある。又支那を不潔と呼ぶ時の代名詞の如く、そのお定り文句として之を云ひ嘲つてゐるものがある。よく自分は日本人から支那にも風呂屋がありますかといふ問が浴せかけられることがあるが、多くの日本人の支那觀察は、たゞハイカラなホテルに行つてパーラーで要人に面會したり、一等の汽車で窓から支那を見學したりすることのみをしてゐて、親しくその内地の日常生活にまで這入つて觀察を試みようとしなない。生活の實情を知らない者はたゞ支那街のうはべのみを見て、その生活を輕蔑し、不潔の代表物の如くに之を見る。さうして支那街には風呂屋を見たことがないなど宜い加減のことを放言するに過ぎない。もし支那風呂の事をよく念頭に持つて支那街を歩いて見ると、その風呂屋の看板の数だけでも可なりある。又その内部に這入つて實際を見、之を浴客として味つて見る時分には可なりのお風呂仲間のゐることに驚く。その意味からいつて支那の人が風呂を嫌つてゐるとか、風呂屋の設備がないとかいふことは眞つ赤な嘘であつて、全くの想像に過ぎぬ。今少しく支那のことは之を正しく見るといふ考へになる

べきだといふことを力説しておきたいと思ふ。

支那は又各地に回々教徒の風呂屋があつて、これは大分様子が變つてゐる。その澡塘の門札にはアラビヤ文字で其の事が記されてゐる。元來潔癖性の特徴を持つ教徒であるから、他の回々教の料理だとか、硝子翡翠商だとかいふ職業も同じことであるが、斯う云つた清潔を旨とした點を特徴とし、その自ら體を持つる方法に於ても衛生上に特に神經過敏となつてゐるものである。この意味から云つて支那風呂の中でも、この回々教徒の風呂は比較的清潔を貴べる點で日本人のそれと相通づる所が多い。又その回々教徒に限つて、その役人であると、會社員であると、商人であるとを問はず、一日に五度の大洗小洗と云へる儀式的行はれてゐるところがある。この大洗といふのは回々教徒自身そのお寺の清真寺に集まり、神聖な風呂場で以て神聖な湯を貰ひ受けて頭から之を被り洗ふことをいふのである。小洗といふのは體の部分々々を細かく洗ひ、殊に局部の孔といふ孔、九つの孔を出来るだけ丁寧に洗ひ清めるのを云ふのである。別段これは風呂に入るといふ意味からやつてゐるのではない。けれども、その熱湯を用ひて宗教的儀式に依り洗ひ清める意味に於て、支那では一種特別な變つた清め方として考へられてゐるのである。

かう云つた回々教徒は支那にこれ三千万からの信者としての住民を有し、新疆省から甘肅省にかけて支那の西北部には最も多くかたまり、馮玉祥がその勢力範囲としてゐる地方は多くはこの教徒なのである。中華民國の政治の上には一種の癌の如くこりかたまり、なか／＼齒の立たない力強い宗教團體となつて居る。山東、河北から、南は江蘇、浙江、廣東の方面まで、到る處に擴つてゐて、協同一致、團結心の強く、その恐ろしい宗教上の信念の下に統制のある活躍をなしてゐる連中である。日本の本土へはこの宗教はまだ這入つて來てゐない。けれども、その潔癖性に本づく特徴を有する日本人には、支那風呂の點と併せ考へて、興味深くも感ぜられるのである。

支那風呂の味

支那街に踏み込んで、本當の支那の臭氣を味ひ見るといふ場合には、見るべきもの、聞くべきもの、味ふべきもの、何でもある。支那の芝居よし、支那の料理よし、支那の骨董屋よし、呉服店よし、色々な所に踏み込むのがよろしく、又面白くもある。が、併し支那人の赤裸々の所その

眞面目のところを窺ふといふ爲めには、支那風呂を味つて見るくらの風味のあることはない。併しさうは云ふものゝ、自ら裸になつて入浴を取へてし、その同席の浴客と喋々嘯々、腹藏なき氣持の取交しまでするといふことには、餘程の打込んだ氣持態度を持つてゐるものでなければ出來ないことである。支那の家庭で食事をとる時、眞夏であるとおちらの主人公は先づ肌を現はし、ズボン一つの素裸かになつて箸を取る、又盃を擧げる、拳を打つといふ風である。それを日本から行つたものは、四角四面な顔をして上衣も取らず、シャツ姿にもならず、さうしてぎこちない盛裝した氣分で汗ダク／＼、苦しい思ひをしながらお接待をして居るといふのは、いかに折角、大陸に行つてゐながら、實にぎこちない限りである。宜しくあちらの主人自らが上衣を取り、客にも勸むれば、喜んでその意思に適ふやにうするのが宜いのである。さう云つた點に、日本人は打とけず、勸もすると他人行儀の氣持をわざ／＼現さうとするものがある。日本の人は支那に行くとその衣服を脱ぐことだけですらもこの通りであるから、況んや支那街に行つて支那風呂の門を潜り、何もかも脱却して風呂に飛込んで來るなどいふことは、餘程むづかしいことである。その支那街の氣分を十分に、呑み込んでしまつた者でなくては出來ない。

たゞ茲に注意して置きたいのは、日本人は南京蟲のことを心配することである。前にも言つた通り支那風呂では、脱衣場の着物を掛ける壁が二間も三間も高いところであつて、他の客の衣裳と相接してかけらるゝのではない。隣同士可なり距離があるのであるから、その點の心配は先づないといつても宜い。又携帯品、貴重品の拘摸はしないかといふ心配もあるであらうが、その點は初めから注意するに越した事はない。支那風呂に出掛ける時は、風呂鏡以外には持つて行かないことである。さういふ點に注意さへしてゐれば、自分が裸體姿を四方から見られる位のことは何でもないことである。若しさもなくして、盥に湯を取り場所ならぬ所で行水など使つてゐるときには、圍りから寄つてたかつて見てゐる。支那宿などにゐて迂つかりさういふ行水の場所でも見られると、面白半分に村の連中が押掛けて来て、手拭を使ふ手の一舉一動まで見てゐるし、なか／＼厄介なことになる。だから行水なんかよりも、皆そこらあたりの人の出掛ける支那風呂を利用して、之に遊んで、綺麗薩張となつて歸る方が、どんなによいことか判らない。

六、恍惚の阿片境

阿片は支那人の生命

阿片は支那民族のこの世に存する限り、その嗜好品として喜ばれ、又その使用は打續くものであらう。幾ら法律の上で之を禁じてしまはふとか、又人道問題の上から之を禁絶しようとかしても、さういふ外部からする壓迫だの、抑制だのいふもので以て、之を撲滅させることは出来るものではない。宛らこれは人間として生れてその性の關係から起る氣持と同じ位に、支那にあつては、阿片をその民族の趣味嗜好から除き去ることは不可能のことなのである。無論幼少の時から之に近寄らなければ何でもないことではあるが、併し支那の習慣として功成り名遂げた者、又金の出来て有ゆる趣味に耽り得る者は、何を苦しんで阿片だけを別に外におき、之に無關心になり得ることが出来るであらうか。

ヤング・チャイニイズの外國留學から歸つて來た連中などは、阿片は支那に於ける野蠻な風習

である、之を紳士の前で口にするだけでも穢らはしい、又人から阿片の話を持掛けられると面子をわるくしたと云ひ、好い氣持がしないらしい。侮辱されたやうな感じがするなどといつてゐるものもある。かういふ議論をする青年は、第二夫人、第三夫人の話をも自分に持掛けられると、人を馬鹿にしてゐる、吾こそはヤング・チャイニーズでござる、中華民國を背負うて立つ第二の國民でござるといつて、聊か得意氣になり、反り身になつて正々堂々の意見を吐く手合である。しかし第二夫人の話と阿片の問題とはちがふ。同じ天秤棒に掛けて見ても、阿片の方は見つともなると云ふ。時代遅れの蠻風であると云ひ貶して居る。随つて自分自ら心を清うして、第二夫人にも阿片の蠻風にも染まないうやうにと努めてゐる。

ところが支那では金が出来たり、地位が出来たりすると、何時とはなしに、誰れに勧められたといふことなく、やはり、世相全體の雰圍氣からして阿片の煙管に引つけられて来る。いつしか之を自分でも手にするやうになる。又取巻きの手合、或は軟かい方面の連中から取り持たれて、色々歓迎の意味からして、或は慰めの意味からして之を提供せらるゝに至る。初めは心を石の如く持つて硬い事ばかり云つては居るものゝ、ツイ／＼知らないうちにそれに手を掛けるやうにな

る。又取巻き連中も時には酒を勧めるのと同じ意味で、或は煙草を一本勧めるのと同じ位な軽い意味で一步々々とその方へ導き込む。それもまんざら悪い氣持はしないものであるから、マア少し位は宜からうといふ所に来る。それからそろ／＼その氣になつてしまふ。

船上の阿片室

早い話が、自分達支那の内地旅行を、運河を利用してゐる時分でも、その水上を走る一錢蒸汽の部屋の中には、之に導き込む設備の出来た部屋があちこちに出来てゐるのを見る。その船内の大衆的な大室に於ても阿片は必ず支度されてゐる。況して一等二等の特別室にありては、部屋は狭く出来てゐるがそれだけに内部が完全してゐて、その部屋付のボーイもその邊のサーピスを心得てゐる。そのもてなしの一つとして大抵この阿片を喫む支度をするのである。別段船客の方から之を命ずるわけではなくとも、ボーイは、自分の部屋に客が這入つて来れば、それ位の備け仕事は譯なく聴き容れて呉れるものだ、といふ氣持を持つてゐる。無論洗面器に熱い湯と之にタオルを浸して持つて来たり、熱茶を酌んだり、蘭の花を飾つて呉れたり、食事の時間には早目に案

内して呉れたり、色々心配をして盡しては呉れる。けれどもさう云つた月並みのサーピスは當り前であつて、大して客を喜ばせる意味にはならない。客が船旅をするに當たり、一番何を喜ぶかと云へば、謂ふまでもなくこの阿片である。阿片は之をヤーベン（阿片）と云はなくとも、ターエン（大煙）と云つてもこの意味になるし、又口でわざ／＼發音などしなくても、左手を口許に持つて来て、親指と小指を一直線上になるやうな形をし、あとの三本の指は之を折曲げる、すると宛ら煙管の棒の如き恰好が出来る、之を唇のところに軽く持つて来て、さうして目の玉をちよつと動かす、視線をボーイの目に注ぐ。すると、心得ましたとばかり、ボーイはシー／＼（是是）といふ。承知しましたの意味である。これで以て既にボーイは内心、最早や仕事にあり付けた、チップの外に内職が出来たといふ意味が悟られてゐるのである。

そのみならず、ボーイは自分の部屋に通つて呉れた客が、椅子なり、寢臺なりに座を占め荷物を置くと、その時に氣の早いボーイならば客の右手の爪の色を見る。爪の色が黄色く又は淡褐色に焼けて黒く焦げてゐるのを見るときは、云はずして、その阿片黨であることを推知するのである。丁度日本でも染物屋の職人とか、或は寫眞屋の現像師とかが電車の中に何食はぬ顔して乗

つてゐても、大抵その指を見れば、その商賣が想像されるのと同じわけである。それであるから、その支那船に乗つて来た客があると、ボーイはそれを當て込んでゐる永年の經驗からして、その邊の目は鋭い。最早や爪の色が普通でない客と見るならば、言はれなくても氣を利かして紫檀製の縁の低い盆、之には上等のならば青貝の螺鈿刻で、鳳凰の圖案、瑞鳥、瑞獸さては目出度い植物の圖案などを現はしたお盆を取出し、阿片吸食の七つ道具を完全に取揃へるのである。さうして心得ましたとばかり、ちやんと、寢臺の右手に別の小さい臺を添へ置き、丁度客が横に寝そべつて體を斜めにして喫へるやうに、適當な位置に支度をする。實にその邊は心得たものである。客にその方面の相談を持掛けると、客も亦心得たもので、その色々等級のある阿片膏の中で、一番上等のものと云ひ付ける。ボーイはホク／＼もので色々支度する。ボーイにしてもその阿片膏の高ければ高い程利益が多いわけで、その方の鑑を持つて来て、それから取出して、食後の休息時間に間に合ふやうにと、客の食堂から歸るのを待つて支度萬端を整へるのである。

満堂春を生ず

支那船の中は、斯う云つた阿片客とその客の意を迎へる爲めに働くボーイのサーピス振りとで満堂春を生ずると云つた氣持になる。船は出帆の時間も行き先き先きにより、それ／＼色々であるが、上海からニンポ（寧波）行きのは午後五時の出帆と云ふことになつてゐる。金持の暇のある客は大抵午後の一時二時の頃から乗込むのである。時間ギリ／＼に乗込むのも、正午から來て乗込んでゐるのも船賃に變りはないのである。寧ろ早目から行つて乗り込み、良い部屋を取るに如かずと客の方もな／＼考へてゐる。船の方でも又待ちかねてゐるといふわけ。さうして家を早く出て行く。どうせ船出の時刻には、好い氣持のホロ酔ひ機嫌で立ち、窓も硝子越しに残る煙を打眺めつゝ靜かに港を見送らうと云つた風に考へてゐる。それで、それ／＼客は早目に乗込む。手の爪の色の變つてゐるのも、變つてゐないのも、又若いのも、老いたるも、何れもそれ／＼室に納まり、ボーイに支度をさせるのである。部屋はお隣同志であるし、幾らドアをびつしやり締めてあつても、何處からかその煙が漏れて來る。

時間ギリ／＼にセロブ（十六鋪）まで出かけ、自分で船に行つて客室の交渉をすると、最早や空部屋はないといふ。しかし若し御都合で、先客が一人ゐられるけれども、その脇に一つ寢臺の

空席がある、よろしくばどうぞこちらへといふ。案内をせられるがまゝに部屋へ通されて見る。こちらは大抵のことは慣れてはゐるものゝ、いざ通されて見ると、これは全く大變である。小さい四疊半足らずの船室が壁も天井も見えないくらゐ煙が濛々としてうづ巻いてゐるのである。火事ではない。煙草の煙とも違ふし、又蚊やりの煙煙とも違ふ。何とも云へぬ一種芳ばしい、さうして油こい香で、而かも甘味があるやうな氣がする。何等目を刺すこともなく、喉を刺戟するともなく、甘いやうな芳ばしいやうな好い香が鼻を突いて襲うて來るのである。別段之を拒絶する必要もないので、これで宜しいと、その部屋に取り決める。さうして休息かた／＼自分で寢臺の上にスーツケースをそばに足を十分伸ばし寢そべつてゐる。熱い手拭や、熱茶が運ばれて來る、先客にニコツと挨拶をして「どちらまで行かれます」といふ言葉をかけて見る。先方ではこちらを柔かく眺める、そしてこちらを矢張り阿片の趣味者と見てゐるらしい。無論指の色が染つてゐるわけでも何でもはない。けれども、さう云つた眼で見えてゐる。それを事新らしくさうでないとわざ／＼否認した恰好もしない。さらばと云つて好きで堪らぬといふ顔付もせぬ。悪くはない煙の味であるから、その雰圍氣の中に柔かな態度でふうわりと休んで居つて見る。

廊下を歩いてゐる三等客の群は物珍らし氣に時折り部屋を覗き込む。廊下に押しかけてゐる連中はあの狭い通り道に礎を敷いたり、風除けのズツクを引廻はしたり、板で棚を吊つて見たり、苦心慘憤で座席を造ることに三昧である。船賃も殆んど只同様、僅少の金で乗込んでゐる手合であるから、人があの美味い阿片の煙をくゆらしながら横になつて寝て居る姿を見たら、それだけでも羨しくて堪らない。好い氣持の光景であるわいと云つた眼付で見えてゐる。それが入替り立替り覗き込んでゐる。こちらにも之を殊更に別に隠さうともせぬが、ボーイの方でも特に之を庇ふやうにもせず、平氣で煙を立てゝゐる。

上海から出る寧波通ひの船の内部は殊にその阿片室の賑つてゐるので聞こえてゐる。寧波は上海の財閥を以て任じてゐる豪商の多く出てゐるところ、上海を夕方五時に出ると、朝の七時には寧波の船着場に達するといふ僅か一夜で行かれるところではある。が、その間を喫みながら乗つて行くといふ手合は幸福な身であり、又その客が可なり多いのである。寧波通ひの船の中には「新北京」、「新江天」、「新寧紹」などと云ふ、三四千噸級の輪船が殆んど毎日のやうに通うてゐる。その中儘か「新北京」は英國船であり、船長も、機関長も、一等運轉士も、上の乗組連は皆

英國人で占めてゐる。外人の乗組員が監督をしてゐるのであるから、阿片の事など監督が八釜しいことであらうと思はるゝが、實は決してさうではない。若しも餘りやかましい事でもいふと、客は他に取られ、自分の会社の船へは折角のお得意が取れなくなる。阿片を喫んだからと云つて之を毛嫌ひをするやうなことをしてゐるは、会社の収入にも關係する。船客は喫むべし、ボーイはサービス第一に努むべしで、知つて知らぬ振りをしてゐるのが、イギリス流の大方針である。先づかう云つた事を、看板にしてゐるわけでもあるまいが、併し事實上さう云はれても云ひ開きが出来ぬわけになつてゐる。

阿片室即客室

支那では、揚子江邊にしる、又江南の水郷にしる、運河の間をあちらこちらと縫うて歩く輪船には、それ／＼一等、二等、三等と階級が設けられてゐる。が、その何れの部屋に這入つて見ても、氣のきいた客は阿片を喫みながら乗つてゐる。又之を喫みながら船の旅をすることが人生最大の快樂ともなつてゐる。共に客の案内でもして乗込んだ時には、客にも阿片の御馳走をしてゐ

る。自分も楽しみ且つ人をも楽しましてゐる。殊に金儲けを共にせんとする客、或は名所舊跡を案内して見物させようとする客、その他多くの乗合船で偶然一緒になつた客、これらに對しても同じやうな心持で、その心からの御馳走になるものはこの阿片である。船の内は阿片室が即ち客室であり、客室が即ち阿片室となつてゐる。若し夫れ冬の寒い時分に船の一室、何處かの隅つこで以て一人でも之を喫み始めた者があつたとすると、その豆ランプの上で焦されてゐる阿片の煙、その香氣が、船内に隅なく行渡り、それこそ船中悉くがこれ阿片の香氣と化すると云つた風にその空氣の傳染は實に速い。

慣れない日本人はとかくその氣持が悪いとか、あれは何の香であらうとか、その正體を確かめて見たいとかいつて變な推測をしようとする。これは支那客の方からいふと嫌ふ所である。どうかすると日本人で金筋の遣入つた詰襟姿のものがその金ボタンに金筋入りの帽子を光らかし、變な態度で、そば近くやつて来る。そして飲んでゐる者の枕許にボタンと突立つてゐるやうなこともある。周圍の支那の人も勿論之を嫌がる。金ボタンの日本人は別に意地悪い意味があつて突立つてゐるわけでもないが、その態度と云ひ、又怪訝な顔付と云ひ、又そのぎこちない素振りと云

ひ、一つとして相手方に柔かい感じを與へてゐない。それ故折角その支度をしたボーイも、又喫んでゐる當人も、何處からか役人が踏込んで来たのでないか、或は自分共に害を爲す某方面からの廻し者でも来たのぢやないかと、ありもしない變な心持を以て氣を廻すやうになる。さうして誰れいふともなしに變な氣持ちから豆ランプの火を消したり、折角の煙管を莖莖の下に隠したり、俄かに變な様子をとる。これは長江方面の船の中でいつも親しく自分共の目撃する所である。が、洵に思ひ遣りのなさ過ぎる態度である。折角好い氣持になつてゐる所を、向ふも向ふだが、こちらもこちらである。さう云つたところを見たいならば見るのも宜いが、餘り側近く立停らないことである。生れて初めて見る場面のことゝて人によつては物珍らしいには違ひあるまい。けれども、その少し離れた所を何回も行つたり來たりすれば宜い。さうして之れに視線を注いだり注がなかつたりしつゝ、つまり見ない振りして通つて見れば宜いのである。さうすれば向ふでも氣が付かないだらうし、こちらでも十分視察の目的は遂げられるわけである。さう云ふところからいつても、阿片は支那の大衆にとつて、その船内に居ようと、陸上に居ようと、何處に居ようと、之れを手放す氣持はしてゐないのである。

旅行者の手荷物の中には眞鍮の浅い盆或は漆塗りの革製の盆などを持つて行つて、例の七つ道具を載せ、その煙管の如きは竹を用ひず、護謨製のパイプでその雁首と吸口を水牛の角で作つた轆轤細工を用ひてゐるものもある。贅澤なものになるとその價幾萬圓、簡單なものでも五圓や十圓はしてゐる。他の荷物はいくら忘れようとも、どうしても忘れられないのはこの七つ道具である。

船内では時折りおかみさんらしき人が阿片膏を火で温め、煙管に當てがつて直ぐ喫めるやうにしてゐる場面を見ることがある。女が阿片を手にするとは珍らしい光景であるわいと思つて見てゐると、やがて女は之を横になつてゐる亭主の所へ持つて行き手渡しするのである。成程と思つて之に視線を注ぎ、しばし見てゐると、親父はそれを受取り篋を使ふのも面倒臭さうな顔をして、いきなり右手の人差指と親指を使つてジ〜と阿片膏を火で焦しつゝ、鯉が上呑みでもする如く口をパツパと開き、煙管をくはへるのである。臍を長くして下げる。如何にも天國にでも遊んだ如き満足さうな氣持である。あれ程までに美味いものであるかなと思はれるのだが、事實はそれどころでなく、人の想像し得られない感極つた無我の境地に這入ることが出来るのである。其

無我の境涯を内容について詳しく説明することは宜くないことであるけれども、兎に角その大體に依る美神經の刺激は喻へるものがないのである。幾ら法律で之をやかましく云はうと、社會運動の方から之に制裁を加へやうと、そんなことくらゐで驚くものではない。あの若い張學良ですらも既に阿片に中毒して癡者となつてゐることは有名な話である。一度その中毒患者になつてしまつた以上は、之を廢めるわけに行かないのである。廢めたならば體の血管の上に、又神經系統の上に異狀を來たして來て、頗る不愉快になり、惡寒を覺えるに至る。若し之に慣れてしまつた者であるならば、切めてその分量を限定し、長年に亘る間に幾らかづつ減らして行くやうにすることが、切めてその方法であるとせられてゐる。けれども、これとても言ふべくして容易に行はれるものではない。臺灣ではしかし之が遞減法を施行してやつてゐるのは珍らしい事である。

船客奇習のいろく

支那船に見る阿片癖のことを書いた序に阿片以外の船客奇習について少しく語つてみよう。先

づその飲食に因んだ方面のことで求めて見ると、南方では濁流を汲んで沸かせた湯を飲み又それで煮ためしを食べてゐる。お茶にしても料理にしてもすべてそれである。一度明礬を投じて泥を沈澱せしむることもなくすぐいきなり之を用ひてゐる。それを平氣で沸かして飲んでゐる。小便などの泡の浮いてゐる江流であれ、又溜り水であれ餘り清らかでもないが之を汲み取り煮沸してゐる。別に一々氣に留めてゐるわけでないからよいやうなものゝ、考へ直して見ると随分よい加減のものである。永年そればかりやつて來てゐる者には濁流でも中たらない。却つてすつかり土地に萬事なじみ同化してゐるものには、あまり濾化したり色々小細工などをしたりしない方が長命の秘訣となつてゐるのかも知れぬ。江南運河沿ひの家庭を見ると、よく例の馬桶の不淨物を竹のささらで洗つてゐる。そのあたりの水を汲むのにかみさんたちは別に之を強ひて掻き分けようともせず、そのまゝ汲みとつて炊事してゐる。潔癖性の日本人には語りきかせるだけでも顔をしかめる。船内生活をする支那人どもはそれ位のことには朝めし前の事と心得て何れも平氣である。そのくらののであるから食器を洗ふにもその水、船ばたを洗ふにもその水、それ位は何でもないとする。甚だしきは其の船ばたを洗つた雑巾で、食卓も拭へば茶碗も拭ふ。其場面を見てゐると一層のこと始めから拭はざるに優ると云ひたくなる位のものである。

尙、船客どもが船内で卓を共にし食事をとるとき箸のおきやうに注意をして見ると、日本式に横に向けて之をおくことはしないのは勿論、之を必ず中央に向かつて縦に、つまり中央の御馳走に向かつて放射状をなすやう、それゝ各自の箸をおく。而かもその一端を皿に枕しておくとか、又二本とも皿の上に乗つけておくやうなことは、深い迷信の力があつて、互に戒しめて居るやうである。若し客の一人でもがその習慣を破つた置きかたをすると、船頭は直ちに來たつて之をおき直させ、八釜しく注意をしてくれる。船上で箸を皿の上におくのは櫓の陸にあげらるゝことを意味するとか云つて、漁人、船乗り仲間では之を忌みきらふこと夥しい。この迷信は江南地方にかなり廣い範圍に亘つて行はれてゐる。自分どももよくゝその差し障りのあることは承知してゐながら、ツイ、談笑裡に迂つかり忘れてやるものだから、船頭から叱りを受くること、珍らしくないのである。

尙、船客の最も、抜かりのない遊びを一つ紹介して置きたい。と云ふのは例の麻雀である。支那では賭け事の遊びが日常生活の中に編み込まれ、之を忌避しない事は云ふまでもない。その

暇さへあれば麻雀をやるか、晝寝をするかしてゐる部類のものが相當にゐる。中には年がら年中稼いでゐる良民もかなりゐる代り、又極めて呑ん氣に、麻雀三昧に耽つてゐる手合も少なくない。

麻雀の道樂は徒然のあまりやつてゐるかと思ふに必ずしもさうでない。實は道樂兼收入の方面をも考へ、一舉兩得の心持から出てゐるものが多い。之が勝負に打ちかゝるや、二晝夜も三晝夜も打つとほろしに續けさまに耽つてゐるのを見ることすら珍らしくない。火車の中でも茶館の中でも遊山に行つても、全く處かまはず隨時隨處に之を始めてゐる。船中は殊に持つて來いのところである。いらくでも仲間を得らるゝし、取り分け官船とか房船とか云ふ一二等の客室では四人がひと部屋に納まり左右上下に寝らるゝやう寢臺が出来てゐるが、室内は卓を共にして四客が一緒になり、麻雀でもして遊ぶには都合のよい餘地がある。部屋のボーイも心得たもので、請められなくとも氣をきかせ、食卓には紹興酒、花彫の芳醇なところをよい加減に、燗を出して來る。船内支那酒の味は又格別なもので、大抵皆ほろ酔ひのよい氣持ちになる。やがて、食卓のあと片付けも済み、洵然とした酔客に擦手巾と云つて、例の熱い手拭が出る。そこへ、そろく

「麻雀は如何です」と誰れかがつぶやき出す。待つてゐましたと許り、他の客も賛成をする。ボーイは、麻雀卓の用意をする。牌の小函から賽コロが出て來る、と云つた調子ですつかり、客の意中を迎合へ、呑み込んで手ばかりなくやる。上海セロップ（十六鋪）の碼頭から寧波（寧波）に通ふ「新北京」ニンシン「寧興」と云つた大型の輪船では官船あたりに乗り込んで見ると、ボーイの酒手込めての四元半往復九元の船賃のかゝるくらゐは、之を稼ぎ出すに何の骨も折れないと見て取つてゐる。併し勝負の事だから四人皆勝つにきまつた譯でない。

部屋にゐる障、王、吳、鄧四君中の何れか運の強い先生が、船賃諸入費とそれ以上を弾き出すことが出来るのである。數多い般客中でも寧波の人は特別で、寧波人くらの勘定高く、又勝負事にかけて鋭いものはないと云ふことである。わざと、船賃を棒に振つてまで、上海寧波の往復を企つるものはない譯だとにらんでゐる者もある。餘り穿ち過ぎた話になるかも知れぬが、寧波人は轉んでも只では起きぬと、船内でもよく人は云うてゐる。寧波人と麻雀をやるならよく棒を締めてかゝらなくてはと、一目をおいて見てゐる。

一と船に千五百人からの客を乗せて滬甬（上海寧波）間を航行してゐる四ハイの輪船の裏に行

はれる船内の麻雀合戦は、實に物凄いなものがあるやうだ。自分は幾度かこの間を船行して、最近にも蒋介石の郷里奉仕に遊山に出かけたので、往航復航この船に據り益々その感を深くしたのであつた。

阿片を忍ばせるアメリカ士官

聞く所に依れば、アメリカの艦隊、大小種々の軍艦に乗つてゐる士官達は、南支那の航海に於て、或は長江を上下する間に於て大抵スーツケースの内へ少なからぬヘーホー（黒貨）を忍ばせて歩くといふことである。これは阿片といふ言葉の代りに用ひられてゐる隠語であることは謂ふまでもないが、どうせ支那内地をあちこちと動く以上は、支那官吏の方面に之を手交してゐることとは夥しく、吾々は之を公然の秘密で官吏に賣付けるのであると云つてゐる。高い値段で官吏は之を買取つて呉れる慣例がある。又歸りには同じやうにヘーホーを詰めて、それを又他の地方の官吏に譲渡す。斯くの如くして、一航海往復の間には普通のサラリー以外のエキストラの収入があつて、大變都合が好いのであるといふ。それ故に東方艦隊の乗組士官達は支那に赴くことを

何よりの奇貨として、別途の収入を稼ぐ機会を喜ぶのである。日本の海軍では何故眞面目くさつて斯う云つた好い機会を利用しようとしないのであるか、不思議でならぬと云つて、風に嘯きながら話して居つた者があつた。

かう云つた話は甚だだらしないない秘話のやうであるけれども、如何にも眞實を物語つた裏面の消息として面白い事實談であると思ふ。

同時にこれ程までに白人の嵌つてやつてゐる事實は、一體何を物語つてゐるかといふと、つまり四億萬の支那の大家が、そのいかに阿片を好き好んでゐて、最早阿片と心中しても思ひ残すところはなないといふ位に嵌つた氣持のあることを物語つてゐるものであると云へるであらう。印度から輸入せられる上海の棉花の荷物の中にも、少なからぬ阿片が藏されてゐるといふ秘話がある。又上海や漢口邊りの大銀行會社には斯う云つたヘーホー（黒貨）に依つて、某國の役人との間に桁外れの大取引が行はれ、それに依つて國際的な大きい犯罪が構成せられてゐるといふことであり、それに依つて又幾百萬弗の大建築でもわけなく建造されるのだといふ話が傳へられてゐる。現に漢口のバンドには、それで天に聳ゆる洋館が江を壓して出來てゐるではないかと云ふも

のがある。

阿片窟の酔客

尙ほ陸上方面に於ける阿片の風習に就ては、船中に於けるそれよりも甚だしい風習が徹底して見出される。といふのは多く大都會の色まち方面では茶館、酒樓の奥まつた部屋には特別のときの阿片窟が設けられてゐる。これは特に阿片窟と云はなくとも、阿片を喫むに都合の好い寝臺が用意されてあつて、之には二尺大の高い枕が用意されており、又阿片盆を載つける長方形の臺が之に設けられ、横に寝て足を「く」の字に折曲げ煙管を弄ぶには都合の好いやうな位置に置かれてゐる。無論その部屋の設備も場所が場所だけに通人向きに造られてゐて、姿見の鏡は固より、麻雀の臺も設備されてゐるし、或はそこになまめかしい彫刻や、飾りのある腰掛が用意されて居つたり、壁に掲げられた額や、又聯の文句には如何にもその方面の趣味を咬るものが見出されてゐる。随つて酒酣なる賀會のお開きになる頃には、引續いて第二次會に移る話が持上がる。その時、もし芝居の方で千兩役者が出て来る時刻にでもなつてゐると、これから芝居へといふこ

ともなるが、或は又芝居よりも阿片窟の方へと云つて例の食指で以て合圖をする。すると一行の者はその方が宜からうといふことになつて、一同乗物を飛ばして名の通つた煙館(阿片窟)へと乗込むことになるのである。固より煙館(阿片窟)と云つても、さう美しい設備がしてあるわけでもないが、第一その氣持が如何にも阿片の天國に遊ばせる。と云つた所をねらひ所として、藝者達が花の如き装ひをし、既にちやんと阿片臺の上に乗つかり、醉仙酔客の心を惹付けるだけの顔色を作つて、待ち設けてゐるのである。

かうした挑撥的の阿片窟に於ける其用意と又その持なし振りは、普通の客が何れも惚れ／＼する位に魅惑的である。別段特別の施設がこらしてあるといふわけではないけれども、その阿片の飲める支度をしてきてゐる處が見えるや否や、最早天下何物もない。阿片の前には國家なく、政權もなく、マアどうだつて宜いさと云つたやうな大きい氣持に擴大化せられてしまふ。そこにはあたら一生の前途を擲つてしまふ者もあり、千萬の財産を捨て、しまふ者もあり、自分の體を阿片と心中して滅してしまふ者もある。かうした阿片で自身を臺なしにし、耽溺することを終局の幕とすることは、常に支那の歡樂生活の極意とする所であつて、殆んど阿片の前には如何な

る者も之に打克つことは出来ないのである。幾ら國際聯盟で阿片の人道に及ぼす害のことなどを理論的に唱へて見たところで、白人の屁理窟までを受容せらるべきものではない。又阿片の爲めに國を滅し身を滅しても、思ひ残す所なしとまで嘯いてゐるものもある。その絶對的な阿片の魅力に對しては、最早や理窟ではないのである。支那即ち阿片であり、阿片即ち支那であるといふ、その大きい哲學的の氣持が支那の天地を風靡してゐる以上は、之に何物を以てしても抵抗することは出来ないのである。

滿洲國と阿片問題

滿洲國は日本の生命線として樹立せられた國であり、そのいかに新國家として樹立せられたものといつても國家と阿片とは全然別物であるといふことの理解を持つてゐることが何より肝腎である。滿洲國三千萬の漢民族が居る限りは阿片に就ての趣味が減退するなどいふことはあり得ない。寧ろ財的に又生理的に之を巧みに運用する方面に頭を使つた方が双方の爲めに賢明な方策であると考へる。又これが住民一般の爲にも功德になる。我が臺灣に於ては阿片の功德は既に證明

せられて居るところである、前にも云つたやうに今日は遞減法に依つてその放果を全からしめんとしてゐるのである。これがその間の消息を有力に物語るものである。支那は都會と云はず、田舎と云はず、この阿片の密賣と、又その趣味者に之を提供せんとする方法とに就て、或る方面のものは寢ても、醒めても、心を碎いてゐる。之を若し官吏が巧みに運用するならば、其の國は富み、之に彈壓を加へるとすれば、たゞその國は犯罪者の數を殖すのみである。そこには國家や國家の法律はいくらあつても如何とも爲し難い結果を生み、之に對しては、寧ろ超越した所の恐ろしい宗教以上の底力を持つて對するの外ないといふことが判つてきた。それほどに末恐ろしく感ぜられるものである。

支那には賭博、芝居、酒、女、など種々な程度の超弩級のな魅力を有するものが數々あるけれども、この阿片ばかりはそれ等の何れよりも更に深刻にして強烈なる牽引力を有してゐるものといふことが出来る。滿洲國にしろ、支那にしろ、その内地の宿屋といふ宿屋にはこの阿片の風習が徹底して行はれてゐる。又宿の内部の事實上の収入は、單なる宿泊料の問題ではなくして、この嗜好品を如何に毎日の客に利用させるかといふ點にあるらしい。それ故支那宿に在つて一夜で

もその夜を味ひ過して見ると、隣室には必ず阿片の香が漲つてゐるし、又毎朝、廊下にはその前の晩に用ひた阿片盆の汚れたもの、又之をお掃除する爲めの道具や煙管などが持出されてゐるのを見る。いくら之を法律の上で禁じて見たところで、今は却て内密で喫ませる爲めのコンミツシヨンの出し方、その袖の下の方法のみが攻究せられるやうになつて来る。その禁制を守らうとする考、なんかよりも、如何にしてその罪の下を潜らんかといふ問題の方が益々攻究せられて行くといふ風になるであらうと思はれる。

それ故支那宿と云へば實は阿片窟であるといふ言葉も成立し得るのである。陸上に於ける阿片の趣味は船中に於けるそれよりも徹底して、支那民族の擴つてゐるところはいかなるところいかなる範圍でも悉くこの阿片の大煙で覆はれてゐると見ても宜いのである。或は東京に、或は横濱にと、時折りこれが魔窟の檢査されるものを見るが、これは唯の片鱗として見ることが出来る。又かつてアメリカに赴任せんとしてゐた某副領事の支那人が、その荷物の中に少からぬ阿片を忍ばせ、密輸入を企てゝゐた事實が判つて、國際問題を惹起したことは、既に新聞紙上にも見えてゐる通りで世人周知の事である。

家庭内の阿片室

尙ほ一般家庭に於ても多少ブル階級の生活を営み得る程度の家を尋ねて見ると、そのうちの奥まつた主人の部屋とか、又はその別室あたりに云ふに云はれないどつしりとした奥床しい阿片室の設備されてゐるものがある。壁飾から卓上の飾、天井から吊るされた彩燈、何一つとして豊かな氣持の唆られないものはない。又その部屋に這入る廊下の左右に於てすら、その方面の氣持を唆る風流な繪などが額縁に納められて、目通りの處に飾られてゐる。奥の部屋へ通されて見ると、主人は待つてゐましたとばかり行きなりその懐かしい寢臺の上に客を持ってなすのである。普通ならば四角四面の紫檀の硬い椅子に、腰を掛けさせるのであるけれども、その阿片室を指さして「サアどうぞこちらへ」といふ。固より阿片臺は二人同時に之を喫み得るやう設備されたゆつたりとしたものであつて、中央に阿片盆の載つけられるやうな結構な長方形の臺が置かれてゐる。さうして枕許と左右の縁の三方を取圍んだ所の彫刻美に富んだ裝飾が、低くはあるが、衝立の如くに取附けられてゐる。大きな枕が用意されてゐる。そして敷物には黒光りのした獵虎の毛

皮などが擴げられて、夏の汗ばんだ氣持ちのする時など手觸りのよいことは素敵だ。冷つとした感じが興へられて、何とも云へぬ。何から何まで不自由なく出來てゐる。家庭に在つては斯うした美しい阿片臺こそ、そこになだらかな氣持になつて體も横たへられ、阿片氣分を十二分に味ふことが出来る。阿片には持つて來いの好設備である。かう云つた阿片室は普通の二階の奥邊りに設けられてゐる。或は後房の奥などにも設けられてゐる。そしてその臺の左右には鉢植だの、蘭花の花瓶などがあり、馥郁たる香が鼻を刺戟して、居心地は決して悪くない。やがて無駄話を取交し、四方山話に興が乗つてくるといふと、主人公は思はず知らず、既に阿片の煙管を手にして、ソロ／＼豆ランプを手近に取り寄せ、之に火を點じたり、豫ねて用意された阿片膏を篋で取つたりなどして、その支度に取り掛つてゐるのである。

家庭内部に阿片室の設備のある家と云ふと、無論、中流程度以上のうちである。けれども、元來が趣味に亘るものであつて、嗜好品として第一のものである阿片くらゐ、その奥深く、又その氣持の打込まれたものはないのであるから、品物を質に入れたり、借金をしたりしてでも、猶この阿片の用意に取りかゝると云ふものは少くない。それ故そこからの見かけは中流以下の貧民の

家のやうに見えてゐても、その實奥に這入つて見ると、比較的洒落た阿片盆を置き、總べての七つ道具をも完全に取揃へて、その主人公の阿片趣味のあり／＼と物語られてゐる光景を見ることがある。中には又極めて簡單で、旅行用に拵へてある阿片の道具類一切を、そのまゝ家庭の寢臺の上に置いて、いつ何時でも喫めるやうに、支度のされてゐるところもある。

これ故支那の家庭に行きなり主人を尋ねるやうな場合があつても、主人は形式強つて應接間で面談をしてゐることがある。しかし突如として時計を打眺め、ちよつと失禮しますからといつて、重々しく緞帳の下つてゐる所から次の部屋へと姿を隠すことがある。かういふ場合にはこちらでもひとりで「ハハア」と合點して、餘り後を追窮しないが宜い。無論晝間の時ならぬ時に自分で奥の部屋に這入るなどいふのは、阿片の時間が來た爲めであることはいはずして察せられるのである。

主人によつては之を人に知られることを多少恥ぢて居る者もあり、又遠慮勝ちになつてゐる者もある。極めて親しい間であるならば、目でこちらに知らせたり、指の恰好で阿片を喫ふ意味を示めしたりするのであるけれども、そこまでしないものが多い。時折緞帳の間から阿片臺に横

つてジー／＼音をさせながら煙を上げてゐる光景を幽かに見ることがある。神経質の人は側に近寄ると、阿片で中毒をするといふ心配のあるところから、三尺以内には近寄つてはならないといふ者もある。しかし必しもさう神経質にならなくても宜い。親しい間なれば共に阿片臺に座を占めて、そしてその側近くで話して居つても決して悪くはない。又眞に親しい間柄なれば「自分はいから失禮するが、先生も一つ喫みませんか」といつて誘ふ位な氣持を持つてゐるものもある。初めは遠慮をして「いや結構です」といつてゐても、二度、三度と煙管を出される。仕舞には阿片膏をキセルにあてがひ温めて世話のないやうにし、ただ口を當て、喫へば宜いだけにして呉れることもある。これは煙草を勧めたり、酒を勧めたりする以上に、親切にその趣味を分たうといふのである。人によると、それまでして呉れても、尙物恐ろしい感じがして、毒でも飲まされるやうな心配のする處から之を斷つてゐる。相手の主人は併し何處までも同じ樂みを分けたい意味から御馳走をしようとするのである。そこで止むなく支那服の袖で煙管の吸口を拭き清め「サア如何です」といつて鄭重に持てなして呉れる場合もある。かうした阿片を仲立としての社交氣分は頗る努めたりと云ふべしである。さうまでして持てなして呉れてゐる氣持を、それをも無

下に斷るといふのも宜いことでない。又阿片に就ての眞の味眞の氣持を味ふ上から、如何に支那の人々は阿片の別天地の樂しき味を持つてゐるかを體驗し、研究して見ることは、滿更ら悪い事でもないといふであらう。

ただ日本では法律の上でそれが八釜しく、規則面からは犯罪行爲を構成するわけになる。その點で恐れてゐる者が多く、臺灣邊りでもその規則のやかましい爲めに、無理にその趣味嗜好を抑壓してゐる手台が少くない。滿洲國の將來、殊に財的方面の收入を殖す意味からいつても、その生命よりも大切な阿片の妙味に耽溺するといふことは、恐らく滿洲國の彌榮えに榮えると共に、將來平行してゆかなくてはならぬところであらうと思はれる。醫學上とか、法律の上とかいふことを超越して、阿片の天下では常に之をこの世の絶對のものとして考へてゐるのである。従つて滿洲であらうと、支那の一般家庭であらうと、この阿片室の設備ばかりはなくてはかなはぬものとせられてゐるのである。滿洲國を日本の生命線として見てゐる日本人は、之に對して如何なる見解を持つや。大いに朗らかに考慮を費やすべきものであらうと考へる次第である。

阿片の密輸と煙管

滿洲でも、支那でも、家庭住宅内に、便所の設備の無い家は少くない。數萬圓から掛けた良家の住宅にしても、之に宿泊して見て、特にその便所の無いのを見ることさへある。それ位に便所のことはどうでも宜いことに見なされてゐるやうである。ところが主人公の趣味に基く阿片室、阿片臺の設備は何處かに大抵設けられてゐる。その之を携帯して旅行の時でも忘れないやうにするといふ一事を以てしても、如何にその日常生活に阿片の重大視されて居るかといふことが分る。ただ巻煙草の如く携帯の方法が簡單に行かないこと、その道具を取揃へることの面倒と、その容積のかさばる點から考へられてゐるのである。併し奥地には到る處に煙館と稱して阿片を喫する専門のうちがある。一種のカフェーのやうな所が出来てゐて、客が出入してゐる。これは支那の茶館とも違ひ、俱樂部とも違つてゐて、阿片専門の店である。通な人であると、大抵之を知つてゐる。雲南、貴州を初めとして、南支那の奥地には、殊にこれが盛んである。罌粟の栽培の盛な所には、これが必ず伴つて出来てゐる。

煙館には某方面からヘーホーの密賣を營みに来る者があつて、始終隱密の間に取引が行はれてゐる。田舎では官憲の目を忍び、その方面の商品の手荷物を持ち、こゝに逗留して居ることを人に分らせる爲め、時折り支那宿の壁の一隅に或る種類の札を下げる。客はその札の出たのを見て喜び、早速其處へ求めに出掛ける。若しその表向きの税金を拂はないものならば、價が高くないと云ふので、裏を潜つた遣方を求めて、隨所々々その方面の商ひがひそくと取り行はれてゐる。地方によつては交通の不便な所は民船に依つて之を菰に包んだまゝ運ぶのである。四川の奥地邊りで旅行中、峽中の船で見てゐたところが、このやうなものがあつた。江上で前の船の體の所に二尺大の菰包みを靜かに波間に投じたものがある。すると菰は浮び、波上に又は瀬に弄ばれて、クル／＼廻つたり、流れたりしてゐることもあるが、結局は浮び上つて流れて行くのである。或る地點にまでそれが来ると、そこへ或る目的を持つてゐると思はるゝ小舟がやつて来る。船頭は櫓を打ちやらかし、體をかゝめて兩手を伸ばし、その流れて来たた菰包みを靜かに持ち揚げるのである。云ふまでもなく之を落した人間と、しもの方で之を取り揚げてゐる船頭との間には、或る種の默契が成立つてゐる。そしてその波間を流してゐたその距離は、かなり長くは

あるが、そこには必ず某税関の詰所がある。税関に表面上之を出して通關するとすれば、頗る高い税が課せられるのである。だからそこを要領よく通れてくたしたわけである。そこで税関から遙かしも手のところでその流し物を拾ひ手に入れ、それをその附近の某煙館に届けるのである。斯様にして奥地では表面上税関の統計に現れて来ない阿片が、どの位あることか分らないのである。

四川省にはあの揚子江の三峡の峻があり、急流激湍渦巻の百哩以上も續いてゐる所があるといふ物凄い難所であるが、さう云つた所にも、尙人間の抜け目ない仕事、命を的にしてまでも行はれ、その難所を突破して、阿片の密輸送と脱税の仕事がうまく行はれてゐる。そこには少なからぬ地方住民が之に關係を有し、ぐるになつてその利益の分け前に與つてゐるといふことである。その阿片の収入といふものは驚くべきものであつて、これが或は地方の官憲の手に、又土豪の手にと分配されてゐる。税関の役人にしたところで、その脱税の秘法を知らないわけではない。知つて知らない振りをしてゐて呉れたといふ事實に對して、年に三度の謝禮報酬が来る。それに均霑し得ると云つた仕組にもなつてゐる。四川入りときは三峡で有名なピンシャンバ(平善壩)

の税關邊りで、幾度か自分はその話を聽かされたものである。人里離れたあの秘境に於ても、斯うした金儲けの巧みな方法が講ぜられてゐるといふことは、流石に支那である。支那なればこそ、これ程不便な巴蜀の入口で以て、阿片を中心にして、大きな金儲けの非常手段が講ぜられて居ることが見られるのである。

阿片は支那の財源

地方の軍閥とか、或は督軍階級の一流どころの邊りにありては、苟しくも兵をおくと云ふ以上、數萬の兵隊、數十萬の味方が養はれてゐる。さうするには、普通生ぬるい税金の取立くらゐの方法では大きな仕事は出来ない。やはり一手で以てこの阿片賣買の元締を操縦するとか、それが咽喉を押へるとかいふ所のコツを握らないことには始まらぬ。さもなくて大きな臍繰りは得られない。アメリカの士官がスーツケースに入れて長江の下流を内職半分に動いてゐるとかいふ噂も耳にしてはゐるけれども、支那の大官將軍あたりのやつてゐるその方面のやり方と、その収入といふものは、流石に大陸的であり、桁が大きい。それ故表面上に見えてゐる支那財政上の運用と、

そのからくりの状態といふものは、恐ろしく人に隠れたものがあり、又外人あたりの想像し得られないものが幾らでもあるのである。支那を云々するものは、せめて、それ位の所を豫め知つてゐて物を云はなければ、てんで相手にされない。支那の認識などといふことも、かうした裏面の本當の消息に通じてゐなければ、眞の理解のある理解は出来ないと云ひたい。滿洲國の將來にしてみたところで、たゞ法律の上や、兵力の上でのみ優越観だの、生命線だのといふだけでは、始まらない。その隠れた裏に阿片を中心とした財力の力、又民族的の趣味、命を懸けてでもこれと心中するといつたあの住民の力強い或る黒い線、この黒線を本當に掴み得る人にして、初めて滿洲の將來を認識し、之を論じ得る人である、と云ひたいのである。

支那の阿片に就てはまだく述ぶべきことがある。その支那の奥地で見聞した事について述べれば、雜貨の中に之を胡麻化して入れ、商ひをしてゐることがある。又罂粟の花が咲いたとか實が成つたとか、之を製造したとか云ふ度に、少からぬ税金を課けて、絞つてゐるところもある。その都度々々の課税に依つて、地方の役人や土豪連中が皆それくうまいことをしてゐる。さういふ方面の實際に隠れた社會生活、騰繰りの運用と云ふものはうまく行はれてゐる。このこと

は、日本の大蔵省や、又は經濟學の専門家や、その他支那を論ずる人々の常識の中に十分に置いて載かなければならない事である。ただハイカラな人道問題だの、或は阿片は野蠻的であるなどと評することにのみ得意がつて論じて見たつて、その實際に見る世相の裏面が本當に阿片と心中するといふその心境にまで來てゐる。この事實に依つて支那四億萬の民衆は生きてゐるとも云へる。そのこの處の大事なコツを知らなければ、殆んど支那の生命線なるものを論じ得る人とは云ひ得ない。近來は白人がオピウムを野蠻視したからと云つて、白人の尻馬に乗つて、たゞヒューマニズムの上から之を悪く云つて見たりするだけのことで、本當に生命線にまで立入つて、肯綮に當つた觀察をするの信念がない。又支那民族の趣味嗜好の上の本當の同情心もなくして、ただ之を冷眼視するだけでは、何等意味を爲さない。又この阿片の爲めに、その中毒患者が道で行き倒れとなつたり、惨めな最期を遂げたりすることは、日本の癩病患者がその病の爲めに苦死してゐる以上に同情すべきことである。が、併し精神的方面からいつて、阿片と心中し、その感極つて愉快なる無我の境に這入り、それで極樂往生が出来たといふのであつて見れば、別段それをさうやかましくいふの必要もないといふ議論が立ち得るではないか。あの統計の取りにくい支那に

在つて、四億八千五百萬の中、何百萬分の一が、この爲めに斃れるわけになつてゐるかはハツきりしない。けれども長江の大氾濫だの、或は疫病だの、動亂だの、種々な天變地異の爲めに、命を捨てる者の多い支那のことであるから、おぼ目に見て阿片を認めて置くことは、必しも害毒を無限に流すものやうに考へなくともよいと思はれる。

表は表、裏は裏

支那には近代の社會現象として拒毒會なるものが出來た。そして盛に漢民族を滅すものは阿片であるといふ立前の下に、阿片をたとへて毒蛇の形に表現し、學生は萬年筆を持ち、兵隊は劍を持ち、農夫は鋤鋤を持ち、大工は槌を持つて、と云ふ風に之を八方から退治なければならぬと云つた民族的の叫び聲を大きくしてゐる圖柄を見る。併し幾らその拒毒會が聲を大にして見ても、一向に阿片の習慣は廢つて行かない。のみならず上海でも、天津でも、廣東でも、何れの地方に在つても、皆阿片は盛になる一方である。又阿片は巨利を博する收入の主要なものであるとまで考へられてゐる。かの熱河の地が滿洲國に於て財的に重きを爲してゐるといふのも、實はその嬰

粟畑からあがる阿片の收入そのものであり、滿洲國の財政の上にも、阿片收入は間接税としてどのくらい重きをなしてゐるかは、人の能く知る所である。それ故高所大所から見ても、ハイカラな阿片撲滅策などいふことは、暫く考慮して見るべきではないかと考へる。

更に阿片の代用としてモルヒネ、即ちモヒを注射する習慣が、これ亦少からず行はれてゐる。この阿片の體に及ぼす影響に比して一層宜くないといふ學説が傳へられてゐる。身體は股から腕から、尻からと、凡そ皮膚面のあらん限り細かい膏藥貼りで一面に蔽はれ、殆んどその中毒者を見る影もない悲惨な光景を目のあたり見てゐる。併しこれも阿片と同じことで、その一旦中毒してしまへば、之を廢めるわけにはいかなくなり、やめた時には體に異狀を來して、死人の如くになつてしまふ。それ故支那に在つては、モヒも亦矢張り全國的に一般にひろく根強く行はれてゐる。某製藥會社などは、それを入れることに依つて、少からぬ利益を博し、その社長、取締役、販賣部長、賣子なども、その邊はよく分つてゐる。けれども、此處にはその點は公表を差控えて置きたい。支那でマーフエといへば誰れしもその發音に依つてそれと感付くのである。少量の藥は體に效き目があり、モヒの注射なども行はれてゐることは、周知の事であるが、これは常時注射

してゐると、體が免疫性になつてしまふ。すると、之を中絶すれば體に變調を來すといふ程度にまで進むのである。この中毒患者の氣持は、普通一般人の想像で以て、之を律するわけには行かないと云はれてゐる。

ヤング・チャイニーズの連中は阿片やモヒの話と云ふと、ひどく嫌ふ。人を見下した話題として、成べくその話には顔を背けてしまつて、取合はないのである。その實その父親祖父さん達は、その方面の中毒患者であつたりなどする。従つて、反對に自分はその話を穢はしいとして話をしかけられても、合槌を打たうとしない。此のころの目醒めた中華民國の青年は、阿片を何處までも退けてゐる。表面上は無論それで宜らしい。支那に論語が認められて居るからと云つて、聖人君子のみが支那に澤山居るとは思つてゐない。表面は表面、裏は裏であるから、やはり阿片やモヒの實際の世相に立脚したところの觀察をして、然る後に、その正しい認識を得るやうにすることが、吾人の最大急務であると信ずる。それが爲めこゝにはかく多岐に亘つて、阿片物語を説いたわけである。

七、パイプの煙

香煙・香實・香茶

支那の社會は昔から白髮三千丈式の話が一般に行はれ、支那四百餘州を繞る各地の話題は悉く是れ煙に捲かれるといつても宜い位に大きく、且つフリーワリとした味がある。どの邊を掴まへて見やうとしても掴まへられるわけもなく、雲煙模糊の間に浮んでゐるやうなものである。向ふに景色のあるが如くなきが如く、而かも仰ぎ見た景色は煙か霞か、ぼんやりしてゐて、そこに柔か味のあることが感ぜられる。かう云つた氣持は恐らく古の唐の李白、伯樂天の時代も、今日の蔣介石の時代も殆んど變る所はない。随つて支那には煙に關する詩文、物語は頗る多い。唐の詩人の言葉の中にも「多少の樓臺煙雨の中」と云ふのがあつて、南朝四百八十寺のお寺の屋根が雲か霞の間に打眺められるといふ、その春の光景を述べてゐる。その間の氣持は今日の楊子江南部の風景そのまゝの趣に該當してゐる。千有餘年の年代こそ經てをれ、何等雲煙模糊の氣持に變る

所はない。又支那の事を理解して行く上には、日本式にたゞ相手に向ひ、力瘤を入れ、確實にしかと握らなければ承知しないぞと云つたやうな氣持を見せてゐるだけでは、本當の支那は理解出来ぬ。支那と云ふ所はつまり掴みどころのない煙雲である、霧霞である。だから所謂雲を掴むのと同じわけで、果して之が掴めて居るのか居らないのか自覺さへも日本人には得られてゐない。これが本當の支那の姿なのである。今日、日本人が支那に對する本當の認識の出来ないといふ事實、又その困難な事情も大いにこゝにあるのである。

日本人の國民性からすると相手の國は實に飄箆以上には掴めない國柄であるから、日本人にとつて支那の煙の研究は、極めて時勢に適切だと思ふ。たゞ短氣な日本人に取つて、この煙の話は要領を得ない、馬鹿々々しいと云つて之を投げ棄て、之に食はず嫌ひをするであらう。所が此の煙の話くらの餘韻があり風韻があつて、人に當らず障らずの氣持を持たせ、その後ろに又如何なるものが隠れてゐるかも知らず、随つて奥床しくもあり、哲學的なところもあると云ふものである。つまり支那の正體はエロでもあり、グロでもあり、そこに支那の眞面目があるらしく見られるのであるが、日本では極めて古來の文人、詩人の程度の人だけにしか、その煙雨の趣が正當に

解せられてゐない。朝から晩まで算盤を弾いたり、或は法律の書物を繙いたりして居る式の人、又はポーチナスの勘定や首になる事ばかりを心配してゐたりするサラリーマン諸君にも、本當の處は解せられてゐない。若し解せられてゐるものがあつたとすると、其人は文人氣分の多分にある人であり、風人韻士である様な人に限られてゐるやうである。

支那の煙の研究、煙雨の味と云ふものは、阿片の話に次いで興味のある問題である。こは一般のシヤンエン(香煙)の話から進めて行つたら判り易いかもしれぬ。香煙とは日本では煙草のことである。同じ煙草を云ひ現すにしても支那ではこの「香」といふ字を附加へてゐる。シヤンエンのシヤンは酒のシヤンピエンを呼ぶ時にも之を用ひてゐる。香の賓と云つてこれは香賓の字で現はされてゐる。これは賓客を最も尊敬した意味にもいひつてゐるのであつて、文字の使ひ方の巧みなことは、この一例を以て見ても分る。

煙草そのものを香煙と云つてゐるだけに煙草に就ての趣味風俗は、日本で想像したやうなものではない。人を訪ねてその應接室に通される。すると日本とは違つて、主人の挨拶のあつた後熱茶が出る、續いて香煙が出る。そのとき客の之を摘むに委せてをかかないで、先以て主人自らが客

の前に立ち、その香煙を一本摘んで之を恭しく客に勧める。客が之を口に銜へるのを待つて、直ぐ主人はヤンホ(洋火)を取り、その客のタバコに持つて行つて火を點けやうとする。日本では主人に隨いてゐる秘書役やボーイにしたところで、そこまでのことはしない。ところが支那では如何なる千萬長者であらうと、客が見えれば自ら洋火を取つて自ら火を點け、さうして客の煙草にその焰を持つてさしあげやうとする、そのしほらしさ、サービス振りは、洵に至れり盡せりである。以て如何にその客を手厚くもてなしてゐるかゞこれで分る。所謂痒い所に手の届いた遣り方である。

又客の方では假に煙草が喫めないにしたところで、折角出された香煙を断るのは失禮であるといふので、一旦戴いてそれをポケットに藏ふ、さうして自分はブチエン(不吃煙)と云つて喫めないことを示すのである。或は之を答へる代りに、物靜かに左手をテーブルの下の方から二三回指を伸したまふ振るのである。これは折角の好意を受けることが出来なくて残念だといふ意味を現すしるしである。これも人に目立つやうな場所に持つて來ては失禮に當るので、成べく謙遜な態度でその遺憾極まる氣持を軽く現はせば宜いのである。さう云つた方面に頗る細やかな心遣ひが

現れてゐる。その邊は主客共に煙に卷かれるやうなところがある。

又日本とは違つて煙草はその値段も比較的廉で、埃及の葉卷にしる、その他舶來の高級品にしる、色々のが卓上に備付けられてゐる。これらも不斷餘り良いのを喫みつけてゐない人は場所柄を構はず直ぐ手を伸し、此處を絶好の機會とばかり如何にも心慌しく物欲し氣な振舞ひをして居るものがあるが、さう云つたやり方は心の裏が見え透いて、主人に肚の中が見透されるやうな感じがする。平素育ちの良い教養のある人は、幾ら良い煙草を見ても落着いてゐる。さう云つた所に人品の上下が現れるのであつて、或る意味から云つて主人が自ら客をメンタルテストしてゐると見ても宜いのである。そこへ手を出す出さぬは一つの外交上の試練を受けてゐるものと見ても宜いのである。主人が主人だけのサービスをしてゐる場合には、客としては更にそれ以上細心の注意を拂つて置かなければならない。旅慣れぬ客や場所柄を心得ぬお伴を連れて參ると、時々さう云つた點で失敗をやらかして呉れるものがある。そのときはこちらが冷汗をかくと云つたやうな話を、近親の者から聞かされたことが幾度かあつた。

又煙草に次いではお茶のサービスである。これは序ながら申添へて置く。日本では客に出され

た熱茶を幾ら冷めてから客が飲まうと、それは客の随意であるとされてゐるけれども、支那ではその習慣として、或る程度以上時間を置いて既に冷めてしまつたのを、客が取りあげて口に持つて行くのを見たときは、主人としては非常に心苦しい氣持ちになる。そこで大きな聲をして慌てゝ之を飲ませないやうに阻止する。さうしてボーイを呼付け、熱茶と替へさせるやうに命ずる。冷たい茶を客が飲んでゐるのを平氣で主人が眺めてゐるといふこと自身が、既に主人の氣のきかなかつたことになる。その來客を承知してゐて冷遇してゐると云ふ意味に取られるのである。主人の心の底が明に汲みとられるからである。それ故支那では客になつて行つたとき、茶が出されると、直ぐ熱いのを吹き、舌や唇が焼けてもよろしい、之をつとめて飲むやうにするのが禮である。

支那では心得た人は皆その習慣を無意識の間に守つてゐる。日本人で慣れない人は、話の方に夢中になると、お茶の方なんか忘れて了ふ。さうして冷め切つてしまつた時分に平氣で飲む。主人の心を痛めてゐることもお察ししないで飲み乾してゐる。さういふ時には主人に向かつてわざと自分は冷まして置いて載いて居るんだといふ事を一應云つた方が宜い。すると主人の氣持がな

だらかになる。とかくお茶を間に置いて主客相談じ合つて居る際には、思はず時間が経ち主人の忙しい體が抜きさしならなくなり、時々刻々次の仕事に差支へて來る場合がある。主人は口にごそ云はね、肚の中では最早やこの客に座を退いて貰ひたいといふ氣持の動いて來ることがある。ちやうど日本で云へば隣室で箒を逆まに立てるとか、下駄にお灸をすゑるとかいふ笑話があるが、支那ではさういふことはない。それなら如何にして主人の氣持が表現されるかといふと、その宜い加減の處に話が打切れさうな時分に、最後の熱茶を運ばせるのである。そしてそれを以て結末を付けやうとしてゐる。ところが客の方ではそれと察しないで、更に尙次から次へと一くさり二くさりと語り續ける。主人に氣が氣でなくなつて客の眼に視線を注ぐ。不辭緩つくりしてゐる時は客の顔など見ないで、壁に沿うて並べられた椅子に座を占め、反對の側の壁に掲げられた額だとか掛物、對聯だとかを見ながら話してゐるのである。ところが、最早や自分に時間の都合があつて、時の迫つて來たときは、左に又右に席を占めてゐるその客に向つて、或る種の注意を柔かく促すのである。その促し方といふのは、型の如く最後の熱茶を手を取つて、さうして口に持つて來て之を軽く一飲みし、それを卓上に置くのであるが、その時に稍々目の高さよりも高く